

牧羊者

教師の方々へ

二〇〇三年度の第3巻をお届けできることを感謝します。今回は「秋号」と呼んでも良いでしょう。頁数が少なくなっ
てどう感じておられるか、良い点や悪い
点を率直に聞かせて下されば幸いです。
各教区では、毎年、「教会学校教師研修
会」が開かれています。その時に、各教
会がどのように『牧羊者』を活用してい
るかが話し合われていることでしょう。
そこでの意見や良いアイデアなどを、ぜ
ひ編集部知らせていただきたいのです。
現場でご奉仕しておられる信徒教師の方
々に、最も適切なものをお届けできるよ
う、できるだけ配慮いたします。

しかし、「簡単に準備ができるように」という要望にはお応えすることができま
せん。準備が少なければ、子どもたちを
御心にそって育て上げることは不可能だ
からです。教師の兄弟姉妹、どんなに忙
しくて、準備だけはしっかりとしてく
ださい。それが、編集している者の心か
らの願いです。

今年度は、「教師の方々へ」というこの
欄で、本誌の実際的な使い方を説明して
います。本誌を初めて用いてくださる方
々は、特に注意深くお読みください。
本誌は、毎週続けて教会学校に来る子
どもたちを主な対象にしています。前号
で学んだ山上の垂訓はちょうど終わり、

10月からは「神の国の価値観」を学びま
す。詳しくは、4〜5頁を参照ください。
今号の巻末には、収穫感謝日用の特別
教案を用意しました。季節に応じてメッ
セージを用意しておられる教会で用いて
いただければ幸いです。一応11月23日の
日付をつけていますが、その前後でも結
構かと思えます。教会の都合に合わせて
自由に活用してください。

4頁構成の各週教案の最初2頁は教師
の学びのために用意しました。これは成
人科でも用いていただけます。
次の頁で、子どもたちに話すメッセー
ジの例が書かれています。現場での生徒
の学年や理解度に応じて、適切に取捨選
択してください。幼い子どもたちには、
付録のフラッシュ・カードを紙芝居のよ
うに用いると話しやすいでしょう。

最後のページは、分級の時に用いるワ
ークブックの説明です。ワークブックは
A・B・C・Dの4種類があります。学
年と理解度によって、最適のものを
用いてください。生徒の数だけコピーし
てくださってもかまいません。
ワークブックAは未就学児童用です。
その週の内容にそって、切ったり、貼っ
たり、塗ったりします。クラスに、はさ
み・のり・クレヨンなどを常備しておい
てください。教師は、少なくとも前日に

はワークに目をおして、用意すべきも
のをチェックしておいてください。分級
の時には、子どもたちと一緒に作業しな
がら、その日の目標が理解できるように
話してください。

ワークブックBは1〜2年生用です。
子どもたちが自分で考えて書き込めるま
で、忍耐して待ちましょう。本誌には、
毎週、その日の内容にふさわしい子ども
用賛美歌が記されていますので、参考に
なさってください。これらの曲を吹き込
んだテープがあります。必要な方は発行
所まで申し込んでください。

ワークブックCは3〜4年生用です。
最初に中心聖句を確認して、テーマをこ
らえます。いつも適用質問が用意されて
いますので、一人一人に考えさせ、決断
を促してください。できたかどうかを次
の週に反省することも大切です。

ワークブックDは、5〜6年生から中
高生まで用いられるように準備されてい
ます。これも適用を重視しています。聖
書の内容については、「中高校へのヒント」
で補ってください。

中高校のヒントは、問答形式で内容を
考えさせます。できれば自由にディスカ
ッションできる時間を設けてくだされば
と思います。これらの質問を全部する必
要はまったくありません。

目次

教師養成講座 「主に喜ばれる教会学校」(第3回)	2
年間カリキュラム	4
10月教案	6
11月教案	22
12月教案	42
収穫感謝日特別教案	58
編集後記	58

10月

11月

12月

教師養成講座

主に喜ばれる教会学校(第3回)

長島 幸雄

長島幸雄師は教会学校局の初代局長で、『牧羊者』の名付け親です。以下の講座は、『牧羊者』一九八七年4月号から9月号まで、6カ月にわたって連載されました。現在でも傾聴に値する重要な内容です。

第二にみことばの力です。孫の下に妹が生まれる時、1週間ほど母親の出産のために、母親と離れて過ごさなければならなかったのですが、そのことは、三歳になるその子どもにとっては、非常に寂しい、まだ憤りに満ちたものだったようです。ところが、ある聖日に、教会学校のメッセージの中の、「あなたには私がついていっている」という言葉が、その子どもの中に入ってきました。あなたというのは、自分のことで、私がついていっているのは、イエス様のことだとわかり、「神様がついていいるから、私は怖くないんだ」と告白するようにになりました。

ですから、大人たちが何か困ったことが起きた時、動揺して、「困ったなあ」と言っている、不思議そうに言っている、どうして困っているの？『あなたには私がついていっている』って書いてあるじゃないの」と。み言葉には、偉大な力があるということです。

私たちも、子どもと接していく時に、み言葉の

持つ力を信じて、たとえ説教は下手であったとしても、み言葉の力が子どもたちのうちに生命を与えていくのだと信じ、奉仕の動力をみ言葉においてやっていってほしいと思います。

第三に、祈りの力です。よく証しで聞きますけれど、「分級などで子どもが騒いで騒いで、もうどうにもならない。泣きだくなってくる」。そういうことを経験する時というのは、必ず祈りが不足しているのです。そんな時は「子供が騒いで困ります。どうか助けて下さい」と祈りこんでいく時、子どもがそっと話に聞き入ってくれるということがあるのです。まことに祈りは力です。

第四の奉仕の動力となるものは、信仰の力です。その後、イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ、彼らの不信仰と、心のかたくななことをお責めになった。彼らは、よみがえられたイエスを見た人々の言つことを、信じなかったからである(マルコ16・14)。

復活のイエス様によって、信仰というものは、

もう一つすばらしい力を持つようになりました。

しかし、復活されて、最初に弟子たちになされたことは、彼らの不信仰と心のかたくななことをお責めになったということ。これは、イエスが先に「よみがえる」とおっしゃったことを忘れ、また、現によみがえっていることを聞いても信じなかったことに対して、罰則を与えるかのうちに、「なに」とであるか、と、きつく叱られたのです。彼らは恐れおののいて、あらためて復活の主に対する信仰をもつに至りました。そして、その信仰は信じる者に聖書に書いてあるしるしが伴うということです。ですから、信仰の目から見れば、もう絶対、ダメだ！というものは何一つないのです。

私が40年近く教会学校をやってみて思うことは、人間というものはこんなにも変わるものか、ということ。良く変わる方の例で言いますなら、教会の中をチヨロチヨロ、チヨロチヨロ動きまわって、2階から何度落ちたか分からない子がいて、野外礼拝をする時も、教師会で話し合っていて、特別に一人監視役をつければ野外礼拝ができないという調子でした。また、教会の礼拝堂のいすの上をボンボン、ボンボンとびまわって、その子が来るや、もう集会がダメになる。ですから、先生も「どうか主よ、今日あの子が休みますように」と冗談めきで祈るほどでこすった子どもがいたのです。しかし、その子どもが中学を終えて高校に入る時、回心してガラッと変わったのです。ですから、信仰の力、復活の主を信じる信仰には、不可能が何一つないのです。

さて、CS奉仕の動力について考えてみたいと思います。」それゆえに、あなたがたは行って、す

べての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るよに教えよ(マタイ28・19〜20)。これは、大変有名な言葉であります。キリスト教の教育、あるいは、教会学校の教育ということについて、視点をどこに置くか、という面で重要なキーポイントとなるみ言葉であります。

一般に「教育」という場合は、その人の持っている特質を引き出してあげる。例えば、Aは、Aの特質があるから、それを型にはめないでAの特質を伸ばしてあげる。このように、個性を伸ばす、ということが、一般の特に、戦後における教育なのです。教会教育の場合は、全く違つのです。「すべての国民を弟子とし…」ですから、イエス・キリストの弟子とすること。つまり、ひとりひとりの個性を伸ばす、というようなことの前に、キリストの弟子化なのです。Aという個性があり、Bという個性があろうと、キリストの弟子にみんなあてはめてしまうことなのです。

教会学校の最終の目的とは何かというと、子どもに伝道し、その子どもをクリスチャンに、つまり、キリストの弟子とすることに他ならないのであります。ですから、なまじっか教育理論など学んでいると、キリスト教とぶつかってしまうことがあるのではないかと思います。教会はあくまでもキリストの弟子化することの教育、人物を造

つていくことに教会学校の焦点があるのです。

さて、そこで教師に必要な力というものを挙げてみたいと思います。

第一に、それは人を集める力です。その人がいると、不思議に子どもたちが集まってくるというような力が必要なのです。いくら先生がいても、子どもが一人も来ないのでは教育のしようがないのです。私の場合も、過去に教会学校を受け持ったとだんに、子どもが一人も来なくなってしまった悩んだ経験があります。ところが、そこを一つ乗り越えようと、不思議に何かしら子どもたちが集まってくる。子どもを集める何かが与えられているのです。それが、御霊の賜物(カリスマ)です。最初、人を集めることに苦労するけれど、後には苦労はいらない。つまり、人が自然に集まってくるのです。それは教師自身に、御霊の賜物が与えられてくる時、現実になります。

第二に、人を感化していく力です。やはり教えても、教えで入っていくものではないのです。キャンプなどの時、子どもと飲食を共にしたり、食事する時一緒に祈ったり、家族が病気だったとしたら分級と一緒に祈りましよう、というような日頃の子どもたちとの接触の中で、子どもたちに祈りの必要性を教えたり、信仰の様々な感化を与えていくわけです。そういう感化力というのが教師には必要です。その力、人が自然に集まってくる魅力を求めて、私にも与えて下さいと祈っていくことです。

もう一つはメッセージです。話の上手下手では

なくて、何か楽しい、その先生が話す子どもが聞き耳をたてて聞くというような、同じことを語っても、子どもが聞き耳を立てて聞くのと、全然聞かないのでは大違いなのです。教師はメッセージに聞き入らせる、聞き耳を立てさせる、その魅力が必要なのです。教師として、人をひきつけていく何か、人に感化を与えていく何か、話に聞き耳を立てさせていく何か、自分の方から信者になりたいと、あこがれさせていく何かという、これらの何かが大変重要なのです。

さて、この「何か」とは何でしょうか？それは、第1コリント12章に書かれています。すなわち、それは御霊の賜物です。その賜物はみんな違う。ある者は足であり、ある者は目であり、耳であるように、各々違うけれども、その霊の賜物を持っていること。それが人をひきつける何か、あるいはメッセージに聞き耳を立てさせる何か、人をキリストに導いていける何か、というこの「何か」なのです。

奉仕に力を与えてくれるもの、それは、ただ一つ。御霊による力以外の何ものでもありません。ですから、御霊の賜物を神様の前に求めるということが必要なのです。人間の欠如が丸出しのままであっても、御霊の賜物が与えられると、メッセージの時、相手に聞き耳を立てさせることができるのです。だから、私たちに人間的条件の技術がなくても、一番大事なのは、私たちが御霊の賜物に満たされるということです。

恵みふかい神

中心聖句・詩篇34・8

主の恵みふかいことを
味わい知れ。
主に寄り頼む人は
さいわいである。



第Ⅱ期

神の前に立つ備え

●神の目で見た善悪		8月3日	
8月3日	地の塩・世の光	マタイ5・10	同上
10日	殺してはならない	マタイ5・21	同上
17日	姦淫してはならない	マタイ5・27	同上
24日	誓ってはならない	マタイ5・33	同上
31日	目には目を	マタイ5・38	同上
9月7日	人の前での善行	マタイ6・1	同上
14日	神の国と神の義	マタイ6・19	同上
21日	さばいてはならない	マタイ7・1	同上
28日	求めなさい	マタイ7・7	同上
		7・12	7・7

●神の国の価値観		10月5日	
10月5日	木は実でわかる	マタイ7・13	同上
12日	岩の上の家	マタイ7・24	同上
19日	人を恐れるな	マタイ10・24	同上
26日	邪悪で不義な時代	マタイ12・38	同上
11月2日	種まきのたとえ	マタイ13・1	同上
9日	毒麦のたとえ	マタイ13・24	同上
16日	からし種のたとえ	マタイ13・31	同上
23日	収穫感謝	マタイ18・15	同上
		18・20	18・19

第Ⅰ期

神の救いの計画

●受難節		4月6日	
4月6日	進級式	ゲッセマネの祈り	マルコ14・32
13日	十字架上の叫び	マルコ15・33	同上
20日	復活の主の働き	使徒1・3	同上
		1・11	1・8

●王国時代から捕囚・帰還まで		4月27日	
4月27日	サムエル(祝福の継承)	サムエル上1・15	同上
5月4日	ダビデの選び	サムエル上16・1	同上
11日	母の日	サムエル上17・1	同上
18日	王の手を下さないダビデ	サムエル上24・1	同上
25日	ダビデの失敗	サムエル上11・12	同上
6月1日	ソロモンの盛衰	列王上3・11	同上
8日	ベレツエ	列王上17・1	同上
15日	エリヤの働き	列王上18・19	同上
22日	ナアマン將軍	列王下5・1	同上
29日	バビロン捕囚	エゼキヤ29・1	同上
7月6日	偶像からの脱出	ダニエル1・1	同上
13日	迫害からの脱出	ダニエル3・1	同上
20日	陰謀からの脱出	ダニエル6・1	同上
27日	捕囚からの帰還	エズラ1・1	同上
		1・10	1・1

第Ⅲ期

主イエスとの関係

●降誕節		11月30日	
11月30日	アドベント	肉体となつた言	ヨハネ1・1
12月7日	マことの光	ヨハネ1・9	同上
14日	ザカリヤの賛歌	ルカ1・57	同上
21日	シメオンとアンナ	ルカ2・21	同上
		2・38	2・32

●主に会った人		2004年	
12月28日	年末感謝	主のめぐみの年	ルカ4・16
1月4日	新年	ローマの百卒長	ルカ7・1
11日	パリサイ人シモン	マルタとマリヤ	ルカ10・36
18日	10人の病人	ザアカイ	ルカ19・11
25日	十字架上の強盗	ルカ	ルカ23・39
2月1日	ルカ	ルカ	ルカ19・43
8日	ルカ	ルカ	ルカ23・43

●わたしは～である		2月15日	
2月15日	いのちのパン	ヨハネ6・22	同上
22日	門・羊飼	ヨハネ10・1	同上
29日	よみがえり・命	ヨハネ11・1	同上
3月7日	世の光	ヨハネ12・44	同上
14日	道・真理・命	ヨハネ14・1	同上
21日	真のぶどうの木	ヨハネ15・1	同上
		15・17	15・5

●受難節		3月28日	
3月28日	救い主の入城	ヨハネ12・12	同上
4月4日	最高の愛	ルカ23・32	同上
11日	救い主の復活	ルカ24・1	同上
		24・12	24・6

聖書 マタイ7・13～23
テーマ 木は実でわかる

序論

今週から約2カ月間、神の国の価値観について学ぶ。最初の2回のテキストは山上の垂訓の結論部にあたる箇所だが、重点は「教え」から「実践」に移ってきていることに注意したい。神の国と神の義を求め続ける人々は、そうでない一般の人々と全く違った価値観を持ち、違った行動をとるのである。今日の箇所には、クリスチャンの3つの行動原則が記されていると言えよう。

一、狭い門からはい

ここでの「門」は、城壁や神殿に設けられている大きな門を意味している（口語訳で7・8節に訳出されている「門」は、原文にはない）。大きな門を必要とする道は当然広く、多くの人々がこの門や道を用いている。しかし、主はあえて「狭い門からはいれ」と命じられた。主がこれまで教えられたように行動する人は、多くはないからだ。昔も今も、この世の多くの人々はこの地上に宝をたくわえようと、目に見える衣食を得ることに必死である。そういう人々と同じ行動をするなら、「滅びにいたる門」を通ることになる。しかし、あえて彼らと違った生き方、すなわち、天に宝をたくわえ、目に見えない「神の国と神の義」を求め続ける少数者こそ、「命にいたる門」から、細い道にはいっていく。

どちらの門からはいなのか。広い門か、狭い門

か。主の教えを聞くだけでそのとおり実行しないなら、それは広い門からはいることである。主の命令は、私たちに重大な決断を促している。

二、良い実を結ぶ

続いて主は、「にせ預言者」が登場することを警告された。捕囚時代、エシメヤに反対して「すぐに母国に帰れる」と偽りの預言をした者たちがいたことはすでに6月に学んだ。それと同じような人々が、近い将来に登場すると主は言われたのである。「彼らは、羊の衣を着て」いるが、「その内側は強欲なおおかみである」。口では正しいことを言っているようでも、心は物質欲にとらわれているのだ。けれども、「あなたがたは、その実によって彼らを見わける」ことができる。

「良い木は良い実を結ぶ」。つまり主の教えどおりに生きているなら、必ず正しく行動するはずである。いばらやあざみが、ぶどうやいちじくのような良い実を結ぶことはできない。たとい口先で良いことを言っても、その行動が人々をキリストに導かないならその人は「にせ預言者」なのだ。どんな実を結ぶのか。良い実か、悪い実か。主はここでも、決断を促しておられる。主イエスという木につながっていないければ、決して良い実を結ぶことはできない（ヨハネ15・4）。毎日毎日、主イエスと深い交わりをもとう。その結果、神の前にも人の前にも良い実を結ぶことができるのだ。

三、父の御旨を行う

さらに主は、「主よ、主よ」と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ天にいますわが父

研究資料

(石田)

テキスト

15 にせ預言者 ここていきなり、にせ預言者のことが出てくるが、これは13・14節の命に至る狭い門をはばむ者がにせ預言者であるから警戒するようにつながつている。この15節につながつている。にせ預言者とは、神からの預言であると言いながら、自分の考えを語るにすぎず、偽りの預言をする者のことである。王に雇われて、耳障りのよい預言だけをするような御用預言者も少なくなかった。むしろ、幽にきぬを着せないで神の言葉を語るまことの預言者はわずかであった。主は終末に、にせ預言者がはびこって多くの人々を惑わすとも言われた（マタイ24・11）。15～20節で取り上げられているにせ預言者は、直接にはこの時代の律法学者やパリサイ人を指しているが、これはパウロが「にせ教師」と呼ぶところの律法主義的な指導者にもあてはまる。現代では、教会の中で人を教える立場にある人々への警告となっている。

21 わたしにむかって『主よ主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、これは、主イエスを信じている人の中にも天国（神のご支配）に入れない人がいるという意味ではない。心で受け入れているのに、主よ主よと言うだけでは入れないということである。15～20節が、おもに教える立場の人々への警告であるのに対して、21～23節は、大多数のクリスチャンへの警告である。

の御旨を行う者だけが、はいるのである」とと仰せられる。ここでも、強調されているのは行動である。しかし、「主よ、主よ」と祈ることや、また、主イエスの名によって預言したり、悪霊を追い出したり、力あるわざを行うことが、「父の御旨を行う」ことではない。「父の御旨を行う」とは、今まで主が教えてこられたように、「パリサイ人の義にまさる義」を求めて生きることである。表面上、敬虔そうにふるまったり、人を驚かす成果をあげることではなく、犠牲を払っても敵を愛し、迫害する者のために祈る生き方である。

「その日には」と記されていることに注意したい。それは、主イエスがすべての人々を正しくさばかれる最後の審判の日である。その日に、「あなたがたを全く知らない」と宣告されるなら、取り返しがつかない。主は、ここでも決断を迫っておられる。父の御旨を行うのか、主の名を自分の名声のために用いるのか、と。

結論

クリスチャンは、多くの人々の通る広い門を通ってはならない。どんなに少数でも、まず自分の罪を悔い改め、主イエスを罪からの救い主と信じて、「悔い改めの実」を結ぼう。さらに主イエスと一緒に歩む中で、「聖霊の実」を結んでいこう。このような生き方は物質的繁栄を求める多くのの人々と全く違ったものである。しかし、これこそ父なる神の御旨を行うことなのだ。その結果、さばきの日に「よくやった。忠実な僕だ」と、神の国に迎え入れられるのである。

父の御旨を行う者だけが、はいる 父の御旨とは、主イエスがなし遂げられた贖いのみわざのことだ。父の御旨を行うとは、主を心に信じて受け入れることである。決して戒めや律法を守ることではない。なぜなら自分の行ったよいわざによって天国に入れると主が言われるはずがないからである。神のご支配に入る条件はただ口で告白するだけではなく、父の御旨である主の十字架のみわざを信じることである。主はまた「神がつかわされた者を信じる」ことが、神のわざである」と言っておられる（ヨハネ6・29）。

22 その日 これは旧約聖書によく出てくる「主の日」にあたり、最後の審判の時のことである（イザヤ10・20、ゼカリヤ14・4、ホセア1・5）。あなたの名によって預言し、悪霊を追い出し、多くの力あるわざを行ったではありませんか。口先だけの信仰告白が退けられるように、肉の熱心による行いも主のさばきには耐えられない。これはまた、出来事によってその人が神に受け入れられていると判断することは必ずしもできないということである。主は、「霊があなたがたに服従することと喜ぶな。むしろ、あなたがたの名が天にしていることを喜びなさい」と言っておられる（ルカ10・20）。

23 あなたがたを全く知らない これは、主イエスと信仰による命のつながりがない、クリストのからだに属していないという宣告である。永遠の命がなければ、さばきの日には主の前に立つことができない。

聖書 マタイ7・13～23
タイトル よい実はいい木に
中心聖句 すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。
目 標 イエス様につながって、良い実を結びましょう。

導入

秋です。スポーツの秋、読書の秋、天高く馬肥ゆる秋、そして食欲の秋。まわりにいろいろなおいしい実はありませんか。神学校の庭に、なんといちじくの木があるのです。今年はとても大きな実がなつて、うれたかなと思つていくつか取つて食べました。とーっても、おいしかったです。梅雨の季節には、九州から送られてきたさくらんぼの木やブラックベリーの木も植えました。今年の梅雨はとても梅雨らしくて、いっぱい雨が降つてすごうれしかったのです。ちゃんと3本の木がしっかりと根をはりましたから。来年の春、さくらんぼやブラックベリーの実がなるのがたのしみです。みんなのお家には実のなる木、たくさんありますか。

おいしいくない実

今は柿の季節ですね。赤くてつやつやしていてウーッおいしいぞう。そしてガブリと一口。ヒエー、べっべっ。実はしぶ柿だった。なんてが

っかりでしょう。その木はしぶ柿の木なので、しぶ柿の実しかならないのです。そうです。その木がどんな木なのかは、「実でわかる」のですね。イエス様が言われるように、茨の木にはぶどうのおいしい実はありません。とげのあるあざみの木においしいいちじくの実はありません。だから、おいしいくない実をみのらせるのは、悪い木なのです。ここでイエス様はおいしい実を食べたくて実のはなしをされたのではなくて、実は「にせ預言者に注意しなさい」と言っておられるのです。にせ預言者、それは、外側は立派な身なりをしています。そして、神様のおきてのことや、大切なことやいいことや、感心するようなことを言ったり、とってもすばらしいお祈りとかします。ところが、やっていることは言っていることと全然ちがっているのです。「羊の衣を着てあなたにたのるところに来るが、その内側は強欲なおかみである」(16)と、イエス様がズバリ言っておられます。イエス様にとってにせ預言者たちはちっともおもしろくない実なのです。さて、わたしたちはどうでしょう。

おいしい実

今までに、すこくおいしい実を食べたことがありますか。子どもとき、家のうらの畑にもいちじくの木があつて、おいしい実をいっぱいつけていました。夏休みには毎朝、口の横が切れるくらい、10個くらい食べていました。シアワセ。良いいちじくの木にのこしい実がなつていたのです。ではわたしたちが良い実を結ぶためには、どうしたらよいでしょう。良い木になることば

それは、根をしっかりとイエス様とそのみ言葉におろすことです。つまり、何をしても何を考えるにも、いつでもイエス様はどう言っておられるのかなと、聖書のみことばを開いて、お祈りして従うことです。誰でもイエス様の前に、一番に結び実が「悔い改めの実」です。罪をおわびし、全てゆるされて、内に住んでくださるイエス様によって、次には「聖霊の実」―愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制―というおいしくても、すばらしい実を結んでいけるのです。

例話

けんかつ早い子どものおかあさんが、教会学校の先生の目の前にきて、「先生、うちの子がほんとうにお世話になってありがとございます」と心からお礼を言われて、次のように話してくださいました。「この前学校から帰ってきた子に、『お帰り。きょうもけんかしてきたの。いくつなぐり返してやったの』と言つて、『うん、きょうはなぐられっ放しだよ。教会学校ではね、なぐり返せつては、教えていないんだよ。ゆるしなさいってね』うちの子すっかり変わつてきてビックリしているんです」。先生はともうれしく思いました。その子はすばらしい実を結ぶようになっていったので、イエス様にとつても、大きな喜びだったでしょうね。わたしたちの心の中の実、そして外に出る実、おいしいかな。悪い実かな、良い実かな。私たちはイエス様につながって、おいしくて、すばらしい良い実をいっぱい結びたいですね。

ワーク A

●10月5日～26日の聖句―マタイ7・17

●話し方のヒント

良い木にはおいしい実がたくさんできます。もし私たちが木だったら、どんな実ができるかな。心の中がきれいな人にはおいしい実ができて、きたくない悪い実ができます。心の中の罪に気がついたら、あやまって、神様にゆるしていただき、きれいな心から良い実がたくさんできるようにお祈りしましょう。悪い実ができないよう心を守っていただきます。

●ワークについて

それぞれの木に実を分けて貼りましょう。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。

●質問2 イエス様につながった良い木には、良い実がたくさんあります。イエス様につながらない悪い木には、悪い実がなります。良い実と悪い実を見分けることができるように、具体的に話をしながら導きましょう。

●質問3 心の中に罪があると良い実を結ぶことができます。罪があると分かったら、神様に告白し、赦していただきます。そして、イエス様を心に迎え、イエス様によって良い実をたくさん結ぶことができるように祈りましょう。

ワーク C

●第2問 木になる実が決まっていることを確認します。そして、「良い実は、良い木になること」

「悪い実、悪い木になること」をも確認して、次の問に進みます。

●第3問 人間を「木」にたとえて、「実」を人間の「行い」、「言葉」、「品性」としてとらえ、分類します。教師も生徒も、自分の結んだ実を正直にとらえるように会話してください。

●第4問 良い実を結ぶためには、イエス様につながる必要があります。そのための罪の悔い改めなどのステップを、聖書を開いていっしょに確認していきます。分級教師は、予習で聖書(聖書箇所はここに限らず、多くありますが)を開き、黙想してください。

ワーク D

●1・5はみんなでディスカッションをします。研究資料や聖書講解をよく読んで備えてください。筆者は注解書を読んで考えてもはっきりしなかったことが、数人の集まりで学び、話し合ううちに「あーそうか」とみ言葉が開かれることがあります。2、3人わが名によって集まる場所にわたしもいる」と言われるイエス様が、ディスカッションの中で、み言葉の感動を与えてくださいましょう。

●2・3はそれぞれに書いてもらってください。時間の余裕があれば発表してもらっても良いと思います。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 狭い門から入る、広い門から入るとは、それぞれどういう生き方を指していますか。その結果、どうなりますか。

2 聖書中、結ぶべき良い実としてどのようなものがありますか(マタイ3・8、ヨハネ15・16、ガラテヤ5・22～23他)。

3 天国に入れるのは、どのような人ですか。

●自分にあてはめてみよう

1 狭い門と広い門、今あなたはどちらの門の道を歩んでいますか。

2 あなたはどのような良い実を結んでいますか。悪い実を結んでいないでしょうか。

3 あなたは、天国に入れるという確信がありますか。

●話し合ってみよう

1 狭い門から入る人が少なく、広い門から入る人が多いのはどうしてでしょうか。

2 現代、どのようなにせ預言者たちがいますか。彼らにだまされないためには、どうしたらよいでしょうか。

3 どうしたら良い実を結べるのでしょうか。

4 どうしたら天の父なる神の御旨を知り行えるでしょうか。

5 狭い門から入って祝福された体験、逆に広い門から入って失敗した体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 マタイ7・24～29
テーマ 岩の上の家

序論

山上の垂訓の最後で、主は、△わたしのこれらの言葉を聞いて行うもの△と、△わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者△とを、たとえによって対照的に描いておられる。前者は△岩の上に自分の家を建てた賢い人△、後者は△砂の上に自分の家を建てた愚かな人△である。△行う△か否かが、両者の明確な違いなのだ。

一、岩の上に建てた人

主は、ペテロが信仰告白したとき、△わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう△(マタイ16・18)とおっしゃった。この「岩」は、原語では「ペテロス」ではなく「ペトラ」(正確に訳すと「岩盤」である。ペテロという個人の上ではなく、彼の信仰告白という強固な「岩盤」の上に、教会は建てられる。

実際の土地では、岩盤の上に土砂が積もっている場合が多い。その土砂を深く掘って岩盤にまで達することが、堅固な家を建てるために必要なことなのである。ルカによる福音書はこの箇所を、△地を深く掘り、岩の上に土台をすえて家を建てる△と表現している(6・48)。

岩とは、主の△言葉△であるが、さらに根本的には主ご自身である。このお方こそ、私たちの信仰の土台であり、教会の土台である。パウロも、△この土台はイエス・キリストである△と言って(1コリ3・11)。主の教えを聞くことは非常に

に大切だが、その教えの中心は、主と深い交わりをすることに集約されている。私たちと主との間にあるこの世の様々な問題を取り除いて、どんな場合でも主と交わることが、最も重要なのだ。

主と密接につながったうえで、勉強をし、仕事をし、日常生活をすることが、岩の上に家を建てることである。そいつつ人々こそ、△賢い人△だ。彼らは、たとい△雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いて△くることがあっても、心配しないでよい。その家は決して倒れることはない。

二、砂の上に建てた人

岩盤に届くまで土砂を取り除くことは、容易なことではない。その労を惜しんで、砂の上に家を建てようとする人がいる。主の言葉を聞くには聞くが、み言葉に従うために払う犠牲を惜しんで、その言葉どおりに行わないのだ。「主はすばらしい教えをなさる」とは言うが、「でも現実には、敵を愛することなどできない」とあきらめる。神の国を求めるよりも、地上の富の方に心を向ける。苦しい狭い門ではなく、容易な広い門を選んでしまう。主イエスに接する時間よりも、この世で楽しく過ごす時間のほうを優先するのだ。この世の富や快楽は、砂のようにはかないものなのだ。

彼らは△愚かな人△である。苦難がなければ、その家は立派に建っているように見える。でも、様々な問題がおこるなら、彼らの家は簡単に倒れてしまうのだ。毎日毎日、主と密接な関係をもっていないのなら、苦難の時だけ主に頼ることなどできるはずがない。家は倒れるだけでなく、△その倒れ方はひどいのである△。土台の砂が流された

ら、家は跡形もなく壊れてしまう。

三、何を行うのか

主の言葉を△聞いて行う△とは、単に善行に励むことではない。主イエスと人格的な交わりをすることである。聖書に記されている主の言葉を聞くことを喜びとし、主が歩まれたように歩んでいくことである。敵を愛することができないときでも、「主よ、愛する力を与えてください」と寄り頼むことである。主が、自分にとって最も大切な方になるなら、富に心が向くはずはない。狭い門でも進んではいることができる。主に信頼する結果として、山上の垂訓で命じられていることができるように主は変えてくださるのである。

嵐の日は、私たちがこの地上に生きている時に来るだけではない。パウロは、最後の審判の日を指して、△かの日は火の中に現れて、それを明らかにし、またその火は、それぞれの仕事が多量なものであるかを、ためすであろう△(1コリ3・13)と警告する。その時に、「私の生涯の土台はキリストという岩でした」と言えるだろうか。

結論

私たちの生涯はキリスト信仰に始まり、キリスト信仰によって完成する。キリストを信じて罪赦され、キリストを信じて成長していく。どんな犠牲であっても、どんな困難であっても、キリストという岩を信頼してついてゆくんら、このお方は、困難を乗り越えて生きていけるようにしてくださいのである。

研究資料

(石田)

ここは山上の説教全体の結論であり、聞く者にこれまでのメッセージの応答を迫るところである。それと共に、直前の説教から文脈はつながっている。「それで」という言葉があり、「わたしのこれらの言葉を聞いて行うもの」(24)が、「父の御旨を行う者」(21)を受けているからである。ここで主は、ご自分の言葉を父なる神の御旨であると言っておられるが、神の子でなければ冒とく罪で命を落とすことである。たいへん大胆な発言で、これを聞いたユダヤ人たちの驚きがかかる(28)。バックストン師はここを「二種の人、二種の土台、二種の結末」とまとめている。直前の箇所と同じように、人は見た目や行いだけでは判断できず、ある程度の時間を経てわかってくるものであるというメッセージが流れている。

テキスト

24 わたしのこれらの言葉を聞いて行うもの 主は山上の説教の締めくくりとして、ただ聞くだけではなく行うようにと聴衆に決心を迫っておられる。従うか従わないか、岩か砂か、堅く立つか倒れるか、賢いか愚かかという明快な二者択一で、第三の道はないことは明らかである。旧約の預言者たちは「主がこう言われるから、こうしなさい」と説いたが、主イエスは「わたしの言葉を行いなさい」と宣言している。ここで人生は「家」にたとえられている。家を何の上に建てるのか、何を

土台にして建てるのか、岩なのか砂なのかが問われている。岩の上に建てようが、砂の上に建てようが、見た目にはわからない。しかし、山上の説教に代表される主イエスの言葉を行う者は、岩の上に建てた家のようにその人生は堅固である。平行箇所では「地を深く掘り、岩の上に土台をすえて家を建てる人」と記されている(ルカ6・48)。堅固な人生を歩むためには、岩盤層に達するまで深く掘って土台を据えるという労苦が伴う。その労苦とは、主の言葉を聞き流すのでも、頭だけで理解するのでもなく、そのとおり実行することである。行いのない信仰は死んだものだからである(ヤコブ2・26)。当時の学者たちは言うだけで少しも実行しないと厳しく批判されている(マタイ23・3)。とはいえ、み言葉の実行は自力によっては不可能である。主イエスに重荷を負っていただきながら、共に歩むことによって初めて実行できるのである。「神は、神を愛する者たち……と共に働いて……下さる」(ローマ8・28)とある。

25 雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても 主イエスの時代の民家は泥をかかわしたレンガを材料にして、雨の降らない乾期に建てた。その家の土台が本物かどうかは、雨期になってみないとわからない。主ご自身、大工として家の建て方について熟知しておられたはずである。ここで言われている雨、洪水、風は信仰にいとみかかざるさまざまな試練や迫害、誘惑などのことである。平穩無事なときは砂地に建てようが岩の上に建てようが揺るがないように見える。しかし、いったん試練の風雨にさらされると、土

台の善し悪しがものを言うようになる。箴言には「あらしが通りすぎる時、悪しき者は、もはや、いなくなり、正しい者は永久に堅く立てられる」とある(10・25)。苦しい目にあったときこそ、信仰の地金が輝いてくる。

岩を土台としている 旧約では神を「岩」にたとえることが少なくない(申命記32・4、サムエル記下22・2、詩篇89・26)。ここでの岩は「わたしのこれらの言葉」(24)のことで、山上の説教全体を受けている。

26 砂の上に自分の家を建てた愚かな人 目先のこと、表面的なことにとらわれて、本当に重要なことを見失っている人のことである。

28 群衆はその教にひどく驚いた 彼らが驚いたのはまず、山上の説教の内容であった。同時代の学者たちが律法を表面的に解釈したり、言い伝えにこだわったりしたようにではなく、神と人とを愛するという律法の精神を深めて、メッセージの骨格にしておられる。また群衆は、主イエスの教え方にも驚嘆した。

29 律法学者たちのようにはなく、権威ある者のように、教えられた 当時の学者たちが説教するとき、律法だけでなく、伝承の権威に頼っていた。ところが主イエスは、そのような伝承の権威づけを必要とされなかった。なぜなら「ご自分が神の子であることは、言葉だけでなく、行いによっても疑う余地がなかったからである。」「イエスご自身は……人についてあかしする者を、必要とされなかった」とある(ヨハネ2・24、25)。

聖書 マタイ7・24、29
タイトル 土台はなあに？
中心聖句 わたしのこれらの言葉を聞いて行くものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。
目 標 キリストという岩を生涯の土台としよう。

導入

今日はいきなりクイズです。さて、イエス様は、神様のお仕事をする30歳になるまでどんなお仕事をしていましたか。「八百屋さん」「ブー」「お花屋さん」「ブー」「お肉屋さん」「ブー」「大工さん」「ピンポンノソウです、イエス様は大工のヨセフお父さんのお手伝いをしました。きつと何軒かお家も建てたのでしょうか。お家を建てた賢い人と愚かな人のことを話してくださいました。お家を建てるとき、一番大事なことは何だと思いますか。そう、「土台」です。

大丈夫でない土台と大丈夫な土台

ロックくんはサンドくんはとても仲良し。毎日楽しく遊んでいます。今日はふたりで建てっこをして遊ぶことにしました。自転車走らせていくと、まもなく海岸です。きれいな空、青い海、しづきも白く輝いています。「よし、ここだ。ここでお家を建てよう」。サンドくんはさっそく砂浜へ行

き、場所を決めると近くの木々を集めに行きました。そして、トントん、トントん。砂の上にもみるみるうちにお家が建っていきました。サンドくんは、ふとロックくんの方を見て言いました。「おい、ロック、何やってんだ。バカだなあ君は。そんな堅い岩の上に建てようっていうの、何日かかると思うんだい。」「うん、わかっているよ。でもせっかく建てるんだからしっかり建てたいんだ。」「ロックくんは汗水流して苦労しています。」「バカなやつだよ、ロックは」と眺めながら、たった一日で家を完成させたサンドくんは、のんびり海水浴をはじめました。

幾日かして、やっとロックくんの家も建ちました。時間的に見れば断然、サンドくんの勝ち。でも、さあ大変、嵐がやってきました。ヒューッ、ヒューッ、ドドーン、嵐と波がアツという間にサンドくんのお家を飲み込み、倒してしまいました。ところが、そんな激しい嵐の中も、ロックくんのお家はびくともしません。それは岩を土台としていたからでした。遊びなら「ロックの勝ち」でいいけれど、それが大切な私たちの生涯のことにすると大問題です。丈夫な土台の上にどうしても建てなければなりません。それはどんな土台でしょう。イエス様は言われます。「わたしのこれらの言葉を聞いて行うもの、その人こそがロックくんのように、「岩の上に自分の家を建てた賢い人」です。丈夫な土台、それはイエス様の言葉であり、まだイエス様という岩なのです。自分のやりたいようにやり、楽な道ばかり歩き、富や快楽を求めるのは砂を土台とする愚かな人の人生です。必ず、倒れます。しかもその倒れ方はひどいのです。嵐

はいつくるかわかりません。世の終わりに一番厳しい最後の審判という嵐が必ずきます。岩なるイエス様を信じ、従う人こそ、永遠に守られる人生、神様と永遠に過ごせる人生なのです。今あなたの土台はなあに。今日からでも岩なるイエス様を土台としましょう。み言葉をよく聞いて従って、丈夫な土台の上にまちがいなくまっすぐ進んでいきましよう。

例話・山田彰先生の人生

16歳で高校中退。好きな映画の道に飛び込み、23歳で「お父さんはお人好し」の主役に抜きされ、二枚目スタートしてトップの座に一気にかけ上がる。月給は当時、大卒初任給が1万5千円ほどに比べ30万円。映画監督を引き連れて酒を飲み歩き、徹夜マージャン。クリスチャンの父は口を酸っぱくして忠告しました。「名声や金なんて虚しいものだ。昨日得たかと思えば今日は失っていく。神様に従っていく以外に確かな人生はない。おまえも教会に行きなさい。」「そんなのは老いの繰り言だ」と耳も貸さなかったのだが、スターの座をおろされ、妻と娘に捨てられ、心底自分に絶望し、死のうと思ひ、死ぬ前に一度父の言った教会へとポケットに残っていた10円玉で電話をかけ、教会を紹介してもらって淀橋教会に導かれました。そこで注がれ続けていた神の愛に目と心が開かれ、「生涯一証人」として熱い人生へと転換しました。巡回伝道者、塩谷キリスト教会新会堂建築を果たし、2月27日天に。岩なる土台、イエス様のみもとに70歳で永遠の生涯へと移されました。

ワーク A

話し方のヒント

さらさらの砂の上に家を作ると、すぐにグラグラしてこわれてしまいます。堅い岩の上にはしっかりと家を建てると、嵐が来ても何があっても家はこわれません。イエス様のことが大好きでみ言葉を守る人は、岩の上の丈夫な家と同じです。一緒にいてくださるイエス様が強いから、嫌なことやつらいことがあっても、弱い私たちでもグラグラしたり、たおれたりしないのです。

ワークについて

彩色して家を組み立て、完成してください。

ワーク B

- 質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。
- 質問2 嵐が来て、嵐と波が吹き荒れると、砂の上の家は押し流されてしまいます。しかし、岩の上の家はビクともしません。なぜなら、土台が硬くて頑丈な岩だからです。
- 質問3 岩の上に家を建てた賢い人のようにするにはどうしたらよいのでしょうか。それは、イエス様を信じることであり、決して変わることはない主のみ言葉をしっかりと聴き、忠実に従っていくことです。岩であるイエス様をひとりひとりの土台とし、み言葉に従って歩みましょう。

ワーク C

この聖書箇所の強調点は「み言葉を行う」という事の重要性にあります。「岩」や「土台」の重要性だけ言って終わらないように気をつけましょう。

- 第2、3問 並行記事のルカ6・48前半を開いて「地を深く掘り」に注目させます。「岩の上に家を建てる」ということは、建築現場の実際では、やわらかい地面の中に固い岩盤に至るまで杭を打ちこむ、ということなのです。
- 第4問 「み言葉を行う」に焦点をあてます。
- 第5問 「家」と「岩」がしっかりと一体化するために「杭」が必要でした。同様に、「各人の人生」と「み言葉」がしっかりと一体化するために「み言葉を行う」という実践が必要なのです。

ワーク D

- 1・2は各自に書いてもらいましょう。土台が違つことで、結果が変わって来ることを知るでしょう。
- ☆は読んで話し合ひましょう。子どもたちがどのように思い、どのように考えるかを知る時となります。岩を土台とする人だったらどうするか？砂を土台とする人だったらどうするか？など、考えてみましょう。
- 目に見えるところでは、みんな同じように仕事、勉強、日常生活を送っています。でも目に見えない土台が違います。自分とどちらを土台にしたいか、考えましょう。

中高校へのヒント

考えてみよう

- 1 岩の上に建てた家、砂の上に建てた家とは、それぞれどのような家のことですか（ルカ6・47、49参照）。
 - 2 「岩の上に自分の家を建てた賢い人」「砂の上に自分の家を建てた愚かな人」とは、それぞれどういう人のことですか。
 - 3 新約聖書の他の箇所でも、「土台」についてどのように言われているか調べてみましょう（1コリント3・10、12、エペソ2・20、1テモテ6・19、IIテモテ2・19他）。
- 自分にあてはめてみよう
 - 1 あなたの人生の土台は何ですか。その土台はいかなる人生の嵐にも、さらに世の終わりの神のさばきにも耐え得るものですか。
 - 2 あなたはみ言葉に100%従おうとしていますか。不従順を示されているがらこまかしている部分はありませんか。
 - 話し合ってみよう
 - 1 み言葉を聞いて行うことの大切さを、ヤコブの手紙を読んで話し合ひましょう。
 - 2 み言葉を聞いても行えないのはどうしてでしょうか。では、どうしたら行えるようになるでしょうか。
 - 3 み言葉を聞いて行うことによって祝福された体験、聞いても行わなかったことによって失敗した体験があれば、分かち合ひましょう。

聖書 マタイ10・24～33
テーマ 人を恐れるな

序論

山上の垂訓の結論部では、主の言葉を聞くだけの者と聞いて行う者との違いは、この地上だけでなく終わりの日に明確に表れることが宣言されていた。終わりの日のさばきを信じる者たちは、この世の人々と違った生き方をする。違った価値観を持つからである。今週のテキストで、主は弟子たちに対して、この世で反対する者たちを恐れてはならないことを、3つの理由を挙げて教えておられる。△恐れるな▽と、3度言われていることに注目していただきたい。

一、真理は必ず現されるから

当時、パリサイ人たちは主を、△彼は、悪霊どものかしらによって悪霊どもを追い出しているのだ▽（9・34）と批判していた（そのかしらの名が△ベルゼブル▽と言われていたことは、12・24に記されている）。それなら、弟子たちも悪く言われるのは当然のことである。△弟子はその師以上のものではない。けれども、そんな批判者たちを恐れなくてもよい。△おおわれたもので、現れてこないものはなく、隠れているもので、知られてこないものはない▽からだ。真理は必ず現される。主の教えと行動が、神から出たものであるのか、ベルゼブルから出たものであるか、また人々を救うものであるか、滅ぼすものであるかは、必ず現れてくる。だから、恐れないで、主が話されたことを△屋根の上で言いひろめ▽なければなら

ない（当時のイスラエルの人々はしばしば屋上で話し合っていたので、△屋上で言いひろめる▽とは、その話を公にすることを意味していた）。

しかし、パリサイ人や律法学者はその後も主を批判し続け、ついには十字架につけてしまった。では真理は現れなかったのか。そうではない。ペントコステの後に、この真理は世界に広がった。今でもクリスチャンを迫害する人々はいるが、彼らの悪は、最後の審判の日に明らかにになるのだ。

二、人は魂を殺せないから

主を批判していた人々は権力をもっていたので、△からだを殺す▽ことはできた。でも彼らは△魂を殺す▽ことはできない。それと対照的に、父なる神は、△からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるからだ▽である。からだはこの地上にある間は大切だが、だれでもいつかはこの地上の生活を終えねばならない。しかし、魂は、死後に永遠の滅びか永遠のいのちかに定められる。魂は、この地上においても、死後においても、からだよりはるかに大切なのだ。

この世の権力者がからだを殺すことを恐れて、主が話された真理を言いひろめることをちゅうちよしてはならない。神は、そのような権力者のからだも魂も、最後の審判の後に滅ぼされる。彼らに力があるのは、現在のこの地上だけだ。将来は神が正しいさばきをなされるのである。だから、権力者を恐れてはならない。

三、神が守ってくださいから

△アサリオン▽とは、ローマの最小貨幣の単位

研究資料

（石田）

24 弟子はその師以上のものではなく ここに主イエスに対する弟子の立場というものが明らかにされている。弟子が主を乗り越えることはできないというのだが、これは能力や働きについてではなく、前段階のテーマである迫害を受けることについてのことである。それはヨハネ15・20によって明らかである。弟子であると言つ以上、主と同様に迫害を受けることは覚悟しなければならぬ。しかし、私たちの受ける苦しみは、主イエスのそれと比べたら、はるかに軽いものである。

25 家の主人 主イエスが弟子たちを率いる神の家族の主人であることを踏まえての比喩である。ベルゼブル 12・24では「悪霊のかしらベルゼブル」と言われているから、悪魔を指す言葉である。主が悪魔だと中傷されているから、当然、弟子たちは悪魔の手先だと言われることを覚悟しなければならぬ。その家の者ども（オイキヤコイ）原意は「役人の部下」を表すから、指導者である主イエスが悪く言われるなら、その部下である弟子たちもそういう迫害から逃れることはできないという意味になる。

26 だから彼らを恐れるな 弟子たちは主イエスを証しするために必ず迫害を受けることが定まっております。その時を見越して心の準備をするように教えられている。しかし、弟子たちの方はすでに恐れを感じていた。だから、主は現在形で恐れる

な（メー・ホーベセーテ）と言っておられる。それでは、25節に言われているように迫害を受けても恐れる必要はないのはなぜか。おおわれたもので、現れてこないものはなく それは、神がすべてのことを明らかにして、正しくさばく時が必ず来るからである。たとえ生きている間に来なくても、終わりの日には間違いなく来る。神はその義なる性質のゆえに、公平にさばかずにはおかれな

27 わたしが暗やみであなたがたに話すこと これは主イエスがいっばん身近な弟子たちに、ひびき交えるかのようにして話されたメッセーシのことである。決して秘密の話というわけではない。それを私たちに当てはめれば、デボーションや集会において、聖書を通して語りかけてくる主の御声に耳を傾けることである。屋根の上で 当時の家の屋根は平らで、屋上と言つべきものであった。そこで大事な会合を開いたり、重要な知らせなどが叫ばれたりした。また、安息日の始まる時刻を知らせるために、屋上からラッパが吹き鳴らされた。主のメッセーシを受け取った者は、そのような大胆さをもって福音を伝えるように命じられている。

28 からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな 迫害を受けてもむやみに恐れる必要のない理由がここにも記されている。主を信じる者の魂は神の御手によって守られているので、迫害者は魂にまで触れることはできない。神だけがからだも魂も滅ぼすことができる（イザヤ

である。1羽では値もつけれないような安価なすすめでも、△父の許しがなければ、その一羽も地に落ちることはない▽。父なる神は、それほど配慮のある方だ。いわんや、△頭の毛までも、みな数えられている▽弟子たちは、△多くのすすめよりも、まさった者である▽。神が守られないはずはない。どんなに権力者が迫害しても、神が守ってくださいのだから、恐れなくてもよいのだ。人を恐れなければ、△人の前でわたしを受け入れる▽ことができる。△受け入れる▽という動詞は、ロマ10・9では「イエスは主である」と告白する」と訳されている。人を恐れず、イエスを救い主と告白することこそ、主を受け入れることなのだ。逆に、人を恐れて主を拒むなら、主もその人を最後の審判の時に拒まれるであろう。先週も学んだように、キリストを信頼しているかどうか、そして救い主と告白しているかどうかこそ、終わりの日のさばきの基準になるのである。

結論

日本人は特に人の目を気にする。人が自分のことをどう思うかで、言動を変えろ。しかし、本当の信仰者は、人の目ではなく神の目を意識して言動するのである。真理は必ず現されるし、人は魂を殺すことはできないし、神が守ってくださいのであるから、人を恐れる必要はない。主を信じていることによってこの世で不利益があろうとも、ただ主を告白して生きていこう。それでこそ最後の審判の日に、神の前に堅く立つことができる。

10・18。恐れない 神をおそれ敬うことは、人間の本分であり、真に知恵ある生き方である。神をおそれる生き方をしていると、神の守りが実感されるので、人を恐れることはなくなってくる。

29 二羽のすすめは△アサリオンで売られている△アサリオンは1デナリの16分の1の金額で、1デナリは労働者1日分の平均的賃金である。庶民にとって、すすめは安く手に入る食べ物であった。そのように何の値打ちも無いすすめでさえ、神に見守られていて、その命は神のご支配の中にある。つまり全世界のあらゆる被造物にまで神の目は行き届いている。しかし、神の最大の関心は、最高の被造物である人間である。神は一人一人の髪の毛の数もご存知であるほど、私たちに目を配っておられる。だから人を恐れる必要はない。

32 受け入れる（ホモロゲオー）本来は、ありのままを言うという意味で、イエスは主であると証しすることであり、主への忠誠を誓つことである。しかし、それは往々にして無関心や拒否反応や迫害に出くわす。波風を立てないために主を拒めという誘惑もくる。ところが主は、迫害を恐れなくて公に信仰を告白する人に、永遠の報いを用意しておられる（ローマ10・10）。

33 人の前でわたしを拒む者を… イエスが主であることを告白しない者は、さばきの日に否定される（マルコ8・38、ルカ9・26、Ⅱテモテ2・12）。また積極的に拒まなくても、証しすべきタイミングに黙っているならば、それは主を否定することになりかねない。

聖書 マタイ10・24～33
タイトル 一番怖いのは

中心聖句 からだを殺しても、魂を殺すこと

のできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れなさい。

目標 どんな人も恐れず、神様だけを恐れて生きよう。 マタイ10・28

導入

みなさんがこれまで、いちばん怖いと思った時はいつ、どんな時だったでしょうか。大きい犬に追いかけられたり、学校中でのすく怖い先生(どの学校にもひとりはいますよね)に、どなられたり、海や川で泳いでいて、おぼれて、もう死んでしまうと思った時でしょうか。怖いと思うことや、怖いと思う人がいますよね。弟子たちもそうだったんです。イエス様は弟子たちに、「恐れるな」(26)「恐れるな」(28)「恐れることはない」(31)と言われました。弟子たちは何を恐れていたのでしょうか。

恐れるな

弟子たちが先生として従っていたイエス様のことを、人々はとっても悪く言っていました。「あのイエスは病気をなおしたり、悪霊を追い出したりして、それは悪霊どものかしらヘルゼブルに

よってやっているんだ」と。ですから、弟子たちもイエス様と同じように悪く言われたのです。

わたしたちは自分のことを悪く言う人々を恐れてしまっています。でもイエス様は言われます。本当のことがきつとわかる時がくる。イエス様の教えとみわさが悪霊からではなく、神様からのものだとわかる時がくる。だから、悪く言う人々を恐れなくてもいいのです。悪く言うだけではなく、もっとひどい迫害をしてくる人もあるでしょう。殺されるかもしれないことだってあるでしょう。でも、イエス様は言われます。「からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな」と。どんなに権力のある人でも、からだは殺せても魂は絶対に殺すこと、滅ぼすことはできないのです。だから恐れることはありません。

恐れなさい

でももし、からだも魂も殺すことのできるお方がいたら：そう、それが神様です。父なる神様は、すべての人のからだも魂も地獄で滅ぼす力のある方、正しくさばかれる方なのです。そして、権力者たちのからだも魂も最後の審判の後に滅ぼしてしまうのです。だから、この父なる神様だけを恐れなさいとイエス様は言われます。そして、この神様のすばらしい守りがあることを忘れないでいましょう。2羽のすずめは1アサリオン(29)、5羽のすずめは2アサリオン(ルカ12・6)、1羽おまけノでもそんな小さな1羽のすずめも、父なる神様の許しがない限り地に落ちることはないのです。イエス様を信じる人は、すずめよりもまさっているので絶対守られます。しかも、すごいこと

に神様はわたしたちの頭の毛1本1本の数まで数えておられるなんて！今日からわたしたちもきっぱりと、この神様だけを恐れ、おののき、神様の守りを信じて、神様以外のものを恐がらないで進みましょう。

例話

インドネシアのパウロと呼ばれるヨセフロニ先生は、もとバリバリのイスラム教徒。「イエスは、預言者のひとりで神ではない。コーランこそ、神がマホメッドを通して、直接語られた言葉」と信じ切っていました。ある時、コーランと聖書を照らし合わせて聖書のどこが間違いが発表することになり、じっくり聖書を読んでいくうちに、ヨハネ1章を通して天からの光がさし込み、言は神、キリストは神だと信じるようになっていました。他のイスラム教徒を恐れず、ありのまま発表／教会へ行き、受洗準備を2年して受洗／まもなく投獄され、いろいろ質問されても先生はハッキリとクリスチャンとして答えました。時に「電気ショック」のごもんを受けたのですが、実はそれによって今まで痛んでいたリュウマチがなおったと言われます！

6年の間にヨセフロニ投獄のニュースは全世界に伝えられ、釈放後は世界中で証詞する道が開かれてきました。イスラムの雑誌に「ヨセフロニを亡きものに」と書かれても、先生は天国への確信をくださった救い主キリストと父なる神のみを恐れ、イスラム教徒たちへの熱い救霊愛に燃えて、イスラム宣教に日夜励んでおられます。父なる神様は、真に恐るべきお方です。

ワーク A

話し方のヒント

どんなにおそろしいことがあったとしても、たとい死にそうだと思ふようなこわいことでも、神様に守られている私たちは、こわがらなくてよいのです。小さなすずめも守られる神様は、私たちのことをすずめよりもっと大切に思い、いつでも守ってください。人にどう思われるかと心配したり恥ずかしがらずに、誰にでも神様のことをお話ししましょう。そして、神様に喜んでいただける子どもになれるようにお祈りしましょう。

ワークについて

小鳥に彩色して、巣の中に入れてください。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。また、神様がどんなお方か、確認し合いましょう。

●質問2 弟子たちはイエス様を信じて、従っていたために、苦しくてつらい迫害をたくさん受けました。子どもたちに、迫害を具体的に、分かりやすく教えましょう。

●質問3 イエス様を信じて従う時、人々から悪口を言われたり、いじめられたりします。しかし、人々ではなく、まことに恐れるべき神様を恐れ、神様が守って下さると信じ、イエス様と共に歩むことができるように祈りましょう。

ワーク C

●第2問 人を恐れた時の気持ちを選びます。

●第3問 人を恐れる理由を探ります。痛い、怖いという表面的な思いの裏に潜む、罪・高慢・不信仰もあると思います。すべてOでもOKです。会話の材料に用いれば良いのです。

●第4問 「神様を畏れる」と「人を恐れる」で、字を変えています。「畏れ」は「畏怖」で、おそれ敬うこと、「恐れ」は「恐怖」ということです。「神様を恐れる」という言葉は、「ばちを当てる恐ろしい神」という恐怖感が先立つ日本神観に陥りがちです。「おそれ敬うべき親しい愛の神様」という聖書の神観を握ってワークを進めましょう。

●第5問 実際の生活の場面を想定し、具体的に生徒と一緒に考えましょう。

ワーク D

●「恐れるな」と言われても、実際には「恐ろしい」というのが正直な気持ちかも知れません。3つの例話を用意しました。こんな時の気持ちを聞いてあげましょう。正直に言える雰囲気大切にしたいと思います。

●こんな時、何が一番心の支えになるでしょうか？弱音をはけること、同じ仲間がいること、助言してくれる人がいること、わかってくれる人がいること、祈ってくれる人がいること…。そして、何よりもイエス様のみ言葉と真の審判者なる神様がいてくださることではないでしょうか？

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 主イエスやその弟子たちが「悪く言われる」のはどうしてですか。

2 福音は、隠そうと思って隠せる性質のものでしょうか。

3 人を恐れないで、神のみを恐るべきなのは、どうしてですか。

4 人前で主イエスを拒むと、どうなりますか。

5 この箇所から、父なる神はどのようなお方だと言ったことができますか。

●自分にあてはめてみよう

1 これまであなたが恐れを抱いたのはどのような場合でしたか。特に、人前で信仰を表明することを恐れたことはありませんか。その時、どうして恐れたのでしょうか。

2 神の守りがあったと感謝している出来事を振り返ってみましょう。

3 もし迫害の激しい時代になったならば、あなたはどのように過ごしましょうか。

●話し合ってみよう

1 人を恐れると、どういった心理状態になりますか。どうしたら恐れから解放されるでしょうか。

2 聖書の中から、神を恐れて勝利した実例や、人を恐れて失敗した実例を調べてみましょう。

3 神を恐れて勝利した体験や、人を恐れて失敗した体験、恐れから解放された体験等があれば、分かち合いましょう。

聖書 マタイ12・38〜45
テーマ 邪悪で不義な時代

序論

今日は、主を信じる者の価値観はこの世の価値観と違うことを学んでいる。今週のテキストでも主は、△邪悪で不義な時代は、しるしを求める▽と、目にみえるしるしに価値をおくこの世の生き方を痛烈に批判しておられる。このような時代に生きる人々は、明確な価値観の転換がないなら、終わりの日に、罪に定められるのである。

一、しるしを求める時代

この時、律法学者やパリサイ人たちは、△しるしを見せていただきとうごいます▽と、主に問うている。謙そんに尋ねているように見えるが、実は議論をふっかけに來たのだ。彼らは、主が行っておられたいやしや悪霊追放を、正當な△しるし▽と認めず、△天からのしるし▽（16・1）、つまりさらに超自然的な出來事を求めたのである。△邪悪で不義な時代▽は、昔も今も目に見えるしるしを求める。目に見える物や金こそが、幸福な生活の条件だと考える人々で満ちている。

しかし、主は、△ヨナのしるし△のほかに、なんのしるしも与えられない▽と答えられた。これは、主の復活の預言である。復活こそ、いやしや悪霊追放をはるかにしのぐ△しるし▽だが、実際には彼らの多くはそれを見ても信じなかった。彼らの心が△邪悪で不義▽だったからにほかならない。主の言葉を權威あるものと受け入れず、反対ばかりしている彼らは、主が何をなさっても△しるし▽とはみなさないであらう。

二、悔い改めない時代

二ネベの人々は異邦人であり、邪悪な生活をしていて、△ヨナの宣教によって悔い改めた▽。同じく異邦人であった南の女王も、神が与えられた△ソロモンの知恵を聞くために地の果から、はるばるきた▽。しかし、ヨナにも、ソロモンにもまさった神の子キリストが、この時代に來られたにもかかわらず、当時の多くのユダヤ人はこの方の宣教によって悔い改めせず、神の恵みを求めようとしなかった。だから、二ネベの人々や南の女王が△彼らを罪に定める▽のである。

△罪に定める▽という動詞は未來形であり、最後の審判の時におけるさばきを意味している。眞の審判者は主イエスご自身であり、二ネベの人々も南の女王も、そのさばきの場において、証言するのである。異邦人でさえ悔い改めたのに、ユダヤ人は神の御子が來られても悔い改めようとしなかった。その結果、神は彼らをさばかれる。主はここで、当時のユダヤ人の不信仰を際立たせるために、このような表現をされたのであらう。

三、主イエスが不在の時代

主が最後になされた△汚れた霊▽の話は、これまでの文脈との関係から解釈されねばならない。主は、それまで何度も汚れた霊を追いつけられていた。しかし、それだけで、主を心に迎え入れていないなら、汚れた霊は再び戻ってくる。いや、それだけでなく、△自分以上に悪い他の七つの霊と一緒に引き連れてきて中はいり、そこに住み込

む。そうすると、その人ののちの状態は初めよりももっと悪くなるのである▽。汚れた霊が出た後に、だれがそこに住むのが、本当に重要なことなのだ。主は、汚れた霊を単に追い出されるだけではなく、その人の心の中に住んでくださる。復活はその△しるし▽なのである。

これは、まず第一に、イスラエルの歴史にあてはめることができる。バビロン捕囚後、イスラエル人は偶像礼拝と縁を切った。しかし、その後パリサイ的な律法主義が入り込んだため、もっと悪くなったのである。主イエスを受け入れなければ、この△邪悪で不義な時代▽が変えられる可能性はありえない。

この眞理は、現代の私たちにもあてはめられる。罪を悔い改めることはまず必要なことだが、それで終わってはならない。汚れた霊が再びもどることがないように、復活された主イエスを私たちの心に迎えることがどうしても必要なのだ。

結論

現代も邪悪な時代である。目に見えるしるしを求めているが、私たちはしるしに頼ってはならない。悔い改めない時代だが、私たちは素直に悔い改めよう。さらに、悔い改めとともに、主イエスに対する信仰を堅持しよう。主は確かに復活され、私たちの心に住んでくださる。内住の主を信じる者こそが、物質中心の邪悪な世界を変革できる。日々内住の主を覚え、主の臨在を私たちの生活を通して持ち運ぶ者とならせていただく。

研究資料

(石田)

38 しるし(セーメイオン) 律法学者やパリサイ人のある人々は、主イエスが約束の救い主であるというしるし(奇跡)を求めた。彼らは前の段落で、主イエスが悪霊を追い出し、盲人の目を開き、口の不自由な人がいやされる奇跡を見ても信じなかった。それは信じようとしなかったからである。そういうことなら悪霊のかしらでもできる。だからそれだけではメシヤである証拠にはならない、もっとめざましい奇跡を見たら信じようという態度である。「ユダヤ人はしるしを請い」とある(1コリント1・22)。

39 不義(モイカリス) 姦淫とも訳され、靈的な姦淫、つまり偶像崇拜を指す。旧約では、神はイスラエルの夫であり、イスラエルは神の妻にたとえられている。彼らが偶像に心を向けたとき、姦淫を行ったと言われた(エゼキヤ3・6〜11、エゼキエル16章など)。そこからさまざまな不道徳が生じる。邪悪で不義な時代とは、まことの神を無視して、物質主義や利己主義、快楽主義に生きるこの世を意味している。それが現代では、この時代よりはるかに顕著になっている。預言者ヨナのしるし ヨナが三日間大魚の腹に保護されたのち、海岸に運ばれて生還した奇跡のことである(ヨナ書1・17)。

40 人の子も三日三晩、地の中にいる 主イエスはヨナのしるしによって、「自分が死んで三日目

に復活するしるし」のことを言おうとしておられる。ヨナが二ネベの人々に対して神の言葉であったように、主イエスは私たちにとってまことの救い主であるという神のしるしである。

41 二ネベ ヨナが宣教するように命じられたこの都は、彼の祖国イスラエル王国を圧迫したアッシリア帝国の首都で、ティグリス川東岸に築かれた大都市であった(現在のイラク中部)。ヨナ書によれば当時12万余りの人口があった(紀元前8世紀ころ)。その二ネベに、ヨナの宣教によって悔い改めが起り、人々は神のさばきから免れた(その約150年後にはバビロンに滅ぼされる)。彼らを罪に定めるであらう 二ネベの人々は、ヨナのメッセージを聞いただけで悔い改めたのに、律法学者たちは、主イエスの驚くべき奇跡を目の当たりにしながらも、悔い改めようとしなかった。これだけでじゅうぶん罪に定められる理由となる。見よ、ヨナにまさる者がここにいる 「宮よりも大いなる者がここにいる」(6)、「ソロモンにまさる者がここにいる」(42)と並列句になっている。主は預言者、祭司、王という油注がれた職務を兼ね備えておられるが、それらをはるかにしのぐお方である。これらはまた「わたしはある」という神の自己顕現を表す言葉である。

42 南の女王 これはシバの女王を指す(列王上10・1〜13、歴代下9・1〜12)。シバという国はアラビア半島の南西部にあり、地理的には現在のイエメンに当たる。ここは肥沃な地域で、輸出品も豊かであった。しかしシバの女王は、交易と

いうことを超えて、自分でソロモン王の知恵を確かめようと2千キロに及ぶ道をやって來た。このように熱心な渴きは、当時の人々の中には少なかつた。律法学者たちは目の前の主イエスを受け入れようとしなかった。二ネベの人々にしろ、南の女王にしろ、ユダヤ人が軽べつし、神の選びからもれていると考えられた異邦人が、かえって神の救いにあずかり、不信のユダヤ人をさばく者とされている。ここに救いのドラマの不思議さを見る。

43 汚れた霊が人から出ると… これはたとえ話であって、律法主義によっては救われないことを言い表している。汚れた霊(悪霊)が休み場を求めて水のない地(荒野)を歩きまわることが見つからない。そのように人が主イエスというまことの救い主を拒んで、自分の行いや儀式に頼って魂の安息を求めても見つけることはできない。

44 その家はあいていて、そうじがしてある上… 人は救われる前でも、律法と儀式の熱心な実践によって、外面的かつ一時的には立派な人間を演じることができる。

45 その人ののちの状態は初めよりもっと悪くなる 悪霊がきれいになった元のすみに戻るとき、もっと悪くたたくさんの仲間を連れて來るといふたとえである。生まれながらの人間が律法を守ることによって体裁をつくらうとしても、内側は造り変えられていない。だから気を許せばすぐに元の状態に戻り、反動として放縱に流れやすい。また主を拒めば拒むほど魂は硬くなり、いよいよ主を受け入れられなくなっていくという悪循環を招く。

聖書 マタイ12・38～45
タイトル しるしの中のしるし
中心聖句 邪悪で不義な時代は、しるしを求め。しかし預言者ヨナのしるしのほかに、なんのしるしも与えられないであろう。マタイ12・39
目標 最大のしるしである復活のキリストを心にお迎えしよう。

導入

「何かおもしろいことないかなあ…」と、よくこんなことを言う子どもはいませんか。今から2000年以上も前、イエス様の時代にも、こんなことを言うおさんたちがいたのです。それは、今日の聖書に書いてある律法学者や、パリサイ人たちがだったことがわかります。

邪悪で不義な心

律法のことをよく知っている人たちが、「先生わたしたちはあなたから、しるしを見せていただくことができません」とイエス様に言いました。すると、イエス様は答えて、「邪悪で不義な時代はしるしを求める。しかし預言者ヨナのしるしのほかに、なんのしるしも与えられないであろう」と言われました。この人々は、イエス様がすでになさった癒しのわざや、悪霊解放のわざをちゃんとしたしるしとは思わず、さらに超不思議な天からのしるし(16・1)を求めたのでした。邪悪で不義な時代とは、曲がりくねっていてよこしまであ

り、神様にそむいている人々の時代です。そして、そのような人々の心は、いつも目に見え、耳に聞こえる、興味を強く引くようなことを求めているとイエス様は言われます。これは、2000年前も今も変わりありません。神様を求めず信じない人々は、いつも外側の刺激を求めて生きています。今でも、世界でさまざまなアツと驚くようなしるしや、奇跡が行われています。けれども、イエス様は「預言者ヨナのしるしのほかに、なんのしるしも与えられないであろう」(39)と言われます。これはどんなしるしでしょう。

復活の主を宿す心

預言者ヨナさんとは、実は、だっ子ヨナさんでした。神様から逃げ出し、けれどもつかまってしまい、大魚のおなかの中に3日3晩を過ごしました。ヒエノよく生きておられましたよね。おなかの中で悔い改めたヨナさんを、神様は魚に命じてはき出させました。これは大切なことのしるしなのです。つまり、イエス様の死とよみがえりのしるしです。「人の子も3日3晩、地の中にいるであろう」(40)そして、3日目に、みことによみがえられました。

ヨナが神様のさばきを告げたとき、あの異邦人の二ネベの人々は、邪悪で不義な生活をしていたのに、心から悔い改めました。それなのに、ヨナにもまさるイエス様が来られても、人々は悔い改めることをしませんでした。死人がよみがえり、これほどのしるしの中のしるしが他にあるでしょう。死は私たちの一切のみこんでしまします。アダムとエバ以来、人は皆罪とのろいの中に死ん

でいるのです。その人々を罪とのろいから解放放つ、すなわち、霊的な死よりよみがえらせてくださるのはイエス様だけ。素直に悔い改めたいですね。そして、それだけではなく、心の中を十字架の血潮できれいにしたいだけ、その心に復活のイエス様をお迎えしましょう。

例話

有名なラジオ牧師、羽鳥明先生には、弟さんの純二先生がいます。その弟さんは、コチコチの共産党員だったのです。先生は、この弟さんが救われるようにと祈り続けました。弟さんは、この世の中で外から見える物質や金銭などが、平等に豊かに与えられることによって、人類に平和がおとずれると信じていました。それでもなんとか弟さんを説得して、ある礼拝に一緒に出席しました。メッセージが進むにつれ、明先生は、ア、これはマズイ、連れてくるんじゃないかと。しまった、と思いはじめました。なぜなら、説教者が「復活」を何度も何度も強調するのです。ああ、共産党員のガチガチ頭の弟は、こんな不条理なことを、笑って信じようとは思えないだろうと、明先生は情けなくなり、泣きたい思いでした。ところが、集会の終わりに、「今日ここをよみがえられたキリストを信じたい人は!?」と招きがなされた時、一瞬、信じられない光景が、弟さんが手を上げて前に進み出ているではありませんか！

ヨナのしるし、イエス様の復活のしるしこそしるしの中のしるしではありませんか。さあ、私たちも心の内にこの復活の主をお迎えしましょう。

ワーク A

話し方のヒント

●「イエス様が神様だという証拠をみせてみる」と言われたことありますか？一番の証拠は、イエス様が十字架にかかって死なれた後、三日目によみがえられたことです。イエス様の十字架と復活が一番の証拠なのです。私たちは心の中の罪をおわびしてゆるしていただき、私の代わりに十字架にかかってくださったイエス様に感謝して、よみがえられていつも私と一緒にいてくださることを信じましょう。

ワークについて

「イエス様大好き」カードをつくりましょう。

ワーク B

- 質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。
- 質問2 ヨナは大きな魚の中にいましたが、吐き出されました。イエス様は十字架にかかって死なれ葬られましたが、死から復活されました。これらの意味を知りましょう。そして、私たちが求めるべきしるしを明確にしましょう。
- 質問3 現代もさまざまな奇跡があります。しかし、イエス様の復活のしるしこそ、神様が私たちと与えて下さった、何にも優る、最もすばらしいしるしだと確信し、復活されたイエス様を信じましょう。

ワーク C

●ワークの題は、パリサイ人・律法学者の叫びですが、実は我ら罪人の心の叫びでもあります。

●第2問 ②が正解です。

●第3問 パリサイ人・律法学者は「しるしを見せろ」と言いましたが、実は、すでに確かなしるしと与えられていることを3つの点から確認します。聖書を開いて準備してください。

●第4問 次は、イエス様が「預言者ヨナのしるしのほかに、与えられない」と言われたことは、つまり、イエス様ご自身が十字架で死んで陰府に下り、三日目によみがえられることを意味していることを学びます。これ以上のしるしはないこと、それがすでに完了した事実として私たちに与えられているということを確認し、そのしるしを握らせます。

ワーク D

- 世の多くの人は神仏にしろし(奇跡)を求めているようです。そして、時にはイエス様に議論を吹き掛けてきた律法学者やパリサイ人のように、クリスチャンに対して議論を吹き掛けます。
- 例話の人物もそんな一人です。個人的な悩みや問題をかかえているわけではなく、キリストを信じる人が病人のままで治らないことをあげて、キリストは神ではないと言いたいようです。このような人物に私たちはどのように接すればいいのでしょうか。ディスカッションをしましょう。
- 1・2は各自、自問自答しても良いと思います。

中高校へのヒント

考えてみよう

- 二ネベの人々は悔い改め、南の女王はソロモンをはるばる訪ねたのに、律法学者やパリサイ人はイエスを信じようとしませんでした。両者を比較しながら、その理由を考えてみましょう。
- 律法学者やパリサイ人が、主イエスにしろしを要求したのはなぜですか。
- 「預言者ヨナのしるし」とは、何を意味していますか。
- 救いに必要な条件は何ですか。
- 自分にあてはめてみよう
- あなたも特別なしるしを求めていますか。
- あなたも心の中から汚れたものを追い出しただけで満足していませんか。
- 現在、あなたの心の中を占めているものは何ですか。
- 話し合ってみよう
- 何によって「イエスは主である」と信じることができるのでしょうか。
- 現代も、「証拠を見せろ」と言う人が少なくありません。彼らにどう接したらよいのでしょうか。
- 現代、様々な奇跡や不思議な現象が強調されることがありますが、どう考えたらよいのでしょうか。
- どのようにして罪が示され、十字架による救いを得ることができたか、救いの体験を分かち合いましょう。

聖書 マタイ13・1～23
テーマ 種まきのたとえ

序論

今週から3回、主イエスのたとえ話を通して、神の国の価値観を学ぶ。主は、パリサイ人たちの反対が激しくなったとき(12・14)に、たとえ話を用いられ始めた。たとえ話は、聴衆たちの身近な経験を引用して真理を教えるものだが、それとともに、真理を求める心を持つ者と、批判するだけの者とを区別する方法でもある(詳細は研究資料を参照)。聞く者たちの価値観が問われるのだ。それぞれのたとえ話を、主がどのように説明されたかを見るなら、そのことがよくわかる。

今週のたとえ話は、しばしば「4つの種」と言われるが、種は4つとも同じで「御国の言」である(19)。しかし、種がまかれた土地は非常に違っていた。これら4つの土地は、何をたとえているのだろうか。

一、道ばた

当時の農夫は、歩きながら種をばらまいていた。そのような粗放的農法のゆえに、ある種は畑のそばの道ばたに落ちる場合もあった。△すると、鳥がきて食べてしまった▽。主はこのことを、△悪い者がきて、その人の心にまかれたものを奪いとって行く▽と説明された。種は、芽も根も出すことができなかったのである。

この土地は律法学者たちのことをたとえているのだろう。彼らは、主が△悪霊を追い出しているのは、まったく悪霊のかしらベルゼブルによるの

だ▽(12・24)と批判していたが、彼ら自身こそ、悪い者、すなわち悪魔(サタン)によって牛耳られていた。主のことは、一つとして彼らの心に定着することはなかったのだ。

二、土の薄い石地

△石地にまかれたものというのは、御言を聞く、すぐに喜んで受ける人のことである▽。太陽の熱で暖められてすぐに芽は出るが、根は石にあたって伸びることができない。石とは、△困難や迫害▽のことだと主は言われる。

パリサイ人や律法学者は、当時の宗教的な権力者だった。彼らにはむかうなら、困難や迫害は必ずやってくるだろう。それでも△御国の言▽に従っていくことができるか。これは、弟子たちにとって大きなチャレンジだった。

三、いばらの地

△いばらの中にまかれたものとは、御言を聞くが、世の心づかいと富の惑わしとが御言をふさぐので、実を結ばなくなる人のことである▽。芽も根も出たのだが、同時にいばらも出てきて、成長を妨害するのだ。

△困難や迫害▽が外側からくる妨害だとすると、△世の心づかいと富の惑わし▽は人の心の内側から出てくるものだと言える。弟子たちは、自分たちの内側にある「肉性」とも戦わねばならない。この世の楽しみを求めるなら、み言葉に従う生き方は不可能である。どれだけ多くの人々が、いばらに妨げられて結実に至らなかったことか。

四、良い地

△良い地にまかれたものとは、御言を聞いて悟る人のこと▽である。主の語られる言葉を聞くだけでなく、その意味することを悟るとき、△百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍にもなる▽。当時は、数倍の収穫で満足せねばならない時代だったので、この数字は驚異的なことだった。

△悟る▽とは、自分の心にある偏見や先入観を取り除いてみ言葉を理解し、飢え渴いた心、素直な柔らかな心でみ言葉を受け入れ、そしてみ言葉に生きて実を結ぶことである。主がメシヤであることを認めない人々は、イザヤが預言したとおり、△見ても見ず、聞いても聞かず、また悟らない▽。主の言葉を謙そんに聞く態度を△持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているもの(神からの一般的祝福)までも取り上げられる▽。

結論

私たちは毎週教会で、み言葉を聞いている。しかし、そのみ言葉はサタンに取り去られていないか。困難な時でも、み言葉に信頼しているか。富や名誉や知識を得ることを、み言葉に従うことより大切にしていないか。もしそうなら、実を結ぶことはできない。本当に価値があるのは、み言葉を謙そんに聞く態度である。この態度さえあるなら、私たちは△悔い改めていやすれ▽、自己中心的にならずに神に目を向け、罪を赦されて神と交わり、△天国の奥義を知る▽ことができる。そして豊かな義の実を結ぶことができるのだ。

研究資料

(石田)

テキスト

10 なぜ、彼らに譬でお話になるのですか 弟子たちは、主が一般の人に天国のことを話すときは、その奥義をストリートに解き明かすのではなく、いつもたとえを使われるのはなぜかと不思議に思った。弟子たちもまたそのたとえ話の意味するところを理解できなかったので、このように尋ねた(マルコ4・10、ルカ8・9)。主がたとえで話された理由には、二つあることが明らかにされている。第一の理由は、一般の人には天国の奥義を知ることが許されていないからである。許されていないというのは、直接奥義を語っても、彼らに霊的洞察力がないために理解できないからである。そういう人々には、彼らの身近にありビジュアルで興味を引くようなたとえ話が有効であった。第二の理由は、群衆が見ても見ず、聞いても聞かず、また悟らないから(13)である。これは第一の理由にある霊的に無知なことではなく、意図的な無知、つまり主の言葉に心を閉ざしていることを指している。主イエスの奇跡を見ようとせず(信じようとせず)、福音を聞くこととせず(耳を傾けようとせず)、悟ろうとしないから、主は天国の奥義をダイレクトに語られなかったのである。

11 あなたがたには、天国の奥義を知ることが許されている 奥義(ミステリーオン)とは、部外者には知りえない秘密ということではなく、神

の啓示によって解き明かされた真理のことである。弟子たちは、主を信じて新しく生まれており、霊的洞察力をある程度与えられていた。そのような人は、奥義の解き明かしを聞かされても基礎があるから理解できる。そればかりか持っている人は与えられて、いよいよ豊かになる(12)つまりたとえ話によってより深く悟ることができる。弟子たちは、あなたがたの目は見ており、耳は聞いているから幸いである(16)と言われた。彼らは心を開いて主の言葉を聴こうとしていたから悟ることができたのである。この幸いは「心の貧しい人たち、心の清い人たち」の幸いに通じる(5・3, 8)。

19 御国の言を聞いて悟らないならば 悟らないとは、主の言葉が理解できないことではなく、福音を受け入れようとしない態度、心を閉ざして聞く耳を持たないことを言う。誰でも福音に応答する責任が問われている。パリサイ人たちの心は独善と偏見にかたまって、主イエス自身を受け入れなかった。悪い者(ホ・ボネーロス)(悪魔のこと)で、主の祈りにある「悪しき者からお救いください」にもこの表現が使われている(マタイ6・13)。鳥が時かれた種を食べてしまうように、悪魔はかたくなな人の心にまかれたみ言葉を奪い取ってゆく。

20 石地にまかれたもの 聞いて悟らない人とは違って、福音を「喜んで受ける人」のことである。その中に根がない 祝福だけを求めて主イエスに自身を求めないので、み言葉のための困難や迫害が起ってくると、祝福が失われたと勘違いして信仰の道を捨ててしまうのである。根がないという

のは、主と命のつながりが無いということ、これでは信仰生活を続けることはできない。

22 いばらの中にまかれたもの ひとたびいばらが茂りだすと、あたり一面を覆い尽くしてほかの草木が成長できなくなるのである。世の心づかいと富の惑わし 人は神と富とに兼ね仕えることはできないのに、どっちつかずの態度をとるために心が分かれるのである。これは、せっかくその人の心にみ言葉の芽がはえても、この世の力に負けてしまうということのたとえである。

23 御言を聞いて悟る人 福音に耳を傾け、心開いて受け入れ、従おうとする心の態度のことである。だからそれぞれの人が、生まれつき良い地や悪い地に定められているわけではない。もしそこであれば結果に責任を負うことがでなくなる。百倍、六十倍、三十倍 これ以前の3種類の土地が全く実を結ばなかったのを見れば、最低でも三十倍ということとは比べようもない数字である。

以上、4種類の土地を例示されることによって、「み言葉を聞くわたしの態度はこの土地に当てはまるのだろうか」と自分に問いかけることになる。したがってこのたとえ話は、み言葉をどういう態度で聞くべきかを私たちに迫る。その聞く態度次第によって、結果(結ぶ実)には比べようもない違いが出てくる。このように福音に対しては、聞く側の責任がいつも問われるのである。だから、私たちは福音を聞き流すだけで従わない者であってはならない(ヤコブ1・22)。

聖書 マタイ13・1～23
タイトル 心は畑
中心聖句 良い地にまかれたものは、御言を聞いて悟る人のことである。
目 標 心の畑にみ言葉を素直に受け入れて、多くの信仰の実を結ぼう。

導入

皆さんは「種」をまいたことがありますか。小学1年生の春には鉢植の朝顔を種からまいて、きれいに咲かせた人がいるでしょう？ エンドウの種をまきました。しばらくすると、とってもかわいらしい双葉が出て、小さいくるくるしたつるも出てきて、ごんごんのびていって、やがて花が咲いたと思ったら、その次にエンドウの実が実ります。「土」ってスゴイものだと思います。もちろん、太陽や風や水も必要だけど、種を「土」の中に埋める、つまりまくと、いのちがあるので「ヨキニヨキ」と成長します。収穫の秋を迎えました。種からどんな野菜や果物が収穫されているでしょう？ 今日のイエス様のたとえ話の種は麦の種かな？ そう、たった1粒の麦がまかれても成長して穂になるとその中にはたくさんのお麦粒がでちゃいます。まかれる「土」によっていろいろです。よ、とイエス様は言われます。それは、私たちの心の畑の「土」のことを言っておられるのです。

不作の「土地」

心の畑にまかれるものは、イエス様のいのちのみ言葉です。畑のそばの道はたに落ちた種を、アツという間に鳥がきて食べてしまいました。悪魔はみ言葉を信じないように、忘れるように働いてきます。石地に落ちた種はどうでしょう？ すぐ芽が出て、根は固い石地に当たって伸びず、枯れてしまいます。石は苦しいことや大変なことだ、とイエス様は言われます。「こんないやなこと、苦しいことがあるのなら、イエス様を信じるのやめ」という人のことです。いばらの中にまかれた種はどうなるかな？ せっかく根を張り、芽を出しても、いばらに邪魔されて大きくなれません。これは心の内側のことです。この世の楽しみやお金もつけのことにふり回され、目に見えないイエス様を信じる信仰が全然なくなってしまう人のことです。とっても残念なことですね。

豊作の「土地」

ところがうれしいことにイエス様はちゃんと良い「土地」、豊作の「土」のことも話してくださいました。
黄金色の麦畑を見たことがありますか。今頃は麦はなかなか見ないけど、お米のとれる稲の田んぼも、緑の茎と葉が黄金色にかわり、実のいっばい入った穂がたれ下がっているところを見ると、わくわくしますよ。見たことのない人は、ぜひ田舎に連れていってもらって見てください。それとも、皆さんの学校でも作っているかしら？ それは良い「土地」に種がまかれたからなんですよね！
さあ、みんなの心の畑の「土」はどうか？ イ

エス様のみ言葉、大好き？ 心から喜んで素直に信じて従っている？ それなら多くの立派な信仰の実を結べますよ。

例話 ティミー少年のこと

ティミーくんとは愛称で、正しくはデモテくん、彼の両親は、アメリカから日本にきた宣教師。両親はティミーくんもたくましく育て、やがては宣教師になってほしいと、願いもこめて大胆にも日本の小学校に1年生から入学させたのです。お母さんがついて行った入学式とその次の日くらいはよかったけれど、すぐに、「ボク、もう学校いくのいやだ」と泣きべそ。なぜって、お友だちから、「やーい、何だお前の目、髪の毛、顔の色」とからかわれ、おまけに歯の治療中で前歯も抜けてみっともない。「おばけやー」と言われてつらかったのです。お母さんはお祈りしました。そしたら、神様からの知恵。毎朝ティミーにみ言葉のメモを1つ渡しました。「つらい時にはいつでもこのイエス様のみ言葉をポケットから出して読んだらよ」とティミーくんは「うん」とうなずいて、その通りにしました。木の陰や、トイレに入ってみ言葉を読み、心に力が与えられました。ある朝、お母さんはすっかり忘れたのです。ティミーくんは「お母さん、きょうのみ言葉は？」 「あらごめんさい。ティミー、あなた一番好きなみ言葉はどれ？」 「ボク、申命記33・27が心にピッタリきたよ」。

こうして宣教師一家は危機を乗り越えました。ティミーくんの心は良い「土地」となって、困難や恐れにみごとに打ち勝っていきましたね。

ワーク A

● 11月2日～23日の聖句ーマタイ13・23

● 話し方のヒント

畑に種をまいたら芽が出てたくさんの実ができます。でも鳥が種を食べてしまったり、畑に石がごろごろしていたり、他の草に邪魔されたら、芽が出なかつたり枯れてしまつたりします。あなたの心にみ言葉の種がまかれたら、ちゃんと芽が出て、実ができるでしょうか。イエス様より大好きなものが他にあったら、み言葉の種は枯れてしまいます。実を結ぶように祈りましょう。

● ワークについて

ぬりえをして絵を見ながらお話ししてください。

ワーク B

● 質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。

● 質問2 イエス様が話されたたとえ話の「道ばた、石地、いばらの地、良い地」とは、どのような地なのでしょう。私たちの生活の中で具体的にどのようなことであるか、考えてみましょう。

● 質問3 ひとりひとりの子どもが、イエス様が話されたたとえ話のどの地にあてはまるのか、具体的によく考えてみましょう。そして、どのようにしたらイエス様が喜んで下さり、多くの実を結び良い地となるのか考え、また、良い地となるように、子どもたちと共に祈りましょう。

ワーク C

● ワークは、み言葉を体験する実験場です。現実・実際ではないけれど、できるだけ近い疑似体験・シミュレーションができれば良いのです。そのため、視覚的なワークとなるように努めています。

● 第2問 まず、イエス様の「種まきのたとえ」を四種類の土地を「どんな土地」「どうなった」の項目で調べ記入します。

● 第3問 四種類の「土地」は、人間の「心」の状態のたとえです。イエス様の解き明かしをもとに記入していきます。注目は「み言葉を聞いて悟る人」は、「百倍、六十倍、三十倍の実を結ぶ」です。

● 第4問 百倍のすこさを、書くことによって体験し、「惑わしや迫害を返けて、み言葉を悟り、百倍の実を結ぶ者になってください」と祈ります。

ワーク D

● まず自分自身を吟味してみましょう。4つの畑のうち自分はどれか、考えてみます。

● 次にどこでどこで自分を判断したのか、できるだけ具体的な事柄をあげます。

● 最後の質問を読んで、具体的に答えてみましょう。イエス様は心の願いを聞いて助けて実現してください。

中高校へのヒント

1 主イエスがたとえでお話しになったのはなぜですか。

2 まかれた「種」や四種類の「地」は、それぞれ何を意味していますか。

3 「種」と「御国の言」の共通点を挙げてみましょう。

4 聖書中、結ぶべき良い実としてどのようなものがありますか(マタイ13・8、ヨハネ15・16、ガラテヤ5・22～23他)。

● 自分にあてはめてみよう

1 あなたはこれまでどのような態度で、み言葉を聞いてきましたか。

2 あなたは心の中にも、頑固、偏見、高慢な心がないでしょうか。

3 あなたは心の中にも、感情的、衝動的な心がないでしょうか。

4 あなたは心の中にも、神を第二、第三とする世的な心がないでしょうか。

5 あなたの心は、よく耕されて雑草のない、碎かれた心でしょうか。

● 話し合ってみよう

1 豊かな実を結び信仰生涯を送るためには、どうしたらよいでしょうか。

2 あなたはどのような静思の時をもっていますか。また、これまでどのような実を結んできましたか。分かち合いましょう。

聖書 マタイ13・24～30、36～43
テーマ 毒麦のたとえ

序論

今週のたとえ話も、当時の人々の経験に基づいている。△毒麦△とはシザニアと呼ばれる毒草で、その葉も茎も小麦に似ているが、食べると下痢やめまいの症状が出た。敵が畑にこの毒麦をまくということが、当時、実際にあったので、主はこのようなたとえ話をされたのだろう。先週と同様に、主は弟子たちの求めに答えて、このたとえ話の説明をされ(36節以降)、なぜこの地上に様々な悪がはびこっているかを教えられた。

一、悪魔の働き

先週のたとえ話では、種は△御国の言△だったが、今回は、△良い種△と言ったのは御国の子たちで、毒麦は悪い者の子たちである△と説明されている。さらに、良い種をまいたのは△人の子△、つまり主イエスであるが、悪い種を△まいた敵は悪魔である△と、明確に宣言しておられる。敵なる悪魔は、み言葉の種を奪い取るだけでなく、悪い種をまくことさえするのだ。主は、パリサイ人や律法学者の背後に、悪魔がひそかに活動していることを知らされたのである。

悪魔は今も活動している。△畑は世界である△と言われてるように、この世界に多くの毒麦の種をまいている。神が創造されたこの美しい世界に、なぜ多くの悲惨な出来事がおこるのか。△主人様、畑におまきになったのは、良い種ではありませんでしたか△という疑問がおこっても不思議

議ではない。しかし答えは明確である。△それは敵のしわざだ△。昔も今も、悪魔は働いている。

二、神の忍耐

悪い者たちは、昔も今も世界に満ちあふれている。それはかりではない。「彼らには苦しみがなく、その身はすこやかで、つやがある。…これらは悪しき者であるのに、常に安らかで、その富が増し加わる」というようなことさえおこっている(詩篇73:5、12)。この状態にしもべたちは腹をたて、△では行って、それを抜き集めようか△と言ったが、主人は、△収穫まで、両方とも育つままにしておけ△と命じられた。

神は「ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに對してながく忍耐しておられる」(Ⅱペテロ3:9)。この神の忍耐を忘れてはならない。「悪しき者の栄えるのを見て、その高ぶる者をねたむ」(詩篇73:3)で、自分で毒麦を抜いてはならない。神がこれほどまでながく忍耐しておられるのに、私たちが早まってさばいてはならないのだ。

しかし、これは教会外の世界にいる神を知らない人々に対してであって、教会の中で悪を行う者たちを放置しておいて良いということではない。パウロはコリント教会の信徒に對して、「その悪人を、あなたがたの中から除いてしまいなさい」(Ⅰコリント5:13)と厳しく命じている。

三、最後のさばき

毒麦は、成長すると小麦との違いが明確になる。だから、△収穫の時になったら、刈る者に、まず

毒麦を集めて束にして焼き、麦の方は集めて倉に入れてくれ、と言いつけよう△と主人は言ったのだ。△収穫とは世の終りのことで、刈る者は御使たちである△。このときに、主は最後の正しいさばきをなさる。△そのとき、義人たちは彼らの父の御国で、太陽のように輝きわたる△のである。

詩篇73篇を作った詩人は、繁栄している悪人を見ている間は疑問を感じていた。しかし、最後に彼はこう記している。「わたしが神の聖所に行って、彼らの最後を悟り得たまではそうであった。まことにあなたは彼らをなめらかな所に置き、彼らを滅びに陥らせられる」(17、18)。悪人の最後を知った者は、この世にある様々な矛盾に心悩ますことなく生きていけるのである。

私たちは、この世界で繁栄している者が幸福であると思ってはならない。必ず終りの日がやってくる。その時に、正しい者と悪い者とははっきりするのだ。クリスチャンの価値観は、根本的に、この世の価値観と違っている。この世で生きている間だけでなく、その後をも見ているのだ。

結論

悪魔は現在も働いている。その結果、現実の世界では、悪い者たちが繁栄しているように見える。しかし、彼らをさばいてはならない。さばきは私たちのすべきことではない。かえって彼らの最後を思い、その救いのために祈ろう。終りの日には、神がすべてを正しくさばかれることこそ、忘れてはならない真理である。

研究資料

(石田)

主のたとえ話の題材は、直接語られた当時の人々にとっては実にありふれていて、きわめてわかりやすいものであった(それは必ずしもたとえ話の意図するところを当時の人々のほうが受け入れやすかったという意味ではない。その証拠に弟子たちがさえ、その真意を主に尋ねることがあった)。ところが、時代背景も風俗習慣もかけ離れている私たちにとっては理解に苦しむことが少なくない。そのために無理な解釈や深読みや自分に都合のよいように理解しやすいので、注意を要する。特に細部にとらわれず、主の意図に沿って全体の理解に努めることが求められる。

テキスト

24 天国は…のようなものである この直前に出てくる「良い地」を受けたたとえ話である。良い地だからといって、この世にある限りは安心できない。良い地に良い種をまいても、敵が夜に来て同じ場所に毒麦をまくことがあるからである。地上において神の支配されるころ(天国)も、問題の起きない理想郷ではないことが明らかにされている。良い種を自分の畑にまいておいた人このたとえについては、36節以降に主ご自身の解説があるから間違って解釈する心配はない。主はこの世界に御国の子たち(主イエスを信じる人々)をまき、育て続けておられる。

25 敵がきて、麦の中に毒麦をまいて立ち去った

毒麦とは小麦と同じ時期に成長して実を結ぶ植物で、ユダヤ人はこれを偽りの麦と呼んだ。その実が小麦に混じると、苦味があって食べることができない。△一つ一つものを麦畑にわざとまかれたら、農夫はたいへん迷惑する。毒麦に肥料を吸い取られるし、刈り入れの時は、まず毒麦を抜くという手間がかかるからである。

26 芽がはえて実を結び、同時に毒麦もあらわれてきた 実際、毒麦は伸び始めてから穂が出るまで、小麦と見分けがつかないそうである。

27 どうして毒麦が生えてきたのですか 神がこの世界を治めておられるのに、どうして悪がはびこるのか、という素朴な疑問である。この畑は教会であると解釈する伝統があるが、主ご自身が「畑は世界である」と明言しておられるので無理がある。

28 それは敵のしわざだ 毒麦が自然に生えたのではなく、わざとまかれたことがはっきりしているからこう言われた。この世界に悪がはびこるのは、単なる偶然でも、悪人が大勢いるからでもなく、悪魔の力が働いているからである。毒麦をまくことが、畑の持ち主に恨みを持つ敵のしわざであることは当時の常識であった。ローマ法はこのような行為を禁じ、罰則を定めていた。しかし、ここでの敵とは悪魔のことであって、神に従おうとしない「悪い者の子たち」を世の中にまいて天国(神の国)の前進を妨げようとしている。では行って、それを抜き集めましょうか しもべたちとしては、毒麦を伸ばして小麦をやせ細らせた

はないから一刻も早く抜いてしまいたい、その過程で小麦を少しばかり巻き添えに抜いてしまうことがあっても仕方がないという含みがある。ところが主人の心は違った。たとえわずかでも、小麦が毒麦の犠牲になることを許さない。

29 毒麦を集めようとして、麦も一緒に抜くかも知れない 主がここで強調しておられるのは、良い麦の間にも悪い麦が生じることがあるが、あわてて悪い麦を抜いてはならないという点である。

30 収穫まで、両方とも育つままにしておけ 神は不信仰な人々がこの世界にはびこることを許しておられるが、その人々も悔い改めに至ることを望んで忍耐しておられることが暗示されている(Ⅱペテロ3:7、9)。人は正しいさばきをなさる神に委ねるべきであって、自ら事の白黒をつけてはならないのである。

37 良い種をまく者は、人の子である この時制は現在形で、主イエスが今もこの世界に御国の子たちをまき続けておられることを意味する。

42 炉の火に投げ入れさせるであろう 最後まで主イエスを受け入れようとしないう人には、炉の火に象徴される永遠の滅びが待っている。

43 義人たちは 主イエスに対する信仰によって神から義とされた人のことであり、良い種である御国の子たちのことである。太陽のように輝きわたるであろう これはダニエル12:3「賢い者は、大空の輝きのように輝き」とつながりがある。主に信頼し続ける者に、神は気の遠くなるほどの栄誉と報酬を用意しておられる。

聖書 マタイ13・24～30、36～43
タイトル 最後はどうなる？

中心聖句 毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終りにもそのとおりになるであろう。 マタイ13・40

目標 終りには神が正しいさをされることを知り、忍耐して生きよう。

導入

だれでもが喜んで見る「水戸黄門」はどうしてだと思えますか？どんなに悪人が暴れても、どんなに良い人々が苦しめられたり、危ないと思う目に合っても、最後には絶対に、「これが目に入らぬか」と出てきて、悪人は必ずさばかれるからです。ね。最後がわかっているということは、今の私たちにとっても、ほんとうに大切なことなのです。

今は

今、私たちが生きている世界は「ごちゃごちゃのごちゃませ。一体どんな様子か」というと、今日のイエス様のたとえ話のように、良い種を畑にまいておいたのに、私たちが眠っている間に敵がやってきて、良い麦の中に、何とノ毒麦をまいてしまったので、良い麦の芽がはえて実を結んだと同時に、毒麦も一緒に生えてきてしまったのです。イエス様は、これは敵なる悪魔の仕業だと言われます。

そのように、今の世の中は良い人と悪い人とごちゃませです。みんなよく聞いたり見たりして知っているように、悪いことをするのは大人たちだけではありません。小さな子どもも、信じられないような恐ろしいことをする時代になりました。日本や世界中が狂っています。悪を取り締まるはずの警察や、命を助けるはずの医者、子どもを教えるはずの教員、そんな人々さえ悪魔の手下になってしまっています。「こんな世の中で、清い心と正しい生き方なんてできっこない。神様は、なぜこんなごちゃませな状態をゆるしておかれるの、なんとかしなくちゃ」と思っています。が、一体小さい私たちに何ができるのでしょうか？

最後には

実は、この世の中は、悪魔の支配する世界が終りに近づいているので、悪魔は必死になって働いているのです。毒麦を見たいもべたちが「こんでもない。ご主人様、行って抜き集めましょうか」と言った時、「いやそのままにしておきなさい。毒麦といっしょに良い麦も抜いてしまうかもいれないから。収穫の 때가きたら、毒麦をまず集めて焼き、良い麦は倉に収めるから」と、主人は言いました。今はごちゃませにはえている毒麦も、最後の収穫の時には間違いなく、集められて束にして焼かれる時が必ず来るのです。その最後、つまり、この世の終りがいつ来るのかは、父なる神様以外には誰にも分かりません。その時にはごちゃませだったこの世界が、神様によって、正しく並びとりとさばかれるのです。そのことは偽りのない神様の言葉である聖書に、特にヨハネの黙示録に書

かれています。神様の目には、ちゃんと良い麦と毒麦とが見えています。その終りの日まで、ひとりも滅びないで救われるように、神様は今も長く忍耐を待っています。だからこそ、いつ主が来られても良いように、主を愛する者に最善を成してくださることを信じ、忍耐して生きましょう。

例話

この世の中どうしてこんなに悪がはびこっているままなの？そして、なぜ神様を信じない人たちがおいしいものを食べ、肥え太って、安らかに幸せに生きているの？神様が愛なら、なぜこうなの？と今、21世紀に生きる私たちだけでなく、どの時代の人々もこんな疑問に悩んできました。その問いにこたえるのが、今日のイエス様のたとえ話です。ね。今から3千年も前、アサフという人も真剣に悩んだのです。楽長を務めていたアサフさんか、その子孫の人が作った詩篇73篇に記されています。「悪しき者の栄えるのを見て、その高ぶる者をねたんだ」のです。悪しき者の姿が詩篇73・4～12に詳しく描かれています。でも悩みが晴れたのです。それは神様の聖所に行って、神様はこのままではおかしい、悪人は必ず滅びる／と悟ったからです。最後はどうなる？悪人のことで、やたら悩まされるのでなく、私たちは良い麦として忍耐強く神様を信じて従い、最後には「父の御国で、太陽のように輝きわたる」希望をもって生きていきましょう。そのためには「神の聖所、教会へ共に集うことがとても大切です。終りをちゃんと見据えて、間違いのない歩みをしましょう。

ワーク A

話し方のヒント

「悪いことをしている人のほうが得をしている」と思うことがあるかもしれません。み言葉を守って損をしたと思っても、決してそうではありません。すべてを見ておられる神様は、最後に必ず正しくさばかれるのです。毒の麦と良い麦がごちゃ混ぜになっているでも最後には分けられるように、神様を信じている人とそうでない人は、最後に分けられて、さばかれるのです。少しでも多くの人が神様を信じるようにお祈りしましょう。

ワークについて

葉に彩色して切り取り、壁掛けを作りましょう。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。

●質問2 だれが良い種をまき、だれが毒麦をまくのか。また、何が良い種で、何が悪い種なのか。そして、収穫とはどのようなことを意味しているのか。聖書を読み、み言葉からはっきりと答えを見出しましょう。

●質問3 いつ／世の終わりがきてもよいように、罪を悔い改め、救い主イエス様を信じましょう。そして、正しいさをされる神様にすべてをゆだね、忍耐して生きることができるよう祈りましょう。

ワーク C

●第2問 悪い人が得している不公平な場面を思い出します。無い場合は、「例えばの話」を、教師が設定して進めてみてください。

●第3問 毒麦のたとえと、実際に三場面ずつ上下に書いてあります。我々は第2ステーションに生きているが、第3が見えているか、と話し合います。

●第4問 ②と④が正解、⑤も〇でしょう。①と③は一理あるのですが、ここでは×です。

●第5問 第3ステーションの内容を確認してから、悪者が栄えるのを見た時に、怒りがでるかどうか、考えます。実際は、平安・おだやかとは簡単にはいかないでしょうが、「神様を信頼して忍耐して生きよう」と導きます。

ワーク D

●詩篇73篇4～18節、IIペテロ3章8～13節を開いて、今日のメッセージをさらに確認しましょう。聖書を実際に関く事により、子どもたちは聖書に親しむことができ、聖書全体を通して語られる神のメッセージを知ることができます。

●最後に、質問を通して神様のまこころを確認しましょう。

●来週の分級の材料をみんなで振り分けて、11／16（日）に各自エプロンと一緒に持ってきてもらいましょう。11／16分のワークを参考に覚えておいてください。

中高校へのヒント

考えてみよう

1 どうして毒麦が生えてきたのですか。
2 毒麦をすく抜かずに、「育つままにしておけ」と命じられるのはどうしてですか。神の望みは何ですか。

3 「悪魔」と「悪い者の子たち」は、どのようにさばかれますか（黙示録20章も参照）。

4 毒麦のたとえとその説明との間に、「からし種のたとえ」と「パン種のたとえ」が挿入されているのはなぜですか。

●自分にあてはめてみよう

1 あなたは罪悪や理不尽なことを見つけたとき、先走りしてさばく傾向がありませんか。

2 他人に対しては厳しく、自分に対しては甘い傾向がありませんか。

3 今後、罪悪や理不尽なことを見つけたとき、あなたは どうしますか。

話し合ってみよう

1 世には悪がはびこり、教会内にも時に問題が生じるのに、神はなぜさばかずに、放置しておられるように見えるのでしょうか。

2 聖書の中から、自分でさばかないで、神のさばきに委ねて勝利した実例を調べてみましょう（イサク、ダビデ、主イエス他）。

3 神のさばきに委ねて勝利した体験、先走りしてさばいて失敗した体験があれば、分かち合ってみましょう。

聖書 マタイ13・31〜35、44〜50
テーマ からし種のたとえ

序論

2箇所にもたがる今週のテキストは、過去2回と違って、短いたとえで天国がどのようなものかを説明している。からし種、パン種、畑に隠してある宝、良い真珠を捜している商人、網という5つのたとえである。これらのたとえも、当時の民衆がよく知っていることだった。ここでも主は、神の国の価値観がどのようなものかを示された。

一、天国は拡大発展する

パレスチナでみかけるからし種の木は、その種は小さいが、成長すると3メートルほどにもなる。それと同様に、神の国は最初は小さいが、必ず大きくなることは言われたのだ。確かに、少数の弟子たちによって伝えられた神の国の福音は、2千年後、全世界に広がった。これは神の国の量的拡大といえるだろう。また、少量のパン種（イースト菌）も粉全体をふくらませて大きなものとする。これは神の国の質的发展を意味しているのだろう。確かに福音は、人権思想や民主主義を世界に広めるために大きな働きをした。

当時、主はナザレ出身の木工の息子としか考えられず、弟子たちも「無学な、ただの人」（使徒4・13）と思われていた。何の勢力もなかった。しかし、本物の命があったからこそ、からし種やパン種のように、大きく発展したのである。神の国の価値観は、小さなものを軽視しがちなこの世の価値観と全く違っている。主の話を聞いた群衆の幾

人がこれを理解しただろうか。

二、天国は絶大な価値をもつ

タラントのたとえ話（マタイ25章）で示唆されているように、当時、金持ちが財産を地下に隠す習慣があった。しかし、その人が死んでしまつた、だれもその隠し場所を知らないため、そのままになつていく場合もあったようだ。ある小作農がその宝を発見したが、その畑は地主のものだからそのまま掘り出すわけにはいかない。そこで農夫は「持ち物をみな売りはらい、そしてその畑を買うのである」。また、高価な真珠一個を「発見した商人も同じようにする。二人とも、自分の全財産よりも、その宝、その真珠のほうが比較にならないほど絶大な価値があると判断したからだ。

弟子たちは、主が教えられた神の国が、自分が持っているどんなものよりも価値があると判断したので、主に従つていった。彼らの価値観は変わったのだ。しかし、神の国の福音を聞いてもその価値を認めない人々は、あいかわらず、それまでの生き方を続けるのである。

農夫のように、たまたま神の国という宝を見出す人もいる。また、商人のように神の国を必死に求める人もいる。どちらの場合でも重要なのは、神の国はこの世の富・名誉・知識よりもはるかに価値があると判断し、生き方を変えることだ。

三、天国にはさばきがある

「あらゆる種類の魚を囲みいれる網」とは、今で言う地引き網だろう。通常は獲得したい魚の種類に従つて網の目の大きさを決めるのだが、ここで

研究資料

（石田）

ここには5つのたとえ話があるが、それぞれ農業、家事、商業、漁業の現場を知っていないと語れないものである。それによって主がいかに世間に通じておられたかもわかってくる。

テキスト

31 天国は、一粒のからし種のようなものである。ここで引き合いに出されているからし種とは、黒がらしの種のように、その種の直径は1.5ミリほどであるが、芽が出て伸びると2、3メートルにも達するといふ。

32 それはどんな種よりも小さいが、主は別のところで「もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら」と言われ、からし種はごく小さいことを表現する時に用いられている（ルカ17・6）。成長すると、野菜の中でいちばん大きくなり、前々段落のたとえ話は、み言葉の種が良い地にまかれて、百倍、六十倍、三十倍にもなるというように、聞く人自身の成長について語られていたが、この箇所においては天国（神の国、神のご支配）の成長について語られている。前段落のたとえ話とも、種をまくという行為において共通している。からし種の成長力については当時の人々によく知られており、これを聞いた人々はその情景を目に浮かべることができたはずである。空の鳥がきて、その枝に宿るほどの木になる。これと似た表現が、ネブカデネザル王のバビロン帝国はオリエント諸国の支配者、保護者であることのたとえとして用い

られている（ダニエル4・20〜22）。そのように天国（主イエスを信じる人の集まる世界）は、初めはどんなに小さい群れであっても、成長する力を秘めているので、やがて多くの国々を覆うほどになるということのたとえである。事実、初代教会は3百年あまりで、ローマの帝国を福音で覆い尽くした。

33 天国は、パン種のようなものである。これも極めて身近なたとえで、いわば台所からの説教である。パン種はパリサイ人の律法主義や偽善をた

とえる場合に用いられてもいるが、ここでは良い意味で使われている。三斗の粉、3サトンという量で、約40リットルに相当し、これでパンを作ると何十人分にもなる。大家族で暮らした生活が見えてくる。全体がふくらんでくる。パン種を入れずに焼いたものはせんべいやクラッカーのようなものである。パンのような膨らみや豊かさはない。パンはからし種に比べれば成長率は小さいが、成長速度はずっと大きい。しかも、大勢の人が養われるという意味にも受け取ることができる。

44 天国は、畑に隠してある宝のようなもの。当時、財産を保管する方法として、土器などに納めて畑に埋めることが最も安全であった。「この宝を土の器の中に持っている」という表現からもわかる（Ⅱコリント4・7）。いわゆる埋蔵金のたぐいである。ひとの畑に隠された宝を見つけて、それを盗んだら犯罪であるが、その畑を買い取れば、その宝は自分のものになることができた。当時の人々は、そういう事例を時々耳にすることがあったのであろう。喜びのあまり、行って持ち物を含

は「あらゆる種類」という句で、全世界の人々が福音宣教によって教会に召し集められることが示されている。しかし「世の終り」には、「御使たちがきて、義人のうちから悪人をえり分け、そして炉の火に投げこむ」のである。先週学んだ毒麦のたとえと同じような表現がとられているが、重要な違いがあることも見落としてはならない。

毒麦はこの世における悪人のたとえだった。彼らは終りの日にさばかれる。しかし、目に見える教会に集っている者であっても、厳粛なさばきの場に立たされることを忘れてはならない。12弟子の中にはユダがいた。初代教会にもアナニヤ・サツピラ夫妻（使徒5・1）やヒメナオ・ピレト（Ⅱテモテ2・17）がいた。彼らはこの地上でさばかれたが、終りの日にはもっと厳しいさばきがあるのだ。だから「主の名を呼ぶ者は、すべて不義から離れよ」（Ⅱテモテ2・19）。目に見える教会に召された者であっても、自分の価値観がこの世のものと同じことを常に確認せねばならない。

結論

現在でも、神の国の福音に生きる者はからし種のように小さく、少数である。しかし絶大な価値の宝、すなわち主イエスご自身をもっていることを忘れてはならない。このお方にのみ信頼しているなら、この世の価値観に惑わされることなく、正しく歩んでいくことができる。終りの日に主の前に立つ時にも、「主は自分の者たちを知る」（Ⅱテモテ2・19）ゆえに、安心なのだ。

な売りはらい。これがこのたとえ話の核心である。

天国は、その素晴らしいさがわかったら全財産をはたきように、一番大事にしているものを犠牲にしても惜しくないものであるという意味である。キリストを知る知識の絶大な価値のよい例話である。

45 天国は、良い真珠を捜している商人のようなもの。畑の宝の場合は偶然見つけられたが、高価な真珠は熱心に探し出されたところに強調点の違いがある。当時の真珠商人は、一級品を求めて広範囲に旅をした。

46 高価な真珠一個を見いだすと、真珠は高価であるばかりでなく、天然の美しさを持っている。天国の魅力が真珠にたとえられているわけである。ちなみに天のエルサレムの門は真珠である（黙示録21・21）。ここには非常に高価であるがたった1個の小さな真珠を、全財産と引き換えに手に入れて喜びという、常識を超えた神の国への情熱が浮かび上がってくる。

47 あらゆる種類の魚を囲みいれる網のようなもの。ここには地引き網のように、その海域の魚を根こそぎ取るイメージが用いられている。教会は、最も神のご支配の現れるところであるから、あらゆる種類の人々に網をかけて、どのような人をも受け入れるべきである。

48 良いのを器に入れ、悪いのを外へ捨てるのである。世の終りには、これまでの全人類がさばきの座に集められ、一人の例外もなく義人が悪人かにより分けられることの厳粛さを感じる。

聖書 マタイ13・31〜35、44〜50
タイトル たとえ小さくても

中心聖句 天国は、一粒のからし種のようなものである。

目 標 からし種にたとえられる天国のいのち、イエス様を心にお迎えしよう。

導入

でっぴり太った大男が、100kg量れる体重計にのりました。するとノ1回転して針は20kgのところで止まりました。それを見ていた小さい子が「なんだ。おじちゃん軽いんだ！」大男は大男でも中が空洞の木みたいと思ったのでしょうか。何でも大きいこと、多いことがいいと思いがちなこの世の中です。でもイエス様の御国は今日、「からし種」にたとえられています。一体、天国ってどんなもの、どんな所なのでしょう。

からし種のいのち

1粒のからし種、見たことありますか？イスラエルに行く、からし種入りのしおりを見かけます。今では日本でもイスラエルのからし種の本を育てている人がたくさんいます。1粒のからし種は、こま粒の何分の1かの本当に小さい小さいものなのです。でも不思議。そして、すばらしいことに神様が与えたいのちがその中に詰まっています。だから、大きく成長していくのです。いのち

ってすばらしく尊いものですね。たとえ小さくても本物のいのちがあることが大切なのです。イエス様は、貧しい大工の小さい赤ちゃんとして、この世にこられました。12人のお弟子さんたちも貧しい無学なただ人たちでした。でも神様からの本物のいのちが与えられていたので、あのからし種のようにふえ広がっていったのです。

からし種の成長

なんと、そのこま粒の何分の1かのちっちゃいちっちゃいからし種を地にかくと、神様からの太陽や風や水のめぐみで、いのちが芽生えます。そして、ぐんぐん成長して、みんなの背丈より高くなり、ついには3メートル以上にも大きくなるのですから驚きです。天国のいのち、永遠のいのちも、イエス様から、12人のお弟子さんへ、そして、パウロさんや、ほかのたくさんのお弟子さんを通して、今や、全世界へと届けられ、3メートルのからし種の木どころではないほどに大きく広く伝えられています。そして、やがてイエス様が再びこの地においてにられる時、永遠のいのちをもらったすべての人が復活のからだ、栄光のからだをもらって、神様がくださった新しい天と地、つまり天国で、永遠に神様と共に過ごすようになるのです。その天国には、神様を恐れ信じて、永遠のいのちをもらった、全世界の色々な国々の人々、そして、すべての時代の人々が集められるのです。そのありさまは、とてもとても想像もできないほどのものです。今、この神様のいのちをみんなもらっているのでしょうか？イエス様を心にお迎え、永遠のいのちをいただき歩みましょう。

例話

多くの人々が感動して聴いている美しい讃美歌、それは水野源三さんが作った詩に曲がつけられたものです。源三さんが小学校4年生の時、痘瘡というこわい病気がはやり、源三さんも弟もそれにかり、高熱でうなされました。弟さんは治りましたが、源三さんは首から下は全く動かない、そして、話すことができない人になってしまいました。ふつとそんな人は社会では何の役にも立たないと、捨てられてしまうような存在です。でも神様はちがいました。ある日ひとりの牧師がお母さんのやっていたお店にきて、源三さんのことを知り、聖書を置いていったのです。源三さんはお母さんに読んでもらったり、じっとひとり読めるようにしてもらい、源三さんを愛して、ひとり子イエス様をくださった父なる神様と、十字架の上で自分のために命を捨ててくださったイエス・キリストの愛を心に受け止め、新しいいのち、永遠のいのち、天国のいのちを心にいただいたのです。この愛を知った喜びを何とか伝えたい！お母さんが作ったアイウエオ表を、目くばせしながら、一語一語と詩がつづられていきました。本当に神のいのちに触れる詩が産み出され、やがて多くの人に読まれ、また作曲され、賛美されるようになりました。神様のなさることは、人の思いや行いと違って、なんとすばらしいものなのでしょう。私たちも小さなからし種1粒のようかもしませんが、どんなに小さくても、天国のいのち、イエス様を心にお迎え、天の喜びを人々に伝えたいですね。

ワーク A

話し方のヒント

小さなからし種は神様から命を与えられて大きな木に成長します。天国のいのちも、イエス様からお弟子さんに、そして世界中にひろめられました。イエス様を信じている人は、皆そのいのちをいただいています。それは天国へ行けるという約束なのです。どんなすばらしい宝石より、お金より、もっとすばらしい天国の宝物をいただいているのです。たくさんの方がこの宝物をいただけるようにお祈りしましょう。

ワークについて

花の成長を強調して話を振り返って下さい。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。

●質問2 からし種の直径は約1.5ミリですが、成長すると2〜3メートルぐらになります。なぜ、小さな小さな種がこんなに大きくなることのできるのでしょうか。それは、神様が与えてくださったいのちがあるからです。

●質問3 イエス様を信じるなら、神様から永遠のいのちをいただくことができます。そして、私たちからし種のように、神様からいただいたいのがあるので、成長することができ、多くの人も天国の喜びを伝えることができるようになるのです。

ワーク C

●第2問 からし種の小ささに注目し、確認させます。それが3メートルになる。三千倍だね、と楽しく話しましょう。

●第3問 「天国」II「み言葉」ではないのです。が、命のみ言葉（1ペテロ1・23「朽ちない種」神の変わるこのない生ける御言、ヨハネ6・63「人を生かすものは霊であって、わたしがあなたに話した言葉は霊であり、また命である。」）がイエス様から12弟子へと伝えられ、拡大していったことから、拡大していく神の国（天国）の命としてみ言葉をとらえています。

●第4問 （1）からし種の時代、（2）将来の全歴史・全世界でただ一つの教会、地上の教会と天上の教会が一つとなって、再臨の主に花嫁として迎えられ、新天地に入っていく。イラストを見ながら説明し、会話します。

ワーク D

●イースト菌（パン種）入りの生地はよくふくらみます。今日はパン種入りの生地を作って、どれくらいふくらむか体験しながら、楽しく美味しい時間を待ちましょう。

●礼拝中に生地を放置してふくらませ、屋にみんなまで生地を伸ばしてトッピングしてから焼いて食べればどうでしょうか。トッピングは好きなもの何でも結構です。

●オーブンがなければフライパンにクッキングシートやアルミホイルをしいた上にのせてふたをして焼いてもできます。（注：弱火）

●屋に一緒に食べられない時は、まとめた生地を人数分に持ち帰って、それぞれの家で作っても良いですよ。

●1〜4の質問に答えます。実際に作ることによって、「ふくらむ」という言葉の実感が湧いてくるでしょう。

●トッピングはたとえ話の講解を聞いたものです。とても感動を覚えました。分級の先生方も感動されるのではないのでしょうか。

中高校へのヒント

考えてみよう

1 からし種とパン種のたとえから、神の国はどのような性質のものだと言えますか。

2 隠してある宝と高価な真珠のたとえの共通点と相違点は何ですか。

3 「喜びのあまり、持ち物をみな売りはらう」のはなぜですか。

4 先週の毒妻のたとえと地引き綱のたとえの共通点と相違点は何ですか。

自分にあてはめてみよう

1 あなたは自分のことを取るに足りない小さな存在と卑下していませんか（17・20参照）。

2 あなたは神の国の絶大な価値を本当に知っていますか。また、そのことを知った者として、「喜びのあまり」すべてを献げて、主に仕えていますか。

3 世の終わりの日、あなたは「器に入れ」られるでしょうか。それとも「外へ捨て」られるでしょうか。

話し合ってみよう

1 神の国の外部的発展IIからし種のたとえ（口マ帝国の迫害にも屈せず、現在、世界人口の約35%がキリスト者）と、内部的浸透IIパン種のたとえ（奴隷解放、女性の地位向上等）の実例を歴史から見てもみましょう。

2 神の国はどのように到来し、どのように完成されるのでしょうか。

聖書 マタイ18・15～20
テーマ 心を合わせて祈る

序論

「神の国の価値観」の単元を、祈りについての学びで締めくくりたい。祈りこそ、この世の富・名誉・知識をはるかにしのぐ価値あるものだからだ。今週のテキストは、△これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたごとの父のみこころではない▽という節に続くものであることに注意しよう。

一、罪を犯した兄弟のための祈り

今までに学んだように、この世には毒麦もあるし、教会内にも主のみこころにかなわない者たちもいる。主は最後の日に彼らを正しくさばかれるゆえに、私たちがすべきなのは、彼らが悔い改めて神に立ち返るように導くことである。ここで主は、3つの段階を踏むように教えられた。

第一に、罪を犯した人と△ふたりだけの所で忠告▽し、それを聞いてくれないなら、第二に△ほかにひとりかふたりを、一緒に連れて行き▽、それでもだめなら、第三の手段として△教会に申し出▽る。それでも悔い改めない場合のみ、△その人を異邦人または取税人同様に▽扱うのである。そして、この文脈の中で、19節以降が記されていることは重要だ。忠告している間中、その人が悔い改めるように、△地上で心を合わせ▽て祈るのである。たといひとりでも、罪を犯した人が滅びることは、主のみこころではない。

二、みこころに従った祈り

この時に主は弟子たちに、△あなたがたが地上でつなぐことは、天でも皆つなぐ、あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれるであろう▽と言われた。これは、16・19でペテロに告げられたのと同じ約束である。新改訳聖書の脚注にあるように、つなぐとは禁じること、解くとは赦すことを意味する。だが、地上の教会が禁じ、赦すことがみな天の（つまり神の）決定であると解釈してはならない。原語の時に注目するなら、「あなたがたが地上でつなぐなら、それは天においてもつなぐれており」と訳すほうがより正確である（新改訳参照）。天においてすでに禁じ、赦されていることを、地上でも禁じ、赦すのである。「みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように」という主の祈りのことへ。

祈りは、自分の願いを神に押し付けることではない。まず神のみこころを求め、そのみこころどおりになるようにという祈りこそ、本物である。罪を犯している人には、それを指摘せねばならない。だがそれとともに、△小さい者のひとりが滅びること▽も主のみこころではない。罪を犯した人がその罪を悔い改めるように、△地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれをかなえて下さる▽のだ。△心を合わせる▽というギリシヤ語は、英語のシンフォニー（交響楽）の語源になった言葉である。違った性格の人々でも主のみこころに従い、一つ思いになって祈るとき、美しい和音が教会に広がっていく。

三、臨在が現われる祈り

さらに主は、△ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである▽とおっしゃる。罪を犯した人に罪を指摘し、その人がそれを悔い改めたなら、再び教会の交わりに加えられる。△ふたりまたは三人▽と言われているのは、その悔い改めた人も含めてのことである。そして皆で一緒に祈る所に、主イエスは臨在し、キリストの霊によって話し合いを導かれ、祈りを強めてかなえてくださる。

地上の教会が禁じ、赦す権威をもつのは、神が教会にその権威を行使する権能を与え、教会に主が臨在しておられ、なすべきことを示されるからである。権威は、ペテロや牧師にあるのではない。それは、神が教会に与えられた権能を持つ教会に、臨在される主の権威に他ならない。

結論

地上の教会は、神の国（天国）をこの地上に実現させるために建てられた。しかし、現実の教会には罪を犯す者もあり、また罪を赦そうとしない人々もいる。だが、罪を犯した者が悔い改めて神に立ち返るように、心を合わせて祈ることによって、教会は少しなりとも神の国に近くなる。教会は天と地の接点となるべきものである。いずれはキリストの花嫁として、「しも、しも、しも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿」（エペソ5・27）となるべきものである。その日にむかって、日々罪を悔い改め、心を合わせて祈り進むものになりたい。

研究資料

(石田)

テキスト

15 あなたの兄弟 文字どおり肉親の兄弟や、クリスチャンの兄弟に限定されることなく、すべての人を含むべきであろう。彼とふたりだけのところで、まずは罪を第三者に知らせることなく、内密のうちに。これは相手の心を開くため、かたくなにさせないためにどうしても必要なことである。忠告しなさい（エレンコー） これには罪を示す、間違いを指摘する、叱責するという意味がある。ただ非難するのではなく、誤りを認めさせることである。この言葉は、人を認罪に導く聖霊のお働き（ヨハネ16・8）、栄光の主が私たちを叱る場合（黙示録3・19）などにも使われている。

この言葉の例証として、預言者ナタンがダビデ王の姦淫と殺人の罪を告発し、悔い改めた王に神の名において赦しを宣言していることが挙げられる。時制は不定過去命令形なので、即座にためらいなく忠告するようにということである。その目的は悔い改めに導くためであり、その動機は「兄弟を得たことになる」という言葉からわかるように、罪から離れるようにとの愛のゆえであるべきである。「あからさまに戒めるのは、ひそかに愛するのにまさる」（箴言27・5）ともある。

16 ふたりまたは三人の証人の口によって 裁判には二人以上の証人を必要とするという申命記19・15に基づいている。この場合は裁判ではないが、

事実の確認と悔い改めへの公正な勧告のためには複数の証人が必要であると言われている。この旧約起源の慣習は初代教会にも受け継がれている（Ⅱコリント13・1～2、Ⅰテモテ5・19～20、ヘブル10・28）。

17 教会に申し出なさい この教会（エクレシヤ）は、本来「会衆」を意味する言葉で、この場合は教会という組織というよりも、主にある者の集まりという意味のほうが強い。聞かない（パラクロー）パラとアクローの合成語で、文字どおりの意味は「傍らで聞く」。愛と真実とをもって忠告されているにもかかわらず、他人ごとのように聞き流すという意味である。異邦人または取税人同様に扱いなさい 主イエスが異邦人や取税人を差別したり、拒絶しておられたわけではない。聴衆とコミュニケーションを取るため、彼らによくわかる表現を使われただけのことである。これは交わりを絶ちなさいという意味である（Ⅱテサロニケ3・14、交際しないがよい）。しかし、永久にはではなく一時的にである。いつでも悔い改めたら、教会の交わりに迎える態勢を持つべきである。

18 つなぐ（テオー）は禁止する、解く（ルオー）は許可するという意味のユダヤの法律用語である。愛と真実に基づいて、何重にも設けた悔い改めの機会を拒むなら赦されないが、受け入れるなら赦される。この場合、教会は神の意思を反映している（ヨハネ20・23）。

19 どんな願い事 17節のように、教会の勧告に對しても悔い改めようとしない心が変えられるこ

とは、最も難しいことのひとつである。しかし、それさえもふたりが心合わせて祈ればかなえられるゆえに、「どんな願い事についても」と言われたのである。もちろん、この約束は文脈から独立して、ふたりが祈ろうとするどんな願い事についてもあてはめることができる。心を合わせるなら（シンフォニー） 文字どおりの意味は「一緒に声や音を出す」ということで、一般的には楽器演奏でハーモニーを奏でるとか、建築現場で石垣をピシッと合わせて組むという場合に用いられた言葉である。聖書では、一致する、契約に同意する（ぶどう園の主人と労働者）、共謀する（アナニアとサツピラ）などの意味で使われている。

20 わたしの名によって（エイヌ・ト・エモン・オノマ） 字義どおりには「わたしの名の中へ」である。主イエスの名の中に集まるとは、主がそこにおられることを信じて集まることである。そこには必ず主が働かれることを期待するのである。わたしもその中にいるのである 直訳は「あなたがたの真ん中にわたしはいる」となる。いわゆる、インマヌエルの約束である。マタイの福音書は、インマヌエルで始まり（1・23）、インマヌエルで終わる（28・20）と言われる。このようなかで主イエスの名は神の名に等しく、ここで主はみずからを神の位置に置いておられる。以上、19、20節の流れをまとめれば、主の臨在を信じて集まる所に、主は必ず現れ、天の父がどんな願い事もかなえて下さる、それは特に罪を犯した人のための執り成しについて顕著であるということになる。

聖書 マタイ18・15〜20
タイトル 祈りはきかれる
中心聖句 どんな願い事についても地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれをかなえて下さる。
マタイ18・19
目標 生きておられて祈りをきいてくださる神様にもっと祈る。

導入

今日は神様とのお話、お祈りについてです。お祈りをしたことがまだないって？それでは、お祈りについての簡単な決まりを教えてあげようね。みんなは、サンドイッチ知ってるよね。そのサンドイッチを思い浮かべてね。まず上のパン。それは、「天のお父様」というパンです。下のパンは、「イエス様のお名前によってお祈りいたします。アーメン(その通りです)」というパンです。真ん中に、何を入れる？ジャム、バター、玉子、ハム、チーズ、野菜、その他色々あるね。神様にあなたが感謝することや、お願いなどをお話しすればいいのです。さあ、あなたも今日からできるね。

誰のために祈る？

じゃあ、お祈りしてきた人は毎日お祈りしていますか？そう、1日3回、ご飯の前にお祈りしている？朝、目が覚めたとき、お祈りしている？夜、寝る前にお祈りしている？昼、困ったときやこわ

いとき、もしかしていじわるされたとき、お祈りしてるかな。それは、全部自分のためのお祈りですよ。今日イエス様は、いじわるをする人のためにもお祈りしなさいと言われます。イエス様が十字架の上で、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのかわからないでいるのです」とお祈りされたように、わからないで悪いことをする人たちのために祈りしなさいと言われます。お祈りというのは、まだ不思議ですばらしいことです。これは、お祈りした人だけにわかることなので、今まで以上にお祈りしましょう。

どのように祈る？

まだイエス様を信じていない人や、悪いことをする人が悔い改めて、イエス様を信じて救われるようにお祈りすることを、神様はとても喜んでくださいます。ひとりではなかなかお祈りできないと思う人は、今日のみ言葉にあるように、2人または3人でお祈りしたらいいですね。お父さんやお母さんともいいし、兄弟同志やお友だちと一緒に祈りしたり、教会の先生とお祈りするのもいいです。お祈りが不思議ですばらしいのは、一緒に祈りすると本当に心が一つになるということです。そして、ますます心を合わせてお祈りしていくとき、そこにイエス様も一緒にいてくださって正しく導いてくださるということです。その上で心を含ませて祈る祈りを父なる神様が聞いてくださるのですから、ますます祈りたくなりませんか？今までに心を合わせてお祈りをして、神様が聞いてくださった！という経験があったら、ぜひ分級のとき教えてほしいです。

例話

今から25年くらい前のこと。イギリスのある教会にグレイスとアンという大の仲良しの少女たちがいました。2人が一番好きな時間は、2人で一緒に祈りをするという時間でした。その年の夏のキャンプのためには、特別のお祈りが必要でした。というのは、数人の男の子たちは、キャンプをじゃましてやろうという思いで、参加しようとしていることを、2人や教会の人たちもよく知っていたからです。いよいよキャンプの日がやってきました。そして、夜の集会のために備えていました。グレイスとアンはもちろん集会中も心の中で祈りつづけ、集会のあと、また2人でお祈りをし続けました。すると、どうでしょう？その数人の男の子たちのうちのひとりが、しょんぼりして先生のテントの中に入っていました。寝る時間になっても、ひとり、またひとりと次々と先生のテントの中に入っていく、全員がみごとに悔い改めをしたのでした。まさにキャンプは破れたのです。(知ってる？こんな言い方！)グレイスとアンの心の中は喜びでは切れそうでした。その年の収穫感謝祭はいつになく盛大なものでした。数人の若い人々の洗礼式があったからです。「ボクはあのキャンプで…」と次々と証しました。教会の多くの人々は、「そのキャンプに参加したかった」と思いました。もちろん祈りが聞かれた喜びに輝いていたのですが。

お祈りは世界を変えると言われます。私たちも心を合わせて祈り続けましょう。(「友よ歌おう」21番を賛美)

ワーク A

話し方のヒント

お祈りをするとき、心がほっとしてうれしくなります。お祈りは神様とお話する楽しいときだからです。どんなときにお祈りしていますか。いつでもどんな時でもお祈りはできます。また、一人でも、家族やお友だちといっしょにでも、お祈りできます。いっしょにお祈りすると、気持ちもいっしょになります。みんなが神様を信じるようにお祈りしましょう。けれども、自分勝手なわがままなお祈りは神様を悲しませてしまいます。

ワークについて
お祈りの絵を完成してください。

ワーク B

- 質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。
- 質問2 お祈りはサンドイッチをとおして、分かりやすく教えましょう。神様に感謝したいことやお願いしたいこと、また、お話ししたいことをなんでも、「天の神様」というパンと、「イエス様のお名前によって、お祈りします。アーメン」というパンではさむ、というように覚えましょう。
- 質問3 子どもたちと祈禱課題を出し合って、お互いのため、それぞれの家族や友だち、また教会のために祈り合いましょう。そして、神様に祈りがきかれる喜びを分かち合いましょう。

ワーク C

文字が多いので予習して把握してください。

- 3年生の初めと4年生の終りでは2年間の幅があり、学力差も大きいので、漢字のルビについては、全員に最適と言つわけにはいきません。漢字や意味を教える中で、会話をしてください。
- 第3問 1から4の順番に並んでいますから、15〜17節の中味を確認します。また、教師はマタイ18章全体にある恵み深い愛の神様のお心をつかんでから、その流れの中に、この15〜20節の「祈り方」があることをとらえると思います。
- 第4〜6問 とりなしの祈りの方法、その権威、さらに主の臨在が伴うことを確認してください。

ワーク D

- 分級で毎週顔を合わせていても、お互いの祈りの課題を知る機会はなかなかないのでではないでしょうか。子どもたちが心を開いて課題を出せるよう祈り備えましょう。そのためにもお互いの信頼関係が大切です。
- 手をつないで祈ることは、少し照れもあるでしょうが、思った以上に、お互いに祈り、支え合える存在であることを実感すると思います。2人など少人数の時は工夫してください。
- この場にイエス様が共にいて下さることを言葉によって確信しましょう。

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 兄弟が罪を犯した場合、どう対処すべきだと言っていますか。その際、必要不可欠なことは何ですか。
 - 2 罪を犯した兄弟のために、なぜこれほどまでにするのですか。
 - 3 主イエスが「異邦人または取税人同様に」と言われたのはなぜですか。
 - 4 教会に委ねられた権威と責任が、神の御心になつたものとなるために必要不可欠なことは何ですか。
- 自分にあてはめてみよう
- 1 教会の仲間が罪を犯したことを知ったとき、あなたはどうしますか。
 - 2 あなたは、誰かと一緒に心を合わせてお祈りしたことがありますか。祈りの友がいますか。
 - 3 あなたは、祈りが聞かれたという体験がありますか。
 - 4 あなたは、わだかまりがあるために心を合わせて祈ることができない人がいませんか。
- 話し合ってみよう
- 1 あなたが罪を犯したとき、仲間にも忠告された体験、仲間が罪を犯したときに忠告した体験があれば、分かち合いましょう。
 - 2 祈りが聞かれたという体験、特に数人で心を合わせて祈った祈りが聞かれたという体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 ヨハネ1・1〜5 テーマ 肉体となった言

序論

アドベント第一聖日の今日から4週間にわたって主イエスの降誕の意義を学ぶ。最初の2回のテキストであるヨハネ福音書は、主イエスが永遠の昔から存在された神であることを強調している。この書き方は、王なるキリストを示すために系図から始めたマタイとも、家畜小屋で誕生された人なるキリストを描いたルカとも違っている。ヨハネは、読者が「イエスは神の子キリストである」と信じるため（20・31）に、このような書き方をしたのである。彼は、創世記の冒頭を念頭において、主イエスを次のように紹介する。

一、初めからおられた方

人間は、他の人に自分の考えや思いを伝えるために「ことば」を用いる。それと同様に、神はご自身がどういってお方を示すために、様々なものを用いられてきた。まず神に創造された自然は、神がどれほど偉大な方かを示している（詩篇19・1〜2、ローマ1・20）。預言者も神のことばを語ってきた（ヘブル1・1）。しかし、神が最も正確にご自身を啓示されたのは、ここで「言」と言われているお方によってである。神は「この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである」（ヘブル1・2）。

このお方は、△初めに▽と記されているように天地創造の時におられた。△神と共に▽とあるように神と別の人格をもちながらも、△言は神であ

った▽とも言われている。その△言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った▽。このお方こそ、イエス・キリストである。

それゆえ、主イエスは2千年前にこの地上に生まれになったのだが、本来は永遠の昔から存在されるお方なのだ。そして、神がどういってお方なのかを、この地上において示されたのである。

二、すべてのものを創造された方

△すべてのものは、これ（言）によってできた▽と明記されているように、このお方は創造された存在ではなく、創造なさったお方である。天使のような被造物ではなく、造物主ご自身である。

創世記1章には、△神は「光あれ」と言われた。すると光があつた▽とか、△神はまだ言われた、「水の間ににおそろがあつて、水と水とを分けよ」。そのようになった▽と、記されている。神の語られた言葉は、そのとおりに実現するのだ。

△ブル語では、「言葉」と「出来事」とは、同じ語で表現されるのだが、まさに主イエスは、神の「言」が具体的に人としてこの地上に誕生してくだされたお方に他ならない。ヨハネは、主イエスと3年余、生活を共にし、このお方が見えない神をそのまま体現しておられるお方だと確信したので、この福音書を書いた。天地を創造された造物主と別の人格でありながら、その神と全く同じ本質をもたれるゆえに、「神の子」と表現したので。

三、命を与える方

造物主と同じ本質をもたれているなら、当然、永遠の存在である。△この言に命があつた▽とは、

そのことを示している。さらに△御子を信じる者は、永遠の命をもつ▽（3・36）。つまり、主イエスが神の御子であることを信じて受け入れる者には、御子が持たれている永遠の命が与えられるのだ。

すべての人間は、肉体の命をもってこの地上に生まれてきた。しかし、その命はいつか終わって、死ぬ日がある。それが有限なる人間の定めだ。けれど、主イエスはそうではない。人間としてこの地上に誕生されたが、永遠の命をもっておられる神の子である。そのことを信じる者に対して、主は宣言される。△わたしは、彼らに永遠の命を与える。だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、彼らをわたしの手から奪い去る者はない▽（10・28）。なぜなら、△言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った▽からである。永遠の命をもつお方が、私たちの内に宿ってくださるゆえに、有限な人間にも永遠の命が与えられるのだ。

結論

クリスマスは、単に「イエス様の誕生日」というだけのものではない。それは、永遠の神が、ご自身を人間に示すために、目に見える人間としてこの地上においでくだされた日である。この広大な宇宙を創造されたお方が、罪にまみれて死ぬべき人間と同じ姿になられた。どんな人がうじ虫になりたいと思うだろうか。しかし栄光の神は、うじ虫よりもっとひどい姿になられたのである。このことを心から感謝し、主イエスの誕生を本当の意味で祝う者となろうではないか。

研究資料

（長田）

キリストの受肉

イエス・キリストの誕生は、「誕生」以上の出来事であった。キリストは、単に、歴史上の偉大な人物ということでは正しく理解しえないお方である。すなわち、キリストは、神が人となられたお方であつて、キリストの誕生とは、神が人として受肉降誕された出来事であつた（ピリピ2・6、7）。

本日の聖書箇所においては、キリストが以下のようなお方であることが記されている。

- ① 永遠の存在者（1）
- ② 神なるお方（1）
- ③ 万物の創造者（3）
- ④ 永遠の命をもっておられるお方（4）
- ⑤ 光なるお方（5）

このようなお方が、世にくだり、人となられるということは、人間の想像を超えた出来事である。造り主なる神が、被造物に過ぎない人間の姿になられたのであり、永遠なるお方が有限の世界に、命の保持者が死に満ちた世界に、光なるお方がやみの世界に入つてこられた。「受肉がどんなことを知りなければ、自分がなめくじやかになつた場合を想像してみなければならぬ」（C・S・ルイス、いのちのことば社『新聖書辞典』「受肉」の項）

キリストは、①目に見えない神を人々に示すた

め（ヨハネ1・18）、②私たち罪人を救うため（1テモテ1・15）、③あわれみ深い大祭司となるため（ヘブル2・17、18）、④私たちの模範として歩まれるため（1ペテロ2・21）、受肉降誕して下さった。このお方こそ、永遠にほめたたえられるべきお方である。

テキスト

1 初めに言があつた 万物の創造は、言葉を通して行われた（創世記1・3、6等）。「言」（ロゴス）という用語が、先在のキリストを表すために用いられたのは、そのためである。キリストは、その誕生以前から（ヨハネ8・58）、創造の初めから、永遠の初めから、存在しておられたお方である。

言は神と共にあつた キリストは父なる神と共に存在しておられた。ここには、御父と御子との分かちがたい関係が明らかにされると共に、両者の間の人格的区別が明確にされている。

言は神であつた キリストは、御父と区別されるお方でありながら、ご自身、神としてのご本質を持つておられる。

2 この言は初めに神と共にあつた 御父と御子との関係は、永遠の初めからのものであつた。

3 すべてのものは、これによってできた キリストは御父と共に、万物の創造に携わられたお方である（コロサイ1・16、ヘブル1・2）。

できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった 全宇宙、天使、私たち人間等、全

被造物が、例外なく御子によって造られた。

4 この言に命があつた キリストは命を持つておられ、また、命を与えるお方である。単に、肉体的命のみならず、永遠の命、霊的な命を与えて下さる（ヨハネ3・36等）。

この命は人の光であつた キリストは光なるお方（1・9、8・12、1ヨハネ1・5参照）。

5 光はやみの中に輝いている 世は、人間の罪によってやみとなつている（1ヨハネ1・6、2・11）。しかし、光なるお方がやみの世に入ってきて下さり、やみの中に光が輝いた（マタイ4・16）。やみはこれに勝たなかった やみの世は、この光なるお方を、死によって滅ぼそうとしたが、死に打ち勝ちやみがえられたお方は、永遠の光として世を照らし続けておられる。

中心聖句

14 言は肉体となり キリストの受肉の事実が、簡潔明瞭に表されている。キリストは永遠に神であられるのであつて、受肉によって神でなくなつたのではない。しかし、キリストは、神としての特権や栄誉に固執せず、100%人間になつて下さつたのである。

わたしたちのうちに宿った「宿った」（エスケーノース）の原意は「幕屋を張った」。旧約時代、神は、幕屋の中にご自身の栄光を現されたが、新約時代に至り、神は御子のうちに「ご自身の栄光を現された」。

聖書 ヨハネ1・1〜5
タイトル クリスマスって？

中心聖句 言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。 ヨハネ1・14

目標 神が人となられたクリスマスの意味を知って、まことのクリスマスをお祝いできるよう備える。

導入

きょうからアドベントに入ります。えっ？どんな弁当？と食いしん坊の人はいいそうですね。待降節といってクリスマスを待ち望む心備えの期間で、今年は11月30日(日)から12月24日(水)です。心わくわくさせる2種類の人々がいます。イエス様のことなんか全然知らないのに、クリスマスだからといって飲み食いし、踊ったり、プレゼントをもらったり、ケーキを食べて楽しんだりする人々と、罪人の私を罪と永遠の滅びから救うためにおいでくださった救い主イエス様に感謝し、恵みを深く味わう人々です。さあ、私たちはどちらでしようか？みんなが後の方だいいですね。そして、すばらしいクリスマスとなりますように！

ロゴスという見えない神が

ロゴスとはイエス様の別の名前です。ギリシャ語のロゴス、日本語では「言」と訳されています。「初めに言があった」(1)。イエス様は2000年前からではなく、初めから、永遠の昔からおられたお

方です。「言は神と共にあった。言は神であった」(1)。そもそも、イエス様は神と共にあり、そして神でした。さらに、「すべてのものは、これによってできた」(2)。つまり、「初めに神は天と地を創造された」とあるように、イエス様も創造の業を共にしました。この言に命があるからです。そして、この命は人の光でした。神様はご自分を示すために被造物、すなわち自然界を通して語られ、多くの預言者たちを通して語られました。「この終わりの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである」(ヘブル1・2)。私たちの所に来られる前のイエス様のお姿の、何とスケールの大きいこと！まさに栄光に輝くお姿でした。そして、私たちがその神様の栄光を見る時が来ました。それがクリスマスです。

イエスという見える人となって

人間が作った偶像は、見ることで、聞くことで、語ること、歩くこともできないけれど、イエス様は、神様が見える姿であらわれてくださったお方です。あれほどにも、栄光に輝いたお方が、私たちと同じ人間の形となっておいでくださったとは、驚くべきことなのです。永遠から永遠にいます、時に支配されない神が「見える人」となって、限られた33年余をこの地上で過ごしてくださったためにおいでくださった！それがクリスマスなのです。このお方は目で見ることができ、耳で聞くことができます、手で触ることのできるお方としてこの地上にきてくださった。まことに人であり神であるお方です。栄光に輝くお方が、私たちと同じように、弱く卑しい肉体の中に限定された方となられまし

た。神を見せることと同時に、私たちに「永遠の命」を与え、罪と永遠の滅びから救い出してくださるためでした。「この言に命があった」(4)からです。

例話

ここで再び、インドネシアのパウロと言われているヨセフ・ロニー先生の登場です。このヨハネ1章とヘブル1・2こそ、ガチガチのイスラムの指導者だった先生を180度転換させたポイントだったのです。イスラムの教師だった先生や仲間、何とかして聖書のまがい指摘しようとして、ヨセフ・ロニー先生が調べるようになりました。ヨハネ1章を何回も何回も読んで、すっかり暗唱してしまっただけです。言に命がありました。ヨセフ・ロニー師はピンとききました。神はこの終わりの時には、御子によって語られたのであって、預言者マホメットは賞味期限切れの預言者だ！と悟りました。まさに「この言に命があった」(4)のでした。ヨハネ1・1〜5を特に繰り返し読んで読むうちに、イエス・キリストは神であるということが、疑う余地もなく受け入れられたのでした。聖書、すなわち、み言葉を読むことは、何と大きな祝福となることでしょうか。「この言に命があった。そして、この命は人の光であった」(4)。

毎週そうそうが1本ずつふえていきます。私たちの心も、いよいよロゴス、み言葉なるお方に照らしていただき、主において栄光に輝く神様にお会いするにふさわしい者に整えられ、すばらしいクリスマスをお迎えしてお祝いしましょう。

ワーク A

話し方のヒント

今日からアドベントです。クリスマスを楽しみにしてその準備をします。プレゼントの準備でしょうか。いいえ、クリスマスの本当の意味がよくわかるように、お祈りして心の準備をします。イエス様は神の子でしたが、人間として歩むために、この地上に生まれてくださいました。それは、私たちが永遠のいのちをいただけるようになるためでした。「イエス様、ありがとうございます」と心から感謝しましょう。

●ワークについて
天使を作って、ツリーに飾りましょう。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。
●質問2 クリスマスの本当の意味を知らないで、ただおもしろおかしく過ごすという人々がたくさんいます。しかし、私たちは待降節の意味を知り、そして、まことの神様が人間の肉体をとられ、この世に来て下さったという、本当のクリスマスを知りましょう。
●質問3 神様であるお方が、なぜ人間となられ、この地上に誕生して下さったのかを悟り、ひとりひとりのうちに、救い主イエス様をお迎えしましょう。そして、本当のクリスマスを伝えましょう。

ワーク C

●博士の説明を生徒と一緒に確認してください。
●第2問 完全な神様であるイエス様が、完全な人間になられました。神と人(霊と肉)の違いを、実生活の感覚でとらえます。「うんち」「目くそ」「などは上品ではありませんが、実生活で両者の違いをとらえるためには有効な項目です。
●第3問 イエス様のへりくだりの大きさを感じ取るための質問です。
●第4問 神から人への大きな落差を飛び降りてくださったのは愛のゆえですが、川での事故の例をもとに神の愛を実感しようとする質問です。
●第5問 言葉で天地を創造された全能の神が、どうして、救いのために、肉体をとる必要があったのかを、み言葉から確認し話し合ってください。

ワーク D

●第1アドベントです。赤鉛筆でろうそくの火を1本ともしましょう。
●神は創造主であり、語られる神であり、永遠の命を与えられる神であることを、み言葉を通して確認しましょう。一人ずつ順番に読むと良いのではないのでしょうか。
●み言葉を聞き、読むうちにイエス・キリストが、いかなるお方であるかを知ることでしょう。そして、そのような方が人としてお生まれ下さったというクリスマスをどんなに意義深いことかを知ることになるでしょう。
●いつものことですが、子どもたちに教えるという立場ではなく、共に神の前に立つて、み言葉から教えられる教師でありたいと思います。

中高校へのヒント

- 考えてみよう
- 1 本書が書かれた目的は何ですか(20・31)。
- 2 ヨハネが主イエスを指し示すのに「言」という語を用いたのはなぜですか。
- 3 この箇所から、主イエスはどのようなお方だと言つことができますか。
- 4 「命」「光」「やみ」の性質、働き等を挙げてみましょう。本書全体で、これらの語がどのように用いられているか調べてみましょう。
- 自分にあてはめてみよう
- 1 あなたは光の中にいますか。それともやみの中にいますか。
- 2 あなたはイエスをどのような存在と認識していますか。自分自身をどのような存在と認識していますか。
- 話し合ってみよう
- 1 アドベントの期間をどのような思いで過ごしたらよいでしょうか。
- 2 神はご自身をどのような方法で啓示してくられたでしょうか。
- 3 この世は偶然にできたという考え方に立つと、人生観はどのようなものになるでしょうか。聖書の主張に立つと、どうでしょうか。
- 4 神が創造された世界に、どうして「やみ」があるのでしょうか。
- 5 心のやみを追い出された体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 ヨハネ1・9～13
テーマ まことの光

序論

今週のテーマは、先週の聖書箇所最後の節から始まっている。言（イエス・キリスト）には永遠の命があるゆえに、人の光であった。主自身も、わたしたちは世の光であると言われた（8・12）。光はその本質上、闇やみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。光がある所には、やみは決して存在できない。光がない状態がやみなのである。

6～8節は、光についてあかしをするためにきたバプテスマのヨハネについて説明している（この福音書では、ヨハネと記される場合はいつもバプテスマのヨハネを指すことに注意）。この箇所は文脈上では挿入部分であり、9節以降から、まことの光である方の紹介が始まる。

一、すべての人を照らす光

人間が作ったろうそくでもなく、ランプでもない、まことの光があつて、世にきた。先週学んだように、これは人間としてこの世に誕生された主イエスのことである。悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、くださる恵み深い父なる神は（マタイ5・45）、この世のすべての人を照らすために御子を遣わしてくださった。

クリスマスには燭火礼拝をする。ろうそくの光は、世の光として生まれてくださった主イエスを示しているのである。また最近、無数の豆電球を用いたイルミネーションがもてはやされるよう

になった。やみの中に輝く光は美しい。

闇やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に、光が照った（イザヤ9・2）という預言の成就として、主イエスは誕生された。全人類の心のやみを照らして罪を示し、罪から救い、世の光へと造り変えることこそが、主イエスの使命なのである。

二、光を受けいれなかった人々

主イエスが誕生されたとき、多くの人々は彼がまことの光であることに気づかなかった。世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいたのである。全世界を創造されたお方が、一人の赤ちゃんとして家畜小屋で生まれることなど、確かに信じがたいことだ。このことを知っていたのは、当時、ヨセフとマリヤ、そして数人の羊飼いと東方の博士だけだったであろう。

主が宣教をされていた時でも、主のことは受け入れた人々は少数だった。多くのユダヤ人たちは主を神の子と信じず、かえって十字架につけたのである。彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。

昼間でも、目をつぶればやみになる。主のみわざを見ても、悪霊のかしらの働きだと言うこともできる。問題は心だ。主のことは心に受けいれないなら、やみは光に変えられることはない。

三、光を受けいれた人々

しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。彼を受けいれるとは、その名を信

じることである。「名」は、単に他の人間と区別する便宜上のものではない。「名」によって、その人の全存在が表されているのだ。主イエスが神の子であり、やみから光に変えてくださった方であることを、そのまま受け入れるとき、私たちも人神の子となる力を与えられる。ここでは、主イエスに用いられる場合の「神の子」とは違ったギリシヤ語が用いられている（研究資料参照）。「息子」ではなく「子ども」である。また、「力」も「特権」ではなく「子」ともである。また、「力」も「特権」（新改訳）あるいは「資格」（新共同訳）と訳したほうが良い。本来は神の子ではない者が、そのように認められる特権・資格が与えられるのだ。

そういう者は、血すじ（両親の血）、肉の欲（人間の性欲）、人の欲（ユダヤ人の血統）によってではなく、ただ神によって生れたのである。これこそ新しく生まれること（3・3）であり、この地上に存在する時だけの肉体の命を越えた、永遠の命を与えられることだ（5・24）。

結論

私たちは、自分の心に、まことの光を受けいれているだろうか。2千年前、この地上に宿られたお方は、今、私たちの心に内住してくださる。「そんな馬鹿なことがあるわけがない」と言うなら、それは光を受けいれないことであり、心は真っ暗なままである。しかし、主イエスを神の子と信じるなら、私たちもひかり輝く神の家族に加えられる。このクリスマスを、主イエスを受け入れる機会にさせていだこう。

研究資料

（長田）

まことの光キリスト

キリストは、世を照らすまことの光として来られた（9・8・12）。キリストが公に働きを始めたとき、暗黒の地に光が照った（マタイ4・12・16）。この光は、どのような光であろうか。

①神としての光（1～5） 神は光なるお方である（ヨハネ1・5）。そのような意味で、御子キリストもまた、神としての輝きを放つお方である（Ⅱコリント4・6、ヘブル1・3）。

②罪を示す光（11） 世は、人の罪の故にやみとなっている。しかし、御子の光は、人の罪、世のやみを容赦なく照らし、明らかにする。多くの人々が、御子の光を拒む理由がここにある。彼らは、罪が明らかにされることを好まず、それよりはむしろ、罪の中に生き続けることを好むのである（3・19、20）。

③救いを与える光（12） しかし、自らの罪が明らかにされることを恐れず、光の中にとどまるなら、この光は、救いを与える光ともなる（ヨハネ1・7、エペソ5・13、14）。キリストは、私たちをやみの中から救い出し、光の世界に導き入れて下さる（エペソ5・8、コロサイ1・13、使徒26・18）。

④信仰の応答を求める光（12） 以上のような光として来られた御子キリストは、世に悔い改めと信仰による応答を求められる。やみの世界から立

ち上がって、光の世界に入るべく、「自身を受け入れるよう招いておられるのである」（イザヤ60・1、エペソ5・14）。

テキスト

9 すべての人を照らすまことの光 御子の光は、例外なく、すべての人々を照らしている。この光が届かないやみはない。「まことの光」と言われているのは、世に「偽りの光」が多いことの故である。

世にきた 御子は、天から遣わされて世に来られたお方。「世」（コスモス）は、「秩序」、「宇宙」とも訳される言葉であるが、聖書においては、主に、「神に背き、罪に満ちた世界」を表す言葉として用いられている。従って、世は、やみの世である（3・19）。御子は、このやみの世界を照らし、やみの中にいる人々を救い出して、光の子とするために、やみの世に来て下さった。

10 彼は世にいた 本来、世にいるはずのないお方が、罪にまみれた世に生まれ、生きて下さった。世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。世の造り主なるお方が来られたのに、世はこれをお方を拒み、無視し、気づこうとしない。11 彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受け入れなかった キリスト誕生の日、このお方を受け入れる客間がなかったことは、象徴的な出来事であった（ルカ2・7）。王がご自分の国に来たならば、最大の歓迎を受けてしかるべきである。しかし、ユダヤ人の王であるばかりでなく（マ

タイ2・2）、全世界の王なるお方が来られたとき（黙示録19・16）、多くの人は彼を受け入れようとしなかった。

12 しかし、彼を受け入れた者 信仰とは、自らの心と生涯とに、御子を受け入れることである。御子は、常に人々の心の戸をたたき、「ご自身を受け入れるよう招いておられる」（黙示録3・20）。すなわち、その名を信じた人々 「彼を受け入れた」ということと、「その名を信じた」ということが言い換えられている。信じるが故に受け入れるのであり、受け入れることなしに、「信じた」と言うことはできない。「名」とは、その人の本質、その人自身を表す。

彼は神の子となる力を与えた 「力」は、「特権」「資格」とも訳される。また、ここでの「子」（テクナ）は本来son（子）であって、son（ヒュイオス、息子）ではない。キリストの場合は、常に「息子」が使われるが、クリスチャンの場合は、両方が用いられる。本来、息子でない者が、息子として受け入れられ、迎えられる。御子を信じる時、御子はその資格を与えて下さる。

13 血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生まれた 救いは、100%神のみわざである。人の救い、神の子としての誕生は、所属する民族や家系によるのではなく、また、人間的な欲望や願い、人間の努力や働きで得られるものでない。ただ、一方的な恵みであり、神の方から世に生まれ、私たちを招き、光の中を歩む者へと生まれ変わらせたのである。

聖書 ヨハネ1・9～13
タイトル 主は光
中心聖句 すべての人を照すまことの光があ
って、世にきた。ヨハネ1・9
目標 まことの光として来られたイエス
様を心に迎えよう。

導入

今日は第2アドベント礼拝の日です。アドベント・クラントの4本のろうそくのうち、2本に火がともされます。美しい光ですね。光は目に快く、心も明るくされます。光といっても、たくさんの光があります。まず太陽の光、電気の光、ろうそくの光、月の光、星の光、そして、ホタルの光、花火もきれいです。道を照らす懐中電灯の光、ランプの光、光くんという名前の人にもいますよね。いろいろな光がありますが、今日の「まことの光」とは何のことでしょうか？

やみの中から

長い間真っ暗な中にいて、こわい思いをしたことありませんか？長いトンネルで、車のライトが照っていても、あまりにも長いと心配になってきます。人間は長く真っ暗な中にいると、気が狂ってしまうそうです。こうして考えると、私たちにあって光がどんなに大切なものか良く分かります。聖書が言っているやみとは、心のやみのことを言っているのです。つまり、まことの光である救

い主イエス様を、受け入れていない人の心のやみのことです。イザヤが700年も前に預言した「イザヤ9・2」とおりに、イエス様がたいなる光としてお生まれくださったのに、ユダヤの人々はその光を受け入れずに、イエス様を十字架につけてしまいました。光なるイエス様を、今も信じない人々の心はやみのようです。そんな2000年前の十字架は、私と一体何の関係があるの？と言いつつもクリスマスをお祝いするので、その心には何の光も入っていないことが分かります。やみの心は、人が見ていなければ恥ずかしい罪を犯します。心がやみなので一体自分が何を、どこへ行こうとしているのか全然分かりません。そこで不安や恐れが心にいっぱいになります。私たちは神様に造られた人間ですから、そんなやみの中にいると、何が本物なの？何のために生きるの？何が正しく何が絶対なの？と心は叫んでしまつのです。神様だけがそんな叫びに答えてくださいませ。みんなの心は叫んでいませんか？

光の中へ

「彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(12)彼とはイエス様のことです。イエス様を心に受け入れその名を信じた、つまり、イエス様を救い主と信じたら、神の子ともされるのです。イエス様がまことの光として、私たちの心のやみを照らすと罪がわかります。それとともに、その罪の刑罰を私に代わって十字架の上で受けてくださったイエス様が分かり、罪を神に告白して謝罪し、罪からの救い主と受け入れた時、罪のゆるし

と心の生まれかわりを経験します。心はやみの中から一気に光の中に移されるのです。その時から、私たちは神様の子ともになり、光なるイエス様を心にお迎えし、天国めざして正しい道をイエス様と共に歩むという喜びと平安に満たされます。さあ、このクリスマスにみんなまことの光なるイエス様を心にお迎えしましょう！

例話 『主は光』新垣勉先生

勉くんのお父さんはメキシコ系アメリカ軍人、お母さんは沖縄の日本人。1952年に生まれてまもなくして、助産婦さんのあやまちで、強い目薬が目に入り焼けただれて失明。父はさっさと米国へ帰り、母は祖母の手に勉君を預けて再婚。彼が中2の時、祖母は死の床で、はじめてそのことを彼にうち明けました。失明というやみに加えて、すべてを知った勉くんは正に真っ暗やみ。いつか父も母も助産婦も捜し出して殺そう、そして自分も死ぬんだ。憎しみと殺意の心で、寄宿舎の屋上に行つては、毎日涙のかけるまで泣きました。古井戸に飛び込んで死のうとした時、友に止められました。ラジオから耳と心に飛び込んできた美しい賛美歌によって、教会へと導かれキャンプに参加。そこで、こんな自分のために十字架で死んでくださったキリストと出会います。彼は一気にまぶしいばかりの愛の光の中へキリストを賛美し、救い主を証する光の子とされたのです。涙が出そうなほど、美しくきれいなイルミネーション。でも、イエス様という、人間の魂を照らすまことの光こそ重要です。

ワーク A

●11月30日～12月21日の聖句―ヨハネ1・9

●話し方のヒント

イエス様は「まことの光」でした。その光で心の中が照らされると、心の中の古い罪がよくわかるのです。罪をおわびしてゆるしていただく、今まで真っ暗だった心に光が来ます。イエス様といつもいっしょにいるようになるので、うれしい気持ちでいっぱいになります。「まことの光」であるイエス様が私の心にもいてくださるようにお祈りしましょう。

●ワークについて

クリスマスリースを作りましょう。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。

●質問2 光には色々な性質があります。いのちのエネルギーとなったり、暗いところを明るくしたり、暖かさを与えたり、目標となったりします。また、花火のように、人の心を楽しませる光もあります。そこで、まことの光とはどのような性質をもつのか詳しく知りましょう。

●質問3 私たちの心を照らされたとき、何が現れてくるでしょう。私たちの心のやみを照らし、救いを与えることができるのは、世を照らすまことの光として来られたキリストだけです。まことの光であるイエス様を心にお迎えしましょう。

ワーク C

●今回は文字の説明が多くなっていますが、博士の言葉の内容を確認してください。

●第2問 ◎は太陽の光です。イエス様は光の造り主、与え主です。

●第3問 変貌山でのイエス様のお姿は、神ご自身の光としての性質を一部見せてくださった場面です。ヨハネ1・18「ひとり子なる神だけが、神をあらわした」の意味は、肉眼で見えない霊なる神を見せてくださった、と同時に、太陽以上に輝く光である神様が、まぶしすぎ、強すぎて肉眼では見ることできない神の栄光を肉体の下に隠して地上に示されたことであると言えるでしょう。

●第4問 闇は「物・物質」でなく、光がない「状態」です。心の暗やみも、本当の光であるイエス様が心におられない状態のことです。

ワーク D

●第2アドベントです。赤鉛筆でろうそくの火を2本ともしましょう。

●今日の聖書箇所は短いので、みんな5回繰り返して輪読しましょう。ただ読むだけでも恵まれる箇所です。

●次に質問に答えていきましょう。イエス様を心に迎えてまことのクリスマスがお祝いできますように祈ります。ワークの最後に毎回のよう信仰を促す質問がありますが、一度限りの信仰告白ではなく、毎回繰り返し、告白しましょう。その都度新鮮な思いがよみがえるでしょう。今日はまだ、決心できないお友だちもいるかも知れませんが、今の気持ちを受け入れながら、決心できるチャンスを提供していきたいと思ひます。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 「自分の民は彼を受け入れなかった」のはなぜですか。
2 主イエスを受け入れると、どうなりますか。逆に受け入れないと、どうなりますか。
3 「その名を信じた」とは、どういう意味ですか。

4 神の子とされるのは、何によってですか。

5 私たちを神の子とするために、主イエスは何をしてくれましたか。

●自分にあてはめてみよう

1 あなたは主イエスに対してどういう態度を取っていますか。
2 あなたは神の子とされるような存在だったでしょうか(エペソ2章参照)。

3 あなたは神の子とされたという確信がありますか。その確信の根拠は何ですか。

●話し合ってみよう

1 神の子とされた者に与えられる特権は何ですか(ローマ8・14～17、ヘブル12・5～11、1ヨハネ3・2、5・4～5他)。
2 福音書の中から、主イエスを信じた人の人生がどのように変えられたかを見てみましょう。
3 主イエスを受け入れない人々のために、私たちは何をすべきでしょうか。
4 あなたが神の子とされた体験を分かち合ひましょう。

聖書 ルカ1・57～79
テーマ ザカリヤの賛歌

序論

ルカによる福音書は、主イエスの誕生物語の中で、3つの賛歌を記録している。多分これらは、初代教会において歌われていたものだろう。「マグニフィカート」と呼ばれているマリヤの賛歌は昨年学んだので、今年は残り2つを扱おう。今週は、バプテスマのヨハネの父ザカリヤの賛歌である。この歌は、マリヤの賛歌と同じく冒頭のラテン語訳にちなんで、「ベネディクトゥス」(ほむべきかな)と呼ばれている。ここでザカリヤは、息子の誕生のゆえにという以上に、イスラエルの神が、へわたしたちのために救の角を僕ダビデの家に立てになったことのゆえに、神をほめたたえていることに注目したい。

一、あわれみによる救い

へあわれみという語は、58、72、78節に出てきており、それらはすべて主なる神が示してくださったものである。まず、不妊の女といわれていたエリサベツが男の子を産んだことは、神のあわれみであった(58)。それゆえに、御使が教えたとおりに、その子はヨハネ(ヘブル語ではヨハナンで、「主はあわれみ深い」という意味)と名づけられたのである。この主のあわれみは、すでに父祖たちにかかれていた(72)。アブラハムへのあわれみは、老齢で子を生んだサラにも示されている。そして最後に、へそのあわれみによって、日の光

が上からわたしたちに臨むのである(78)。

へ日の光とは、メシヤを意味する「枝」という語(ゼカリヤ3・8、6・12)のギリシャ語訳であることは興味深い(『新聖書注解』)。

まことの光である主イエスがこられたのは、神のあわれみ以外のなにものでもない。へ暗黒と死の陰とに住む者を照し、てくださる主のあわれみを、私たちも心からほめたたえよう。

二、敵の手からの救い

救い主は、へわたしたちを敵から、またすべてわたしたちを憎む者の手から救い出してくださる。これは、イスラエルを苦しめたペリシテ人、バビロニア帝国、また当時のローマ帝国等から救い出してくださるという意味にもとれる。だが最大の敵はサタンである。アダムとエバを惑わした敵は、それ以後もずっとその働きを続け、人々の目を神以外のものに向けさせようとしてきた。その結果、「地を見ると、見よ、悩みと暗きと、苦しみのやみとがあり、彼らは暗黒に追いやられ」てしまったのである(イザヤ8・22)。

しかし、まことの光である主イエスは、そういう人々をへ敵の手から救い出し、生きている限り、きよく正しく、みまえに恐れなく仕えさせてくださる。敵の手に陥っている間は、神に仕えることはできない。敵から救われてはじめて、悪を行なうのではなく、神の前にきよく正しく生きることができる。神を裁き人のように考えて恐れる必要がなくなり、自由な意思をもって、喜んで仕えることができるようになるのである。

三、罪のゆるしによる救い

人がへきよく正しく生きるためには、まず、その人の過去の罪がゆるされなければならない。このことを知っていたザカリヤは、自分の息子について、へ幼な子よ、あなたは、いと高き者の預言者と呼ばれるであろう。主のみまえに先立って行き、その道を備え、罪のゆるしによる救をその民に知らせるのであるからと預言した。自分の息子に関する唯一の箇所である。

バプテスマのヨハネの使命は明白だった。へ彼は光ではなく、ただ、光についてあかしをするためにきた(ヨハネ1・8)。罪があるなら、人は神に仕えることはできない。だから、まず罪があることを人々に示し、悔い改めのバプテスマを受けるように導くことが主の道を備えることであり、ヨハネの使命だった。

しかし、主イエスはヨハネができないことをなさるお方である。ヨハネは主に對して、へ見よ、世の罪を取り除く神の小羊(ヨハネ1・29)と叫んだ。罪をゆるし、取り除くことは、神の御子であるお方しかできないからである。

結論

主イエスがこの地上に生まれてくださったのは、私たちの罪がゆるされ、きよく正しく生きることによって、神に仕えるようになるためである。そのためには、神の御子が罪人の身代わりとならねばならなかった。クリスマス背後には、十字架がある。クリスマスの喜びは、神の払われた犠牲を覚えるとき、さらに大きなものとなるのだ。

研究資料

(長田)

ベネディクトゥス

バプテスマのヨハネ誕生に際し、父ザカリヤが聖霊に満たされ、預言した言葉(賛歌)は、冒頭(「ほむべきかな」)のラテン語訳よりベネディクトゥスと呼ばれている。息子についての預言(76、77)を含みつつも、おもに、救い主、主イエスについて預言している。聖霊は、常にキリストを証しする霊であることの一例であらう(ヨハネ15・26)。この預言において、キリストがどのような救いを与えるお方であるかが明らかにされている。①敵からの救い(71、74) キリストの救いは、人類の敵である悪魔からの救いである。悪魔は、サタン(ヘブル語で、「敵対者」を意味する)とも呼ばれ、キリストも悪魔を「敵」と呼ばれた(マタイ13・39、ルカ10・18、19)。彼は、人類を罪に誘い、神から引き離し、滅びに至らせようとして働いている。しかし、キリストは、「悪魔のわざを滅ぼしてしまうため」(「ヨハネ3・8」)に來られた。キリストは、「自身の十字架の死と復活により、私たちを敵の手から救い出して下さる。②きよい生涯に至らせる救い(75) 敵からの救いが、消極的な一面(へからの救い)であるとするれば、積極的な一面(へへの救い)として、キリストの救いは、私たちをきよい生涯に至らせる救いである。神の前にきよく正しい生涯は、喜びと平安に満ちた、神への奉仕の生涯であり(75)、

光と平和に満ちている(78、79)。

③罪のゆるしを与える救い(77) 悪魔は、私たちを罪に誘い、罪に陥った者を告発する(黙示録12・10)。また、いかに私たちがきよい生涯を切望したとしても、過去の罪の記憶は、私たちを罪の縄目の中に縛り付ける。しかし、キリストは、私たちの罪の身代わりに死んで下さり、信じる者の一切の罪をゆるし、きよめて下さる(ヘブル9・14、1ヨハネ1・7、9)。罪のゆるしこそは、悪魔の手からの救い、きよめられた生涯への基点である。

テキスト

57 エリサベツは月が満ちて、男の子を産んだ
キリスト誕生の半年前(26)。
59 父の名にちなんでザカリヤという名にしよう
とした 当時、普通に行われていたこと。
60 母親は、「いいえヨハネという名にしなくては
いけません」と言った エリサベツも、ザカリヤ
から御使いの語りかけを伝えられていたのであ
らう(13)。
63 その名はヨハネ 「ヨハネ」は、「主はあわれ
み深い」の意。神は、子どものなかったザカリヤ、
エリサベツ夫妻に對してあわれみを示されたばかり
ではなく(58)、罪の中に滅びようとするすべて
の人々に對してあわれみ深い、救い主キリストを
備えて下さった(72、78)。
64 すると、立ちどころにザカリヤの口が開けて
不信仰によって口がきけなくされてたザカリヤは

(20)、人知を超えた神のご計画に對し、信仰と従順によって応答したとき、再び口が開かれた。

69 救(い)の角 詩篇18・2。角は、動物の力が表される場所。御子のうちに、神の救いの力が表されている(1コリント1・18)。

71 敵から：救い出すため 「イスラエル」(68)、「ダビデの家」(69)、「父祖アブラハム」(73)等の言葉から、民族的救いのみを語っているようであるが、75節、79節へのつながりを見るとき、全人類の霊的救済までを含むものであることが分かる。

76 幼な子よ 息子ヨハネについて預言されている。ヨハネの第一の使命は、主イエスの道備えであった(3・4)。

77 罪のゆるしによる救(い)をその民に知らせるのであるから ヨハネは、「罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマ」を宣べ伝えた(3・3)。しかし、これは、あくまでもキリストによる全き救いを受けるための備えであって、御子の贖いによって罪ゆるされ(ヨハネ1・29)、聖霊を受けるための備えであった(3・16、使徒19・1～6)。
78 日の光が上からわたしたちに臨み イザヤ60・1、2。

79 暗黒と死の陰とに住む者を照し イザヤ9・2、マタイ4・16。
わたしたちの足を平和の道へ導くであろう イザヤ9・6、7。

聖書 ルカ1・57〜79
 タイトル ほめたたえよう
 中心聖句 罪のゆるしによる救いをその民に
 知らせるのであるから。ルカ1・77
 目 標 罪のゆるしのグッド・ニュースを
 ほめたたえ、知らせよう。

導入

いよいよ3本のろうそくに火がとまります。今日は第3アドベント、そして来週はクリスマス礼拝。教会だけでなく、村にも町にも都会にもクリスマス・キャロルがあふれますね。クリスマスを歌う賛美歌がこんなにたくさんあるなんて、中には歌ったことのないものもあります。きっと世界には、私たち日本人の知らないキャロルもいっぱいあることでしょう。クリスマスは小さい子どもから大人まで、みんなの心に賛美があふれます。すばらしいなアと感動の連続です。今日は、その最初のクリスマスに神様をほめたたえたザカリヤさんの歌を読み、私たちも心から一緒に神様をほめたたえましょう。

救いをほめたたえよう

この救いは、あわれみ深い神様が備えてくださったものです。救い主イエス様の道備えをするために生まれたバプテスマのヨハネの誕生も、神様のあわれみ一色でした。お母さんとなったエリサベツは、子どもを産めない老婦人になっていたの

に、神様の大きなあわれみによってヨハネを産みました(58)。御使いの言葉のとおり(1・13、63)「ヨハネ」は主はあわれみ深い、という名前にしたのでした。「救いの角」(69)「日の光」(78)はどちらもやがてヨハネが指さす、まことの光であって罪を取り除く神の小羊イエス様のことです。このお方こそ、信じる者を「敵の手から救い出し」(74)、「罪のゆるしによる救」(77)いを与えてくださる方なのです。人より強い、最大の敵はサタンです。いつもわたしを神様の道から離れさせようとして誘ってきます。そして、罪に陥らせようとしています。どんなに強いと思える人間でも、罪とサタンには絶対に勝てません。十字架の上で死んでくださり、よみがえられたイエス様だけが、私たちに勝利を与えてくださいます。だから、私たちもザカリヤと同じように、この罪とサタンからの救い主、永遠の滅びから救い出してください。尊い救い主を、心いっぱいほめたたえましょう。

救いを知らせよう

ザカリヤの賛美のほとんどは、救い主イエス様と契約の神様へのほめ歌ですが、今日の金言のところで、あわれみによって与えられたザカリヤの息子のヨハネについてです(76、77)。なぜバプテスマのヨハネが誕生したかというと、イエス様のために道を備え、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ1・29)と人々に救い主のことを叫んで知らせるためだったのです。

みんなの罪はもうイエス様におわびしてゆるされていますか？その時の喜び、今も心にいっぱいありますか？この罪のゆるしを与えてくださった

神を心から賛美し、グッド・ニュースを伝えられるのは、罪をゆるされた喜びを知る私たちだけです。みんなのまわりのお友だちや近所の人々、家族の中にも罪に悩んでいる人たちがきっとたくさんいるでしょう。クリスマスは、この救いを知らせる良い時です。むずかしいなと思ったら、とにかく教会の楽しいプログラムに誘いましょう！

例話

救い主イエス様をほめたたえているスウェーデンのゴスペル歌手、その名はレーナ・マリヤ・ヨハンソンさん。1968年にハーボ村に生まれましたが、生まれつき両腕がない。左脚は右脚の半分しかない。神様を信じる立派な両親は、彼女が3歳になった時、家族で水泳教室に通い始めました。自分で何でもできるように、唯一残された右脚は両腕の働きができるようになりました。幼いときから教会の聖歌隊で歌い、高校で音楽を専攻。19歳でストックホルム音楽大学入学。23歳で卒業。「神様が私に障害を残しておられるのは、人間にとって大切なのは、体の健康よりも、魂の健康である」とを明らかにするためだと思っています」とさわやかに語ります。そんな神様をたたえるために、コンサートでよく「詩篇23篇」を歌います。「主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。両腕がないのに乏しいことがない」と喜んで歌っている。救い主をほめたたえ、人々に救い主イエス様を紹介し続けているレーナさんです。

私たちも特別な声はなくても心から主を賛美し、多くの人々に救い主イエス様を知らせたいですね。

ワーク A

話し方のヒント

私たちの最も恐ろしい敵は悪魔です。私たちが神様をきらいになるようにしたり、罪を犯すようにいろいろ攻撃してきます。私たちは弱くて負けてしまうのですが、イエス様は絶対に負けません。イエス様を信じているなら、弱い私たちも悪魔に勝てるのです。悪魔に勝つことができ、罪を心配しなくても良いとはなんとという喜びでしょう。たくさんの方がこの喜びを知ることができるように祈り、そして伝えましょう。

ワークについて

星の飾りを作りましょう。

ワーク B

- 質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。
- 質問2 神様を信じなかったザカリヤは、口がきけなくなっていました。しかし、子どもが生まれ、神様を信じてヨハネという名前をつけたとき、話すことができるようになり、ザカリヤは神様をほめたたえることができるようになったのです。神様をほめたたえた内容を具体的に知りましょう。
- 質問3 子どもたちも罪が赦されて、神様をほめたたえることができるように、また、イエス様を伝えることができるようにと導き、子どもたちと共に祈りましょう。

ワーク C

●今回も文字の説明が多いので、よく読んで内容の確認をしてください。

●第2問 「ザカリヤの賛美(ベネディクトゥス)」と「マリヤの賛美(マグニフィカート)」の呼び名を紹介しています。博士の言葉が答えです。

●第3問 いっしょに考えるための質問です。三者の中味を読んで、重要性の差を確認します。祭司も、バプテスマのヨハネも重要な役割ですが、その本体・中心は救い主イエス様にあるということ、その救い主に仕える役目を彼らが持っていたことを確認します。だから、ほめたたえられるのは救い主なのです。

●言葉の意味や読み方を教える必要があるところがあると思います。会話しながら進めてください。

ワーク D

- 第3アドベントです。赤鉛筆でろうそくに火を3本ともしましょう。
- (1) (3)は聖書をよく読んで答えます。右側の例話はどれかを考えます。
- ワークに説明したとおりです。メロディーを紹介できないのが残念ですが、ご希望の方は待望教会、上森までご連絡ください。写りは悪いですが、譜面をFAXさせていただきます。詩を読むだけでも感動しませんか？作者からご好意で許可をいただきました。
- 現代のザカリヤさんになって、私たちも心にある主への賛美を詩にしてみませんか？

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 バプテスマのヨハネはどのようにして誕生しましたか。その名前の意味は何ですか。
 - 2 口がきけるようになったザカリヤが、真つ先にしたことは何ですか。その時、近所の人々はどういう反応を示しましたか。
 - 3 ザカリヤの賛美を二つに分けてみましょう。前半部分から、神はイスラエルにこれまで何をなされたか、その歴史を振り返ってみましょう。
 - 4 「敵の手から救い出」す目的は何ですか。
 - 5 バプテスマのヨハネと主イエスに与えられた使命は、それぞれ何ですか。
- 自分にあてはめてみよう
- 1 あなたは神の恵みのみ言葉を本当に聴いていますか。
 - 2 あなたの名前に込められた意味、親があなたに期待していることは何でしょうか。
 - 3 あなたが救われたのは何のためですか。神があなたに与えられている使命は何でしょうか。
- 話し合ってみよう
- 1 ザカリヤはどうして口がきけなくなったのでしょうか。その間、何をしていたのでしょうか。
 - 2 イスラエルの不従順にもかかわらず、主イエスは来臨されました。なぜでしょうか。
 - 3 神はあなたの人生にこれまで何をなされたか、これから何をしようとしておられるのか、分かち合いましょう。

聖書 ルカ2・21～38
テーマ シメオンとアンナ

序論

バプテスマのヨハネが誕生後8日目に割礼を受け、命名されたと全く同じように、幼子イエスも8日目に割礼を受け、命名された。さらに両親は、モーセの律法に従って40日目に宮に行き、貧しい人々に定められた犠牲をささげた（レビ12章参照）。神の御子である方が、当時の人々と全く同じように律法に従われたのだ。△それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに与える身分を授けるためであった（ガラテヤ4・5）。クリスマスは、まさにここにある。

この宮において、シメオンとアンナという2人の人物が主にお会いした。彼らの言動は、救い主イエスの使命が何であるかを明確に示している。

一、万民のための救い主

最初に登場するのはシメオンである。△この人は正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。29節から推測すると、彼はかなり年をとっていたと思われる。旧約聖書に預言されているように救い主が来られ、イスラエルの民の信仰が回復するよう、彼は長い間待ち望んでいた。聖霊が彼に宿っており、救い主に会うことを示し、そして宮に導かれたのである。

幼子イエスに会ったシメオンが歌った賛歌は、これまでの2つの賛歌と強調点が異なっている。△この救いはあなたが万民のまえにお備えになったもので、異邦人を照す啓示の光、み民イスラエル

の栄光であります。これまでの賛歌はイスラエルの救いに重点が置かれていた（1・54、55、68、69、73）が、ここでは万民の救いが強調され、異邦人にも啓示の光が届くことが預言されている。パウロと一緒に異邦人伝道に励んでいたルカは、この預言を知ったとき、大きな感動を覚えたであろう。しかしながら、この救いがみ民イスラエルの栄光であることも忘れてはならない。

二、反対を受けた救い主

続いてシメオンは母マリヤに言う。△この幼子は、イスラエルの多くの人を倒れさせたり、立ちあがらせたりするために、また反対を受けるしるしとして、定められています。イスラエルの栄光である方が、そのイスラエル人から反対を受けるとは。ヨハネ福音書が言うとおり、△彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受け入れなかった。△のである（1・11）。主イエスが十字架刑を受けられたとき、マリヤは△あなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう。△この言葉を思い出していたに違いない。

なぜ、救い主が反対を受けなければならなかったのか。△それは多くの人の心にある思いが、現れるようになるためであった。△義の律法を追い求めていたイスラエルは、その律法に達しなかった。△信仰によらないで、行いによって得られるかのように、追い求めたからである。△（ローマ9・31、32）。行いによって救われようとする人々は、罪を赦してくださる救い主を必要としない。信仰というものがわからないからだ。

三、待ち望まれた救い主

しかし、全てのイスラエルの民が反対したのではない。シメオン自身、△イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。△し、アンナという女預言者も△宮を離れず夜も昼も断食と祈をもつて神に仕えていた。△。だからこそ彼女は主イエスにお会いできたし、△この幼な子のことを、エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語りきかせたのである。

イスラエルの民であろうとも、異邦人であろうとも、自分の行いによって義とされないことを自覚している者は、罪から救ってくださる方を待ち望む。そして、その救い主を受け入れ、信仰によって救われる。それと対照的に、自分の行いによって義とされようとする者は、その救い主を邪魔者扱いして、ひたすら自分の努力に頼る。まさに、△心にある思い△が現れるのだ。私たちは、自分の行いによって救われようとしているのか。それとも、救い主を待ち望んでいるのか。

結論

今日はクリスマス礼拝の日である。全世界での礼拝がさげられている。私たちは、どんな民族であろうとも、行いによってではなく、主イエスを罪からの救い主と信じる信仰によって救われることを確信して、神をほめたたえよう。家畜小屋にお生まれになった救い主イエスは、私たちの心にも住んでくださることを信じて、このお方の光で周囲を照らすものにさせていた。△。

研究資料

（長田）

シメオンの賛歌

キリスト誕生後、両親が幼な子連れてエルサレムに行ったとき、シメオンという老人が幼な子を抱き、神をほめたたえつつ預言を語った。初めの言葉のラテン語訳から、「メソク・ディミッティス」と呼ばれる。彼の預言の言葉を通して、キリストがどのようなお方であるかが明らかにされている。

①救い主（30） 彼は、「わたしの目が今あなたの救いを見た」と語った。何の力もないように見える幼な子に対する言葉としては、奇妙にも見える言葉である。しかし、このことの内に、神なるお方が人となって生まれ、救いを与えるという、神のご計画の不思議さが表れている。

②万民の救い主（31、32） キリストが与える救いは、万民のために備えられる救いである。多くのイスラエルの民は、自民族の救い主のみ求めていたが、神のご計画は、はるかに大きなものであって、その救いは、すべての民、世界中の人々を含むものであった（2・10）。

③十字架の苦しみを受ける（34、35） シメオンの言葉を不思議な顔をして聞く母マリヤに、彼は、幼な子が受けなければならない苦難があること、また、そのことによって、マリヤの心も剣で刺し貫かれるような思いがするであろうことを預言した。これは、もちろん、御子の十字架の預言であ

った。キリストは、御誕生の時から既に、十字架の死に向かって歩む使命を担っておられた。

④このお方をどのように迎えるかによって、人々は二分される（34、35）。ある人々は、キリストを拒む。その心に真理を愛する心がないためである（ヨハネ3・18、20、Ⅱテサロニケ2・10）。その結果、彼らは滅びに向かう（ヨハネ3・36）。また、ある人々は、義に飢え渇き、自分の中に義がないことを悲しむ（マタイ5・4、6）。その故に、彼らはキリストのもとに来て、罪を赦され、永遠の命を受けるのである（ヨハネ3・36）。

テキスト

21 御使が告げたとおり（1・31）。

22 モーセの律法による彼らのきよめの期間

男児の場合、40日間（レビ12・2～4）。

23 「母の胎を…」（出エジプト13・2、12）。

24 「山ばとひとつがい…」（レビ12・8）。この規定は、小羊に手が届かない時の規定であるので、ヨセフとマリヤは、決して裕福ではなかったことがうかがえる。

25 シメオン 「正しい信仰深い人」、「イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた」、すなわち、救い主を待ち望んでいた人、聖霊が宿り（25）、御霊に示され（26）、御霊の感動と導きのうちに歩んでいた人（27）であった。

27 御霊に感じて宮にはいった。すると…御霊の導きは、しばしば、人知を超えた絶妙なタイミングをもたらし。

29 今こそ…この僕を安らかに去らせてください。ます 彼の生涯における最大の神のお約束が果たされたことへの満足と喜びが表されている。

30 今あなたの救いを見た 神の救いのご計画のすべは、この赤ん坊の中に隠されていた。

31 異邦人を照す啓示の光 イザヤ42・6。

36 アンナという女預言者 「非常に年をとって」（36）84歳になっており、絶えず宮にいて「断食と祈（り）」をもって神に仕えていた（37）。「むすめ時代にとついで、七年間だけ夫と共に住み、その後やもめぐらしをし、八十四歳に」（36、37）との記述は、彼女が神に専心仕えた年月が極めて長いものであったことを示している。

38 この老女も、ちょうどそのとき このタイミングもまた、聖霊が導かれたことによるものである。この幼な子のことを、エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語りきかせた。彼女が語った内容については、記されていないが、シメオンと同様、この幼な子こそ、人々が待ち望む救い主であると証したことであろう。宮には、その時、多くの人々がいたであろうが、この幼な子に注目したのは、救い主を待ち望んでいた神の僕たちであり（25）、また、彼らの証しに耳を傾けたのも、救い主を待ち望んでいた人々であった。待ち望む者に対して、神は救い主を示し、豊かな恵みをもって応えて下さる（イザヤ40・31）。

聖書 ルカ2・21～38
タイトル クリスマスおめでとう

中心聖句

この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光であります。ルカ2・31、32

目標

すべての人の救い主、わたしの救い主であるイエス様を、心から感謝し、礼拝をささげよう。

導入

毎週日曜日は、神様を礼拝し、神様の家族とお会いする特別な日です。その中でも、今日はその特別なクリスマス礼拝の日曜日です。クリスマスおめでとうございます。今年もヨセフさんとマリヤさん、天使たちや羊飼いたち、博士さんたちなどが登場する劇をしましたか？今朝はちょっと珍しい人、シメオンさんとアンナさんの登場です。ザカリヤさんにつづくシメオンさんの歌はどんな内容だったでしょう？

すべての人のクリスマス

正しく信仰深い人シメオンさん、その名前も「神様が聞かれた」という意味です。シメオンさんのお祈りが届いて、聖霊がその心に宿り、救い主にお会いするまで死ぬことはないよと、聖霊の示しを受けた老人でした。イエス様だけではなく、何人もの子どもが献児式に連れてこられていたの

に、シメオンさんはすぐイエス様が分かりました。聖霊に感じたなんてすごいですね。そして、イエス様を抱いて、神様を心からほめたたえて言いました。「私は今この目で神様の救いを見たのでいつ死んでもいいです。この救いは神様が万民のまえに備えられたもので、異邦人を照らす啓示の光、み民イスラエルの栄光です」と。この救いは、ただイスラエルの人々のためだけではなく、万民のため、異邦人のためですと歌いました。

ほんとうのクリスマス

シメオンさんは、もう一つのきびしい預言もしました。「この幼子に反対する人々もおこるし、お母さんのマリヤさん自身もつるぎで胸を刺し貫かれます。それは多くの人の心にある思いが、現れるようになるためです」と。このことは何を示しているかというと、律法を守ることによって神様に受け入れられようとしていたイスラエルの人々は、激しくイエス様に反対し、ついに十字架につけてしましますよということ。ユダヤ人たちは、イエス様を信じるだけで罪がゆるされ、神様に義とされるといことが、がまんできなかったのです。こういう人々には、まだほんとうのクリスマスはおとずれしていません。

ユダヤ人の中でもシメオンさんと共に、やはり

老婦人だったアンナさん（その名は恵みさん）も、心から救い主を待ち望んでいた人です。ちょうどその時近寄ってきて、幼子のことを神様に感謝し、同じように救いを待ち望んでいるすべての人々に伝えました。

例話

メシヤニック・ジューであるデービッド・ゴードスタインさんの話。1955年アメリカ生まれのユダヤ人。両親が新潟大学の教授だったので日本に滞在していました。不思議な導きでクリスチャン女性と結婚。彼女の勧めで聖書の学び会に行きましたが、長年、キツチリとユダヤ人の数々の祭や儀式の中で日常生活をしてきましたから、なかなか信仰の決断にいたりません。しかし、仕事で日本に来て、新潟の両親のもとに向かう列車の中で、あるクリスチャンの小冊子を読んでいた時でした。その終わりには、信仰の決断を促すページがあり、デービッドさんは一つ一つ答えていきました。罪人です。イエス・キリストの十字架による救いが必要。信じます。その時どこからともなく「おおどろくばかりの」、アメイジング・グレイスの曲が流れてきて、デービッドさんは自分が救われて、神の子とされた喜びに涙があふれました。本当のクリスマスを経験したデービッドさんは、今その証を多くの人々に語っておられます。

ユダヤ人でも異邦人でもみんな心の問題、魂の問題は同じです。すべての人々の救い主イエス様を心から感謝し、礼拝をささげましょう。

このクリスマス、わたしたちもほんとうのクリスマスな心からお祝いできますように！

ワーク A

話し方のヒント

シメオンおじいさんは幼子のイエス様にお会いして、とても喜びました。長い間救い主に会えることを楽しみに待っていたからです。「この人は神の救いです。でもたくさんの方が反対してつらいこともたくさんあるでしょう」と、神様が教えてくださった事を言いました。反対した人たちが最後にはイエス様を十字架につけたのです。でも救い主をずっと待っていた人たちはイエス様を喜び、今もクリスマスをお祝いするのです。

ワークについて

ベルのクリスマスカードを作りましょう。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。

●質問2 イエス様が割礼を受けようと宮を訪れた時のことです。正しく信仰深いシメオンと女預言者アンナは神様に導かれて宮に入り、救い主イエス様と出会いました。そして、喜びにあふれて神様に感謝し、礼拝をささげました。そのときの様子を詳しく知りましょう。

●質問3 イエス様はユダヤ人だけでなく、異邦人も救われるようにと、この世に来て下さいました。日本に生まれた私たちが異邦人であることを知り、イエス様の救いを信じ感謝し、心から礼拝しましょう。

ワーク C

●第1問 今回は3箇所だけ書き込みます。

●第2問 「赤ちゃん（幼な子）のイエス様」が答え。

●第3問 この救いの内容について、聖書を調べて書き込みます。「すべての人」「異邦人」「2種類」が答え。

●第4問 この問は聖書をいっしょに読んで話し合ってください。目の前の無力な何もできない赤子を見て、全人類の救い主だ、と悟ることは驚くべきことです。心の中の信仰の備えと、聖霊なる神様からの示しがあつたことの画面を確認します。

●第5問 あなたにも心の備えがあり、救いを真剣に待ち望むなら、必ず救い主を知り救われることができる、と話します。

ワーク D

●クリスマスおめでとうございます。赤鉛筆で4本のろうそくに光をともしましょう。

●今日のワークは難しいでしょうか。博士になった気分、聖書とにらめっこして取り組んでください。案外スラスラとやってしまいかも知れませんが。

●人となってお生まれ下さったイエス様を心から喜び、お祝いしてください。

中高校へのヒント

考えてみよう

1 24節から、主イエスの家族について何がわかりますか。

2 シメオンとアンナはどのような信仰生活を送っていましたか。二人が幼な子イエスに出会うことができたのはどうしてでしょうか。

4 幼な子イエスに出会ったシメオンとアンナは、その後どうしましたか。

5 主イエスはどのような使命をもって来臨されたのですか。

自分にあてはめてみよう

1 あなたは普段どのような信仰生活を送っていますか。再臨の主にお会いできる信仰生活でしょうか。

2 主を信じていながら、「つるぎで胸を刺し貫かれる」ような試練や苦悩を味わったことがありますか。

3 主イエスの十字架を前にして、あなたの「心にある思い」は何ですか。

話し合ってみよう

1 シメオンの祝福の言葉の中に、祝福とは正反對のように思える十字架が預言されています。どうしてでしょうか。

2 真の祝福とはどのようなものと言えますか。

3 み言葉が与えられ、そのとおりになった体験、苦難が祝福に変わった体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 ルカ4・16～30
テーマ 主のめぐみの年

序論

今年最後の日曜日、一年の恵みを感じるとともに、来年への期待を分かち合うことができれば幸いだ。今週の学びは、これから週間続く新しい單元「主に出会った人」の初回である。ルカ福音書にも、主と出会った多くの人々が記されている。その中には、主を救い主として受け入れた人々もいるが、受け入れなかった人々もいた。ヨハネ1・11、12で学んだとおりである。なぜ、そのような違いが生まれるのだろうか。

一、「めぐみ」の意味

今週のテキストには、19節と22節に同じ「めぐみ」という語が出てくるが、ギリシャ語では違う言葉が用いられている。19節の語は、直訳すると「受け入れられる」という意味であり、同じ語が24節では「歓迎する」と訳されている（だが22節の語は、パウロ書簡に何度も出てくる「神の」良い思い、好意」という意味）。それゆえ「主のめぐみの年」とは、「神に受け入れられる時代」という意味だとわかるだろう。有名な「今は恵みの時」（Ⅱコリント6・2）という場合にも、同じギリシャ語が用いられている。

主イエスは、悪魔の誘惑に勝利された後、自分の故郷ナザレに帰られ、安息日に会堂でイザヤ書61・1、2を朗読された。そこには、主なる神が、貧しい人々、囚人、盲人、打ちひしがれている者に「福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別

してくださった」と記されていた。そして、主は「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」とおっしゃったのだ。

主イエスは、当時、多くの人々から軽視されていた人々を受け入れられた。取税人や遊女の中に入っていく、多くの病人を癒された。何よりも、罪人の友となり、彼らの罪を赦され、サタンの支配から彼らを解放された。確かに主は、囚人が解放され、盲人の目が開かれ、打ちひしがれている者に自由を得させ、来るために来られたのだ。これこそ福音である。

二、主を受け入れない人々

ナザレの人々は、主のめぐみの言葉に感嘆したのだが、その直後に、この人はヨセフの子ではないか」と言っている。大工の息子でしかないイエスが、まさかイザヤが預言していたメシヤであるとは思えなかったのだ（並行箇所であるマルコ6・1～6を参照）。主も彼らの心を知っておられたので、ヘカバナムで行われたと聞いていた事を、あなたの郷里のこの地でもしてくれ、と言ったであろう」と仰せられた。故郷の人々は、「イエスがメシヤなら、奇跡をおこすに違いない。そうしたら信じてやる」と思っていたのだ。

彼らの多くは、「打ちひしがれている者」ではなかった。「自分たちは神の選びの民」と高慢になっていた。だから、異邦人のやもめとナアマンには奇跡が起こったが、イスラエルの人々にはそれがなかったという話を聞いて、烈火のごとく怒り、主を殺そうとさえしたのだ。

高慢になっている人々は、主を受け入れること

がむずかしい。現代でも、「人間は科学の力で何でもできる」「神に頼ることなど、弱い人間のすることだ」と思っている高慢な人々がいる。彼らは、主イエスを救い主として受け入れようと思わない。「イエスは単なる人間だ」と思っている。

三、主を受け入れる人々

今年6月に学んだように、貧しいサレプタのやもめはききに苦しんでいた。シリヤのナアマンも將軍ではあったが、重い皮膚病に苦しんでいた。二人とも、打ちひしがれている者だと言っていただろう。しかし、彼らは謙そんに、エリヤとエリシャの信じるイスラエルの神を受け入れたのである。そして、預言者の言葉に従ったとき、粉と油は豊かにやもめに与えられ、ナアマンの病は癒された。すばらしい奇跡がおこったのだ。彼らはイスラエル民族でなかったが、神は彼らをも受け入れてくださった。

主を受け入れる人々を、主もまた喜んで受け入れてくださる。

結論

これから学びを進める中で、主を受け入れた人々の多くは、「打ちひしがれている者」だったことに気づくだろう。そういう謙そんな人々こそ、主を求め、主を受け入れるのである。「自分には救い主などいない」と言う高慢な人々は、主も受け入れられない。

私たちはどちらだろうか。来るべき新年、謙そんに生きよう。そして、主に受け入れられる「めぐみの年」にならせていただこう。

研究資料

(長田)

キリストの福音の力

福音とは、「よき知らせ」と言われる。その中心は、キリストご自身である（ローマ1・2～4）。すなわち、キリストがこの世に来て下さったことが福音である。キリストの内に救いがあり、私たちの必要とするすべてがある。

キリストがナザレの会堂で開かれ、朗読されたイザヤ61・1、2は、この福音の中に隠されている大きな力を明らかにしている（18、19）。

①囚人が解放される 「すべて罪を犯す者は罪の奴隷である」（ヨハネ8・34）と言われるように、多くの人が罪の束縛の中にある。「欲している善はないで、欲していない悪は、これを行っている」（ローマ7・19）という現実に基づき、滅びの道から抜け出せないでいる。しかし、キリストは、ご自身の十字架の死を通して、罪と結果である死から解放して下さい、自由にして下さる（ローマ8・2、ガラテヤ5・1、ヘブル2・14、15）。

②盲人の目が開かれる キリストは、肉眼が見えない盲人を癒されただけでなく（ヨハネ9・1～7）、霊の目を開いて下さる方である（ヨハネ9・39）。神の愛が分からず、神の救いも分からなかった者が、目が開かれ、救われ、神を賛美するようになるのである。

③打ちひしがれている者に自由を得させる 世には多くの悲しみや絶望がある。そのようなもの

よって、打ちひしがれている多くの人がいる。しかし、キリストは、「灰にかえて冠を与え、悲しみにかえて喜びの油を与え、憂いの心にかえて、さんびの衣を与え」（イザヤ61・3）て下さる。罪を赦された喜び（ローマ4・6～8）、神に愛されている喜び（ローマ8・37～39）、天国の希望に生きる喜び（ローマ5・2）に満たして下さい。

「主のめぐみの年」（19）とは、このような福音がすべての人々に告げ知らされる時である。キリストはご自身の福音宣教のわざを通して、「主の恵みの年」を開始して下さいだったのである（21、Ⅱコリント6・2）。

テキスト

16 安息日にいつものように会堂にはいり キリストは、安息日ごとに神を礼拝しておられた。聖書を朗読しようとして立たれた。聖書朗読は、会堂での礼拝で通常行われていたのである。

18 主の御霊がわたしに宿っている（3・22、4・14）。

貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために 「貧しい人々」は、経済的な貧しさよりも、心碎かれた人々の意（イザヤ61・1の「貧しい者」は、「へりくだった者」「碎かれた者」とも訳される言葉）。キリストが語られた「貧しい人々」（ルカ6・20）も同じ意味である。福音はすべての人々に向けて語られるが、それを受け取ることができるのは、神によって心碎かれている者だけである。

わたしを聖別して下さったからである イザヤ

61・1では、「主がわたしに油を注いで」とある。油注がれた者、すなわち、メシヤとしての聖別である。

19 主のめぐみの年 「ここでの「年」は、「時」「時代」の意味。恵みの時代の開始が預言されている。21 この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した キリストが立たれるその時、その所から、神の救いのみわざが始まる。

22 この人はヨセフの子ではないか 人間イエスにしか、目が留められなかったことによる言葉。福音は、必ずしも人々に喜びをもって受け入れられるのではないことは、キリストのこのような福音宣教の働きを通して明らかである。

23 医者よ、自分自身をいやせ 十字架のもとでの「自分自身を救うがよい」（23・35）とのあざけりの言葉にも通じることわざ。

26 エリヤは…ただシドンのサレプタにいるひとりのやもめにだけつかわれた 27節のエリヤとナアマンについての指摘と共に、キリストが多くのユダヤ人に拒絶され、やがては、異邦人の間に福音が告げられるようになることについての預言的な言葉。

28 会堂にいた者たちはこれを聞いて、みな憤りに満ち 自らの真実な姿を指摘される時、多くの者は怒りに満ち、その声を心さこうとする（使徒7・57、58）。

聖書 ルカ4・16〜30
タイトル 新年におかたて
中心聖句 主のめぐみの年を告げ知らせるの
である。 ルカ4・19
目 標 すぐる年の主の恵みに感謝し、新しい年も恵みの年となるよう祈り備える。

導入

ついに、今年最後の日曜日になってしまいました。52回の日曜日、みんな励みましたが？いろいろなことのあった1年でした。また分級で話し合い、そして、みんなで神様の恵みに感謝してお祈りしましょう。さよう聖句にも出てくる「恵み」とは、クリスマスに、いえもうアドベントのときから何回もきくと賛美した「きよしこのよる」の歌にも出てくる「恵み」です、イエス様の誕生は新しい「恵みの時代」のはじまりとなったのでした。神様を信じる私たちにとっては、クリスマスが新年なのです。イエス様を信じるだけで神様に受け入れていただけるという、すばらしい新しい時代に入ったのです。

恵みを拒む人々

イエス様がみ言葉によって悪魔に勝って、いよいよ神の国を宣べ伝えるために御霊の力によって立ちあがられました。少年時代を過ごしたなつかしいナザレに行き、いつものように安息日には会堂に入って、聖書を朗読されました。渡された書

はイザヤ書だったので61・1、2を読まれ、そして、今日の中心聖句を語られ、「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」と説くと、ナザレの人々はイエス様の口から出る恵みの言葉にびっくり感嘆しました。でも、「この人はヨセフの子ではないか」「大工の子だ。まさかこのイザヤの預言したメシヤとはとても受け入れられない」と、恵みを拒みました。しかも異邦のやもめやナアマンのことを話されると、怒り狂って主を殺そうとしました。

恵みを受ける人々

ナザレの人々は、「自分たちは選民だぞ」と高慢になってイエス様の恵みを拒みましたが、6月に学んだ異邦人、シドンのサレプタにいる一人のやもめや、シリアのナアマンは、主の恵みを受け入れたのでした。やもめは貧しい者、打ちひしがれている存在でした。ひとりの息子とともに、死の寸前でしたが、神の預言者エリヤの言葉を謙遜に受け入れたので、「かめの粉は尽きず、びんの油は絶えない」(列王上17・14)という恵みの奇跡にあずかりました。預言者エリヤの時代に、イスラエルにも多くの病人がいたのに、彼らはひとりもきよめられず、シリアのナアマンだけがきよめられました。ナアマン將軍も、外側は立派な身なりでしたが、重い皮膚病のために、まさに打ちひしがれていたのです。あやうく高慢になって恵みを受けそこねるか、という時もありました。でも家来たちの言葉を素直に受けとめて、恥を忍んで、裸になって、謙遜そのものになって、ヨルダン川に7度しずみしました。するとどうでしょう。

預言者エリヤのことはのとおり驚くばかりの恵みと癒し、きよめを受けたのでしたね。謙遜になれることが恵みですね。素直に神様の前に出る時、人は謙遜な者になれるのです。

例話

今日、旧約聖書から、やもめさんやナアマンさんが主の恵みを受けたことを見ました。新約聖書では夏期学校でサウロさん、後の名はパウロさんのことを学びましたね。思い出してみてください。恵みを受ける前のサウロさん、鼻高、高慢の固まりでした。「ペニヤミン族だぞ、パリサイ人だぞ、教会の迫害者だぞ、律法も守っているぞ」と。でも、心の中は、「神様に受け入れられるにはこれでもいいのか、どうなのか」と、全く打ちひしがれていたのです。ダマスコへの道で、突然きらめいた天からの光ノそして主イエス様の声、「サウロ、なぜ私を迫害するのか」復活のキリストとの出会いで、サウロの高慢な心の目からつるこがポロリと落ちました。「そうだったんだ。キリストの十字架により私の罪はゆるされ、神様に受け入れられるんだ。ハレルヤ」。サウロは全身、神の恵みに包まれ、新しいパウロとして生まれかわりました。「しかし、神の恵みによって、わたしは今日あるを得ている」と1コリント15・10でパウロは言っています。とても味わい深い一節ですね。わたしたちも、弱くてもいい、貧しくてもいい、自分でできないことがあってもいいのです。そんな時こそ、謙遜に、主の恵みを求めて、主から一番いいものをいただけるのです。この年の恵みを感謝し、新年が恵みの年であるよう祈りましょう。

ワーク A

- 12月28日〜2月8日の聖句―ルカ10・42
- 話し方のヒント
- 「私は何でもできるし、神様なんかいらぬ」と威張っている人は、神様を信じられません。でも自分の罪がわかった人は「私は自分ではどうすることもできません。神様助けて下さい」とお祈りして罪がゆるされます。威張ってしまうことがないようにお祈りして神様に助けていただき、これからは神様の恵みをたくさんいただける子どもになりましょう。
- ワークについて
- 新年の約束として、絵を完成しましょう。

ワーク B

- 質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。
- 質問2 主の恵みは、メシヤとして来られたイエス様によって実現しました。イエス様が朗読された聖書をおいて、主の恵みとは何かを確認し、具体的内容(研究資料参照)を伝えましょう。
- 質問3 サレプタのやもめやナアマンは素直に、謙遜に主の恵みを受け入れました。しかし、イエス様の言葉を聞きながら、主の恵みを信じ受け入れない人々がいました。私たちはイエス様によって、素直に、謙遜に主の恵みを受け入れ、感謝する者とならせていただきますように。

ワーク C

- 第2問 「恵み」の中味を確認します。全部〇ですが、三つにマルして「正解です。さあ次へ」とテストのようにしないで、「二つ二つの内容を」「だねえ」と、一緒に確認し会話してください。
- 第3問 ②が正解。創造の初めから恵みは与えられているとも言えますが、ここでは、主の十字架によってもたらされた恵みの意味でとらえます。み言葉の根拠を確認します。
- 第4〜5問 今は物が豊かで高慢な時代です。与えられて当たり前ではないことを確認します。
- 第6問 自分の1年を振り返ります。④⑤のマインスと思われることもリストアップしてみましょう。そして、ローマ8・28、IIコリント12・9を開いて、神の恵みの大きさを共有します。

ワーク D

- 今日も聖書を開きながら、ディスカッションしましょう。主が来られた恵みの年がいかに素晴らしいか、今年最後にみんなで確認しましょう。
- この1年を振り返り、一人一人、どんな楽しいことがあったか、どんな悲しいことがあったかなど、話し合う時間もあれば良いのではないのでしょうか。そして新年に向けてみんなで折り合いましょう。

中高校へのヒント

- 考えてみよう
- 1 主イエスに与えられた使命が、ここではどう表現されていますか。
- 2 主イエスが「貧しい人々…盲人…打ちひしがれている者に自由を得させ」られた実例を見てみましょう。
- 3 ヨハンの年について調べてみましょう(レビ記25章他参照)。
- 4 ナザレの人々が主イエスの言葉に感嘆しながらも、受け入れようとしなかったのはどうしてですか。
- 自分にあてはめてみよう
- 1 あなたは「いつものように」礼拝をささげ、忠実な信仰生活を送っていますか。
- 2 あなたは主イエスによって様々な束縛、特に罪から解放され、自由にされましたか。目が開かれましたか。
- 3 あなたは主とそのみ言葉を前にして、どのような態度で臨んでいますか。
- 話し合ってみよう
- 1 どのような人が主の恵みを受け、どのような人が主の恵みを失ったのでしょうか。
- 2 主の恵みを受けた者は、どのような生き方をしたらよいでしょうか。
- 3 主イエスによって様々な束縛から解放され、自由にされた体験、目が開かれた体験があれば、分かち合いましょう。

感謝（仮庵の祭）
聖書 出エジプト記23章14～19節
金言 わたしは感謝の供え物をあなたにささげます。 詩篇56篇12節
目標 恵みの主に対する真の感謝について学び、感謝を現すように導く。

①感謝の日の起源

今日は収穫感謝の日です。アメリカの感謝祭は300年程前から始まったのですが、聖書の感謝祭は仮庵の祭と呼ばれ、もっと古くモーセの時代までさかのぼります。すい分昔ですね。

②仮庵の祭について

A 長い間エジプトの奴隷になっていたイスラエル人は、神様の不思議なお働きで救い出され、カナンに導かれました。その時、神様は律法をお与えくださると共に、年に3回の大切なお祭りを守るように命じ、祝いの日時と方法を詳しく示されました。その一つが仮庵の祭です。ですから、これは人間が勝手に作り出したものではなく、神様自ら定められた聖い祭日です（日本の秋祭りや勤労感謝の日と異なる）。

仮庵の祭は、第7の月（今の10月）の15日から7日間行われました。穀物、オリブやぶどう、いちじくの取り入れも済み、絞る仕事も全部終わった頃、この祭りがきます。この日が近づくと、ユダヤの国中から男の人は皆エルサレムの都へ集まります。今年も神様の恵みによって沢山の刈り入れができた嬉しさで、どの顔も神様に対する感謝で一杯です。40年の長い荒野の生活から導き出されて、夢にまで見た豊かな地カナンに落ち着いて、沢山の取入れができたのですから、躍り上がって喜びました。この月の1日になると皆フラッパを吹いて、祭りの近づいた事を知らせ、15日から7日間、オリブ山の上に仮庵（小屋）を作り、人々はその小屋の中で7日間の喜びと感謝の生活をします。豊かな恵みを与えて下さった神様に深く感謝しました。（参照 出エジプト34：22、レビ23：34、42～43）

B 長年すばらしい祭りが行われてきましたが、やがてイスラエル人はだんだん恵みに慣れ、神様への感謝の心を忘れ仮庵の祭も止めました。そのためイスラエルは敵に打ち破られ、ひどい有様となり、土地は荒れ、彼らは奴隷となってしまうした。神様の恵みを忘れる者はわざわいですね。

C 仮庵の祭の復活。そんな時、ペルシャに捕らえられていたネヘミヤが戻り、エズラと協力して仮庵の祭をもう一度行いました。人々は喜び勇んで、屋根の上、庭、広場、神殿の庭などに仮庵を作り、供え物を献げ、また、みなし子、やめなど、貧しい人々と共に分かち合い感謝しました。（ネヘミヤ8：13～18、9：36～38、10：34～39）

③真の感謝とわざ

今は、お金で何でも手に入りますが、何でも粗末に無駄に使われ、感謝の気持ちのない時代です。しかし、まず私たちに生命を与え、悪魔の手から救い出して下さった神様に感謝しましょう。そして、私たちは恵みの神様への感謝を、どのようにして実行に移せばよいと考えてみましょう。

（一九六一年11月号参照）

編集後記



『牧羊者』の第3巻をお届けできますことを感謝します。この度、執筆者の交代があり、夏のキャンプがある多忙の中に執筆していただき、執筆者の方々が多大なご協力を心から感謝いたします。

また、6月24日に局員と執筆者が集まり、よりよい『牧羊者』にと、たくさんの方々の意見交換や協議をすることができ、子どもたちの救霊のために心をひとつにさせていただきました。驚かされたことでしたが、ほぼ全員の方々が教会学校の教師の経験者であったということです。『牧羊者』が子どもたちの育成や救霊ばかりでなく、CS教師の先生方の育成にも大いに用いられていることを覚えるとき、心引き締まる思いがしました。引き続き皆様のお祈りをお願いいたします。終わりに今号の執筆者を紹介いたします。

聖書講解 鎌野 善三

研究資料 長田 栄一 石田 高保

メッセージ例 小野 淳子

ワーク 鎌野喜恵子 長谷川ひさい

中 高 科 長尾 秀紀 上森 恭子

フラッシュカード 木村 勝志

み言葉カード 竹崎 光則

また、編集を手伝ってくださった鎌野善三師、

光田隆代師、森明子師、本部事務所の仁科真人師、

鎌野幸師と岡本羊一兄、印刷会社あくこの本田慈

郎兄に、心から感謝します。

フラッシュカード

教会に1セットお送りします。

ワークブック

ワークブックA……未就学児用

ワークブックB……小学1～2年用

ワークブックC……小学3～4年用

ワークブックD……小学5～6年と中高生用

どれも3ヵ月分600円

生徒の数だけコピーして下さい。

ぜひご利用下さい

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇〇三年度 III巻

二〇〇三年九月十五日発行

発行者 岩田扶美二

滋賀県近江八幡市多賀町五〇六の一

日本イエス・キリスト教団出版局

電話（〇七四八）三三―五五一

FAX（〇七四八）三三―二二五

編集者 日本イエス・キリスト教団

教会学校局

印刷所 有限会社 あくと

電話（〇二九七）七八―五九三五

*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み